

ラブライブ! ジードサンシャイン!!

ベンジャー

新世代ヒーローズクロスシリーズ第四弾。

ある方に試しに1話だけやってみるのはどうでしょうか？　と言われたため、1話だけ書いてみました。

続きは多分ジードとサンシャインの二期が終わった辺りだと思っています。

もしくはラブオーブが終わってからか。

簡単無料ホームページとPixivにも投稿しています。

# 目次

第1話	『決めるぜ、覚悟！』
第2話	『リトルスター』
第3話	『ファーストステップ&ゼロ参上』
第4話	『A I B』
第5話	『もう1つの炎』



## 第1話 『決めるぜ、覚悟！』

かつて「ウルトラマンゼロ」とその仲間達によって倒された光の国で唯一悪の道へと墜ちた戦士、「ウルトラマンベリアル」がとある出来事から復活し、同じく復活した「ギガバトルナイザー」を手にした彼はとある宇宙で悪逆の限りを尽くしていた。

そんなベリアルを止めるため、光の国からウルトラ兄弟や宿敵であるゼロを始めとしたウルトラマン達がベリアルの悪行を止めようとその宇宙へと現れた。

そして光の国の戦士達とベリアルとの戦いに終止符を打つため、科学者でもある「ウルトラマンヒカリ」は「ウルトラカプセル」と呼ばれるアイテムを開発し、そのカプセルにはウルトラマン達の強大な力が宿っており、それらは手の平に収まるほどの大きさでしか無かったがたった1つで戦局を覆すほどの可能性を秘めていたのだ……。

しかし……ウルトラカプセルが完成したほぼ直後のことであつた……。

『ウアアアアア……』

同じ頃、地球では宇宙警備隊隊長「ゾフィー」とその「ウルトラマンベリアル」の力を合わせた「ウルトラマンオーブ サンダーブレスター」と「ウルトラマンノア」によって授けられた鎧「ウルティメイトイージス」を装着した「ウルティメイトゼロ」がベリアルと激戦を繰り広げていた。

『シューアアア…』

オーブは強烈なパンチをベリアルへと繰り出すのだが、ベリアルはそれをギガバトルナイザーで受け流し、オーブの腹部に叩きつけて電撃を流して吹き飛ばし……そこへゼロが右腕に装着された剣「ウルティメイトゼロソード」を振るい、ベリアルも同じようにギガバトルナイザーを振るって激しくぶつかり合うが一度距離を取ったベリアルはギガバトルナイザーを振るって鎌状の光線を発射する「ベリアルデスサイズ」を繰り出し、ウルティメイトゼロを切り裂き、それによってイージスも粉々に破壊されてしまいゼロはその場へと倒れ込む。

『ぬああああ…』

『っ……っ！ ゼロさん……っ！』

立ち上がったオーブはゼロを庇うように立ち、両腕に光と闇の力のエネルギー

チャージさせた後、腕を十字に組んで放つ必殺光線「ゼットシウム光線」をオーブはベリアルへと発射。

『ゼットシウム光線!!』

『フツハハハハ!!!』

しかしベリアルはギガバトルナイザーを回転させて光線をかき消してしまい、ベリアルはギガバトルナイザーから強力な稲妻を放つ「ベリアルジェノサンダー」をオーブへと喰らわせ、大ダメージを受けたオーブは本来の姿である「オーブ オリジン」へと戻ってしまう。

『ぐああああ!!!』

『フン、俺様の力とあのゾフィーの力を使っておいてそのザマか!』

そこにウルトラ兄弟や他の光の国の戦士も駆けつけるが……。

『超時空消滅爆弾、起動……!』

静かにベリアルがそう呟くと頭上に巨大な爆弾のようなものが出現する。

『フツハハハ!! 精々あがくが良いさ!』

ベリアルの用意した「超時空消滅爆弾」と呼ばれるものが地上へと落下して周り

に強烈な炎が吹き出し、ベリアルはその炎の中へと消え……ゼロ達はすぐさま宇宙まで待避するのだが……その爆弾の威力は地球どころかこの世界の宇宙そのものを滅ぼすレベルであり、ゼロとオーブは何とかなければとしたが……それをゼロの父親である「ウルトラセブン」に止めらる。

『行くな！ この宇宙は、もうもたない！』

『だけど……!!』

『クソ……この地球にも……!!』

そして地球は爆発し、それによって地球を中心に生じた次元の断層は宇宙全体に広がり……星々は消滅した……かに思われたのだが……。

\*



数年後……静岡の「浦の星学院」というとある学校……そこでは校門前に「浦の星学院 入学式」と書かれた看板が置いてあり、学校の中には部活動をしている生徒達が新入生達を勧誘しており……そんな生徒達の中にメガホンを持って「スクールアイドル部です!!」と宣言し、チラシを配って他の生徒達と同じように新入生を必死に勧誘している生徒が3人。

「スクールアイドル部です！ 春から始まるスクールアイドル部です!!」

メガホンを持ってそう叫ぶ少女の名は「高海 千歌」でチラシを配っている少女は彼女の幼馴染みでもある「渡辺 曜」……そしてどこかやる気が無さそうに「よろしくおねがいします」と新入生を勧誘している少年の名は「栗本くりもと 無爪なつめ」という名前の生徒達であり、千歌は「なっちゃんもつとやる気出して!!」とやる気の無さそうな無爪を注意する。

「いや千歌ねえ！ 僕も新入生なんだけど!? なんで新入生の僕まで勧誘の手伝いさせられてるの!?!」

「まあまあ細かいことは良いじゃん！ 部活とか特に興味ないんでしょ？ だったらちよっとくらい手伝ってよ〜」

そんな風に両手を合わせて「お願い」としてくる千歌だったが、無爪は「ふざけんな！ 確かに部活に興味ないし入る気ないけど僕だって暇じゃないんだよ！」と怒鳴り、曜はそんな無爪を「まあまあ」と落ち着かせる。

「それに千歌ねえ！ 周りよくみる！ 人いなくなってるんじゃないか！」

「ふえ……？ ああー!? ホントだあー!? だ、誰かあー！ スクールアイドル部に入りませんかあー!! スークアイドル部でえ〜す。今、大人気のお〜スクールアイドルでえ〜す！」

と慌てて千歌は大声を出して新入生を勧誘するのだが……効果は無し。

(最後の方ちよっと涙ぐんでたな千歌ねえ……)

数分前……彼女達が学校へと向かう少し前の出来事である。

『今日は、『クライシス・インパクト』の真実に迫ります』

『えー、かつてのクライシス・インパクトは隕石の落下が原因とされていますがそれは違います。これをご覧ください。クライシス・インパクトの影響で当時の記録は全て失われたとされていますが偶然にも発見された写真の1枚です。名前は……『ウルトラマンベリアル』』

千歌の家の旅館の……彼女の部屋で曜と無爪はおり、横でそんなTVの放送がされている中、千歌が「スクールアイドルやる!」と言い出した今まで覚えたスクールアイドルのダンスを2人に見て欲しいということと呼び出されたのだが……その途中ついつい転んでしまい、尻餅をつく千歌に曜は「大丈夫?」と心配そうに声をかける。

ちなみに両親のいない無爪は幼い頃にこの家に引き取られ、彼もこの旅館に住んでいたりする。

「へーきへーき! もう1度! どう?」

千歌は立ち上がり、決めポーズを取り、無爪と曜に感想を聞くと曜は「多分、出来てると思う!」と敬礼しながら答え、それに対し無爪は「まあまあじゃないかな……?」とどこか興味なさそうに答える。

「もうなっちゃん、ちゃんと見てた？」

「だって僕、スクールアイドルのことよく知らないし……。『ペガ』は分かる？」

自分の影に向かって無爪はそう話しかけると無爪の影の中から1人の宇宙人……  
「放浪宇宙人 ペガツサ星人ペガ」がひょっこりと現れる。

『うん、僕は無爪と違ってスクールアイドルのことは大好きだからね！ ダンスもそれなりについて感じだったと思うし……千歌ちゃんがスクールアイドルやるなら僕全力で応援するよ！』

とガッツポーズをしながら応援するそんなペガに千歌は「ありがと〜！ なっちゃんと違ってペガくんはちゃんと応援してくれて私嬉しい！」と抱きつき、それを見た無爪はムスツとした表情を浮かべているとそんな表情を浮かべていたことに気づいた曜がニヤニヤとした笑みで無爪を見つめてくる。

「な、なんだよ曜ねえ……！」

「昔っからなっちゃんは大好きな千歌お姉ちゃんが他の人に抱きついたりしてるといつつもそういう顔するよね〜？ 嫉妬かなあ？」

「べ、別にそんなじゃないし……！ あと別に大好きでも……！」

「じゃあ千歌ちゃんのこと嫌い？」と曜が尋ねると無爪は何も言い返せなくなっ  
てしまい、曜はそんな無爪にクスクスと笑ってしまい、それに少し腹を立てた無爪  
はそっぽを向いてしまう。

「あくもうごめんごめん？ それよりも千歌ちゃん、本当にスクールアイドル始  
める気？」

未だにペガとじゃれ合ってる千歌に曜がそう問いかけると千歌は「うん！ 新  
学期始まったらすぐに部活を立ち上げる！」と力強く答えて彼女は手書きの『ス  
クールアイドル陪』と書かれた看板を持って来て無爪達に見せる。

ちなみにスクールアイドル「部」ではなく「陪」となっているがこの誤字には誰  
も気づいていなかった。

「あはは……他に部員は？」

「ううん、まだ。 曜ちゃんが水泳部でなければ誘ってたんだけど……。 もしく  
は……」

「なんで僕を見るんだ千歌ねえ？ 入らないからね？ そもそも僕男だし！」  
そんな風に答える無爪に千歌は「えっ！？」と不満そうな声をあげるが、無爪

は「入らないものは入らないから！」と答え、それに千歌はガツカリと肩を落としてしまう。

「でもどうしてスクールアイドルなの？　今までどんな部活にも千歌ちゃん興味ないって言ってたでしょ？」

曜は疑問に思ったことを千歌に聞いてみたのだが……千歌は「えへ」とにっこりと笑うだけで答えず、そんな彼女に無爪、曜が首を傾げていると……。

ペガが時計を見て「君たちそろそろ学校行った方が良いんじゃない？」という言葉聞いて彼女達は学校に遅れそうなことに気づき、一同は慌ててジタバタとしつつも家を出てどうにかバスに乗ることができた。

バスに乗れた3人はホッと一安心し、千歌は「間に合った、危うく無駄になるところだったよ」と言いながら手作りのチラシを鞆から取り出し、曜と無爪は「そんなのまで作ってなんだ……」と少しだけ驚いていた。

「そりゃやるならちゃんとやらなくちゃ！　こういう時は『ジード』だよ！　ジーツとしてもドーにもならないんだから！」

「はあ、またそれか……」

千歌の言葉にどこか呆れた様子の無爪だったが、曜の場合は彼とは逆にそんな千歌の気持ちに自分も少しでも力になりたいと思ひ、彼女は「よっしゃ！ 今日は一肌脱ぎますか！」と新入生勧誘を手伝うことになったのだ。そして……現在に至るのだが……。

「スクールアイドル部です……。大人気、スクールアイドル部です……。」  
「こんだけやってるのに人っ子一人どころかチラシすら受け取って貰えないとは……。」  
3人の周りにももう殆ど他の生徒達はおらず、無爪はそうでもないのだが、千歌と曜が誰も来ないことで意気消沈していた時のことである。

3人の前を2人の少女……「国木田 花丸」と「黒澤 ルビィ」がどこか楽しげな様子で横切り、曜はそんな2人を見て小さく「美少女……？」と呟くと……先ほどまで後ろにいた千歌がいなくなっていた為か彼女はバランスを崩して倒れ込んでしまい、千歌に至ってはいつの間にか「あの！」と声をかけながら花丸とルビィの目の前にまで回り込んでいた。

「大丈夫か曜ねえ？ っていうか千歌ねえいつの間……。」  
「あなた達、スクールアイドルやりませんか!？」

そして突然声をかけられたことで花丸は「ずら!？」と驚きの声をあげ、千歌は「ずら?」と首を傾げるが花丸は「いえ!」と慌てて両手で口を塞ぎ……千歌はチラシを見せながら花丸とルビィを勧誘する。

「大丈夫! 悪いようにはしないから! あなた達きつと人気が出る! 間違いない!!」

「で、でもマルは……」

花丸は戸惑う様子を見せるものの彼女の後ろに立っているルビィはジィッと千歌の持つチラシを見つめており、それに気づいた千歌は「興味あるの!？」と尋ねるとルビィは「ライブとか、あるんですか!？」と興味深そうに質問をし、それに対し千歌は「ううん、これから始めるところだから……」と答える。

「だからね、あなたみたいな可愛い子に是非!」

そう言いながら千歌がルビィの手に触れるとルビィは突然青ざめた顔を浮かべ、それに花丸は慌てて耳を塞ぐと……。

「ピ……ピギャアアア……!!!」

とルビィは顔を真っ赤にして大声をあげて千歌は驚いて思わず尻餅をつき、花丸



は「ルビィちゃんは……究極の人見知りずら……」と小さく呟く。

さらにその時のことである、今度は頭上から誰かの叫び声が聞こえ……千歌が頭上を見上げると木の上から1人の少女……「津島 善子」が地面へと降り立ち……転ぶことなく高い位置から着地したため凄く足を一瞬振るわせ……直後に彼女が持っていたと思しき鞆は頭部へと激突した。

「ちょっと、色々大丈夫……?」

善子は痛がるのを堪えて笑みを浮かべて不敵に笑い出すと辺りを見回す。

「ふっふっふ、ここはもしかして地上……?」

それを聞いた瞬間一同は「ひっ!?!」と声をあげる。

「大丈夫じゃ……ない?」

「ということは……あなた達は下劣で下等な人間ということですか……?」

「ホントにいたんだな、中二病患者って……」

曜も「うわっ」とちょっと引き気味であり、千歌は「それよりも足大丈夫?」と善子の足をチョンっとすると善子は涙目になりつつも必死に堪え……「痛いわけないでしょ!?! この身体はたんなる器なのですから!」と答え、これには千歌も思

わず「えっ?」と戸惑ってしまふ。

「ヨハネにとつてはこの姿はたんなる器……あくまで仮の姿! おっと名前を言つてしまいましたね……墮天使ヨハネ……」

善子がそこまで言いかけると花丸が何かを思い出したような表情を浮かべて「善子ちゃん?」と彼女に尋ね、本名を言われた善子は戸惑いの様子を見せる。

「やっぱり善子ちゃんだあー! 花丸だよ! 幼稚園以来だねえ!」

「は・な・ま・るう……? に、人間風情が何を言つて……」

すると花丸は不意に「じゃーんけーんポン!」と彼女にじゃんけんを仕掛け、それに善子は思わずチョキを出してしまうのだが……善子のチョキは明らかにチョキとは思えない変わった形をしていた。

「そのチョキ! やっぱり善子ちゃんだ!」

「善子言うな! いい!? 私はヨハネ! ヨハネなんだからねー!!!」

そう言い残して善子はどこかへと走り去っていき、花丸は突然善子が逃げ出したことが分からず「どうしたの善子ちゃん!?」と彼女を追いかけ、ルビィは「待つてー!」とそんな花丸に慌ててついて行くのだった。

「ダメだ、あのチョキできない……!」

「いや出来なくていいでしょ……?」

と善子のチョキを真似しようとする無爪に苦笑しながら曜がツッコミを入れ、また去って行く彼女達を見て千歌は「後であの娘達をスカウトに行こう!」と拳を握りしめて気合いを入れるのだった。

すると後ろの方から「あなたですか? このチラシを配っていたのは?」という誰かの声が聞こえ、3人は声の聞こえた方へと顔を向けるとそこには1人の少女……「黒澤 ダイヤ」が千歌の作ったチラシを見つめており、ダイヤは千歌に「いつ何時、スクールアイドル部なるものがこの学校に出来たのです?」と千歌の方を見て尋ねてくる。

「あなたも1年生?」

「このバカ千歌ねえ!」

千歌がダイヤにそう問いかけると無爪は慌てて千歌の頭に軽くチョップを入れ、千歌は「いたっ!? なにするのなっちゃん!」と涙目で訴えるが……。

「なににするじゃないよ! リボンの色見るバカ千歌ねえ! 1年な訳ないだろ!」

「そうだよ千歌ちゃん！ この人は……」

曜がこっそりと千歌に耳打ちし、それを聞いた千歌は「嘘!？」と驚きの声をあげる。

「生徒……会長……?」

その後、千歌はダイヤにあとで生徒会長室にまで来るように言われ……今現在彼女はなぜスクールアイドル部の勧誘をしていたのか説明していたのだが……。

「つまり、設立の許可どころか申請もしていない内に勝手に部員集めをしていたという訳?」

「悪気は無かったんです。ただ、みんな勧誘してたんでついというかく焦った」というかゝ」

千歌は笑いながらそう説明し、ダイヤは「部員は何人いるんですの? ここには1人しか書かれていませんか?」と部活の申請書の紙を見ながらそう問いかけると彼女は苦笑しつつも「今のところ1人です」と答えるのだが……ダイヤは「部活の申請は最低5人は必要なのは知ってますわよね?」と若干肩を震わせながらそう尋ねると千歌は……。

「だあくから勧誘してたんじゃないですかあ〜」

と笑って説明するがそれに苛立ったダイヤは申請書の紙を机の上に「バンッ!」と叩きつけると力強く叩きつけ過ぎたせいでダイヤは「あいつた〜!?!」と手を痛めてしまい、それに千歌は思わず笑ってしまうが……そんな彼女にダイヤは人差し指を突きつけ「笑える立場ですよ!?!」と怒鳴りあげる。

「す、すいません……」

「兎に角、こんな不備だらけの申請書受け取れませんわ」

「えっ……!?!」

ダイヤの言葉に千歌はショックを受け、生徒会室の扉が開いて外から曜が「千歌ちゃん、1回戻ろ?」と声を……千歌はだったら5人集めてまた持って来ると言い残して立ち去ろうとしたのだが……ダイヤは「別に構いませんけど、例えそれでも承認は致しかねますがね?」と答え、それに千歌は「どうしてですか!?!」と驚きの声をあげる。

「わたくしが生徒会長でいる限り、スクールアイドル部は認めないからです!!」

とダイヤがそう宣言すると同時に強い風が窓から入り、千歌は涙目で「そ、そん

なあ〜  
「泣」と悲痛な声をあげるのだった。

\*

放課後、千歌、曜、無爪の3人は船に乗ってある場所へと向かっており……船に乗ってる千歌はダイヤに言われたことにショックを受けて落ち込んでいた。

「はあ、失敗したな。でもどうしてスクールアイドル部はダメなんて言うんだろ？」

「嫌い……みたい。クラスの娘が前に作りたいて言いにいった時も断られたって……」

曜が言いづらそうに千歌にそう説明すると千歌は「ええ!? 曜ちゃんダイヤさんがスクールアイドル嫌いなもの知ってたの!?!」と驚きの声をあげ、無爪も「そう言えばそんな話聞いた気がするな……」と小さく呟く。

それに曜は両手を合わせて「ごめん!!」と千歌に謝り、千歌が夢中だったから言い出しづらかったらしい。

「兎に角、生徒会長の家、網元で結構古風な家らしくて。だから、ああいうチャラチャラした感じの物は、嫌ってるんじゃないかって噂もあるし……」

「……チャラチャラじゃないのにな……」

「まあ、よく知らない人が見ればそう見えるのかもな……」

曜、千歌、無爪の3人はそんな話をしている内に船は目的地へと到着し、すぐそのダイビングショップへと向かうとそこにはダイビングスーツを着た1人の少女……「松浦 果南」がおり、果南は千歌達が来たことに気づいて彼女達の方へと振り返る。

「遅かったね、今日は入学式だけでしょ？」

「カナねえ……。それが千歌ねえが色々やらかしまして……」

「ちよっ、なにその言い方!? 私がなんか悪いことしたみたいじゃん!?!」

千歌が「ムスツ」と睨み付けるが無爪は「全然怖くないわ」と笑い、それに千歌が「もー!」と怒るがそれを果南が「やめなよ2人とも」と2人の喧嘩を止める。

「それよりはいいこれ! 回覧板とお母さんから!」

千歌がそう言って果南に渡したのは大量のみかんと一緒に袋に入った回覧板であり、果南は「またみかん?」と苦笑しながら尋ねると千歌は「文句ならお母さんに言ってよ」と言葉を返しそれに果南は思わず笑ってしまう。

それから3人は少しだけダイビングショップのベランダで果南と今日あったことを話すこととなり、曜は「それで果南ちゃんは新学期から来れそう?」と尋ね



ると果南は「それはまだかかりそうかな」と答える。

「まだ家の手伝いも結構あつてね。父さんの骨折も治るのもうちちょっとかかりそうだし」

「そっかあ、果南ちゃんも誘いたかったな」

「誘う？ なにを？」

果南が尋ねると千歌は「うん、私ね、スクールアイドルやるんだ！」と元気よく答え、それを聞いた果南は少しだけ暗い表情を浮かべたが……3人はそれに気づくことはなく、彼女は「でも私は3年生だしね」と答えながらすぐそこにあるある物を取りに行く。

「知ってる？ 凄いだよお！」

と千歌がスクールアイドルのことを説明しようとする果南に「お返し！」と千歌の顔に干物を押しつけたのだ。

「また干物？」

「文句なら母さんに言ってよ」

先ほどの千歌と同じように言葉を返す果南に千歌はなにも言えなくなってしまう

い、果南は「まっ、そういうことでしばらくは休学が続くから学校でなにかあったら教えて？」と言ひ、千歌はそれに「う、うん」と頷くとその時……大きな音が聞こえて空を見上げると1台のヘリが空を飛んでおり、千歌は「なんだろう？」と首を傾げる。

「……小原家でしょ？」

果南がそう答えると無爪はどこか険しい表情の果南に気づき、彼は「カナねえ、表情険しいけどどうかした？」と少し心配するが彼女はすぐに笑みを浮かべて「なんでもないよ」と無爪の頭を撫でる。

「カナねえ、僕もう小さくないんだから頭撫でられるのちょっと嫌なんだけど……？」

「えー？ 良いじゃ無い、弟みたいなもんなんだから♪」

「あっー！ 私もなっちゃん頭の撫でる♪」

「じゃあ私も！ ヨーソーロー!!」

という感じで千歌や曜に果南に一斉に頭を撫でられる無爪は「やめんかー!!」と怒るのだが結局最後まで3人の気が済むまで彼女達が撫でるのを止めることは無

かった。

一方、同じ頃ヘリの中では1人の少女……「小原 鞠莉」が乗っており、彼女はヘリから街を見下ろし小さく呟いた。

「……2年ブウ〜リですか」

\*

その後、無爪と千歌は帰りのバスを降りて曜と別れ2人は同じ道を歩いて帰る

のだが……千歌はチラシを「どうにかしなちゃん」と呟いており、無爪はそんな千歌を見て「まだ諦めてないんだ」と言うが千歌はそれにガッツポーズをして「当然だよ！」と答える。

そんな会話を2人がしていると千歌は1人の制服を着た少女が立っていることに気づいき、それに無爪も気づく。

「この辺だと見かけない娘だな……」

「うん」

するとなんとその少女はなんと服を当然脱ぎだし、千歌は思わず「へっ？」と声を出し無爪は顔を真っ赤に慌てて目を瞑った。

「ちょっとなんで急に服を脱ぎ始めるのあの娘!？」

「大丈夫だよなっちゃん！ あの娘下に水着着てるみたいだから！」

「あっ、なら安心……じゃないだろ!? まさかあの娘海に飛び込む気か!? まだ4月だよ!？」

無爪の言う通り服を脱いで水着姿となった少女は海に飛び込もうとしており、それを千歌が慌てて少女の腰に後ろからしがみついて引き止めるが……。

「まだ4月だよ!? 死んじゃうから!？」

「離して行かなくちゃいけないの!!」

無爪も千歌と同じように少女を止めようと駆け出すが……次の瞬間、千歌と少女は足を滑らせて海の中へと「ドボン！」と大きな音を立てながら落っこちてしまった。

「うわああああ!!! 千歌ねえ!？」

無爪は慌てて上の服を脱いで2人を助けるために自分も海に飛び込んで行き、その後……2人はどうにか無爪に助け出され、それから3人は焚き火をして身体を温めていた。

「大丈夫……? 沖縄じゃないんだから。海に入りたければダイビングショップもあるのに……」

千歌は少女にタオルを渡しながらそう話すが少女が言うには「海の音が聞きたかったの……」と答え、千歌と無爪は「海の音?」と首を傾げ、千歌は「どうして?」と尋ねるが……少女は答えようとせず、千歌は諦めて「分かった、じゃあもう聞かない!」と言うのだが……。

「海中の音ってこと!？」

「おいもう聞かないんじゃないかなかったのか千歌ねえ？」

しかしそんな千歌の言葉に少女はクスリと笑い、少女は「私、ピアノで曲作ってるの。でもどうしても海の曲のイメージが浮かばなくて……」と話し始めそれに千歌は興味深そうに感心した。

「ふーん。曲を？ 作曲なんて凄いな！ ここら辺の高校？」

「……東京」

「東京!?! わざわざ!?!」

少女の答えに千歌は驚きの声をあげ、無爪もこれには少しばかり驚きの表情を浮かべていた。

すると千歌は少女の隣に座り込み「そうだ！ じゃあ誰かスクールアイドル知ってる？」と尋ねると少女は「スクールアイドル？」と首を傾げ、千歌は東京ならば有名なグループが沢山いるのではないかと思いきや彼女に話を聞こうとしたのだが……。

「なんの話？」

どうやら彼女はスクールアイドルについてはあまり詳しくないらしい。

(そりゃ全員が知ってる訳ないよね……)

これには千歌は驚き「まさか知らないの!？」と声をあげ「スクールアイドルだよ!? 学校でアイドル活動して、大会も開かれたりする!」と少女に説明するが少女はやはりスクールアイドルのことはよく分らないらしい。

「有名なの?」

「有名ななんてもんじゃないよ! ドーム大会も開かれたりするぐらいで超人気なんだよ! って私も詳しくなくなったのは最近なんだけどね」

それに少女は「そうなんだ、私ずっとピアノばかりやってきたからそういうの疎くて……」と話し、そんな彼女に千歌は「じゃあ見てみる? なんじゃこりゃってなるから!」とスマホを取り出す。

少女はそんな千歌の言葉に「なんじゃこりゃ?」と首を傾げるが、千歌は「そうなんじゃこりゃ!」とだけ答えてスマホのある9人のグループのスクールアイドルの画像を見せて千歌は「どう?」と感想を尋ねる。

「うーん、どうって言われても……普通? いえ! 悪い意味じゃなくてアイドルって言うからってつきり芸能人みたいな感じかと思って……!」

「だよね！ だから……衝撃だったんだよ」

そんな千歌の言葉に少女は「えっ？」と少しだけ戸惑う。

「あなたみたいにならずとピアノ頑張ってきたとか、大好きなことに夢中でめり込んで来たとか、将来こんな風になりたいって……夢があるとか……。そんなの1つも無くて……。私ね、普通なの。私は普通星に生まれた、普通星人なんだって……。どんなに変身しても、普通なんだって。そんな風に思ってた、それでも何かあるんじゃないかって……思ってたんだけど、気がついたら高2になっただ……」

千歌は昔のことを思い出しながら少女にそう話し始めると突然両手で頭を抱えて「まっず！ このままじゃ本当にこのままだぞ!? 普通星人を通り越して普通怪獣ちかちーになっちゃうって！」と身体で慌てる様子を表現する。

「なんだよ普通怪獣ちかちーって。弱そう……ふふ」

「もう、笑わないでよなっちゃん！ それでまあガオーって！ ビー！ ドカーンって!!」

そんな風に少しはしゃいだ後、千歌は少女の方へと振り返って笑みを浮かべると



少女もそれに釣られるように「フフ」と笑みを浮かべた。

「そんなとき、出会ったの。あの人達に……」

千歌はそう言いながら以前東京に行った時、「UTX」という学校の大きなモニターに先ほど見せた千歌がスクールアイドルを始める切っ掛けにもなったスクールアイドル……「μ's」のライブが映し出されていた時のことを思い出していた。

挿入歌「START・DASH」

「それで思ったの。一生懸命練習してみんなで心を1つにしてステージに立つとこんなにもかっこ良くて感動できて……素敵になれるんだって！ スクールアイドルってこんなにも！ こんなにも！ こおーんなにも!! キラキラ輝けるんだって!!」

千歌はとても楽しげに少女にそう語り、「気づいてたら全部の曲を聴いてた！ 毎日動画見て歌を覚えて！ そして思ったの！ 私も仲間と一緒に頑張ってみたい、この人達が目指したところを私も目指したい」と語る。

「私も……輝きたいって!!」

すると少女は千歌に「ありがとう」とお礼を言い、少女は「なんか頑張れって言

われた気がする。今の話」と先ほどと比べると少しだけ表情も柔らかくなり、それに千歌も「ホントに？」と嬉しそうだった。

「ええ、スクールアイドル、なれると良いわね」

「うん！ あっ、私、高海 千歌！ あそこの丘にある、浦の星学院って高校の2年生!!」

「同じく栗本 無爪です。 1年生、よろしく……」

すると少女は立ち上がって「女の子の方とは同じ年ね」と呟き、自分も名前を名乗る。

「私は桜内 梨子。 高校は……音ノ木坂学院高校……」

それから梨子と別れた無爪は千歌だけを先に家へと帰らせ、少し寄りたいたいところが出来たため、帰りが少し遅くなることだけを伝えて無爪はある場所へと向かうこととなった。

するとその時、ひょっこりとペガが顔を出し「またあの場所に行くのかい？」と

\*

尋ねると無爪は「そうだよ」と頷いた。

そこは古びたとある天文台であり、周りに人の目もなかったためペガは無爪の影から出てくる。

『確か無爪が赤ちゃんの時、ここで保護されたんだよね』

「ああ。それで千歌ねえ達の両親が引き取ってくれて……今はあの旅館で暮らしてる訳だ」

『君のお父さんとお母さん、どんな人だったのかな？』

ペガがそう疑問に思ったことを口にすると「さあな」としか答えず、天文台の近くへと寄る。

『さあなって……両親のこと、知りたくないのかい？』

「知りたくない訳じゃないんだ……。だからこうしてたまにここに何か手がかりがあるんじゃないかって来てるんだ……」

天文台の壁に触ろうとしたその時、突然無爪の目の前に浮遊する球体が現れ……無爪は「うわ!？」と驚きの声をあげて尻餅をついてしまう。

「なんだよ……これ!？」

『大丈夫かい無爪!』

「あ、ああ……」

無爪はどうか立ち上がって目の前を飛ぶ球体を恐る恐る人差し指で触って見ると突然「バチィ!」という音が鳴り、無爪は慌てて指を引っ込める。

「いった!? 刺しやがったこいつ……!」

『Bの因子、確認。基地をスリープモードから通常モードへと以降します。』

権限が上書きされました。マスター、エレベーターへどうぞ』

球体が突然喋りだし、目の前にエレベーターのようなものが出現し無爪とペガは顔を見合わせて首を傾げる。

『お乗りください』

「あっ、はい……」

取りあえず、無爪とペガは言われた通りエレベーターへと乗り込み、エレベーターは地下を目指して進みドアが開くとそこにはそれなりに大きな部屋があり、無爪達を案内してきた球体はその中央に設置された黄色い球体のようなものの近くに「コトン」と置かれ、そして黄色い球体が光り出すと突然無爪達を案内して来た

球体と同じ声で喋り始める。

『お待ちしておりました、マスター』

「君は……？」

『報告管理システム、声だけの存在です。そしてここは天文台の地下500メートルにある中央司令室です。この基地はマスター、あなたに譲渡されました』

無爪はペガの顔を見てもしかしてこの球体は誰かと間違えているのではと思ったが……球体は「誤認ではありません」と答えた。

『既に血液の採取を行いDNA検査を終了させています』

「……あの時か！」

『っていうか、君の声なんかどこかで聞いたことある気がするんだよね？ 誰だったかなあ？』

ペガは無爪の隣でそんなことを呟いていたが無爪は先ほど球体に触った時のことを思い出し、球体は「お渡しするものがあります」と中央のテーブルに幾つかのあのアイテムを出現させた。

『フュージョンライズ用のマシン、ライザーとウルトラカプセルです』

「これを……僕に？」

『はい』

しかし無爪にはどうしてこれを自分に球体がくれるのか分からず、そのことについて尋ねると球体が言うには「時が来ればあなたに渡すことになっていたので「す」と答え、球体が言うにはそのライザーというものを使用することで無爪は本来の姿に戻り力を行使することができるといいます。」

「本来の姿……？」

『あなたはこの星の住人ではありません。あなたはウルトラマンの遺伝子を受け継いだ異星人です……』

「なっ……！」

その球体の言葉に無爪は衝撃を受けて驚愕したが、一方で無爪はそれについて少しだけ心当たりがあった。

それは以前、高い所にある物を取ろうとしてジャンプしたら天井にまで頭をぶつけてしまったことや……ペガが以前にも「君は地球人じゃない、そう思い込んでんだ」と指摘を受けたことがあったため、その時はまさかと思っていたが……。

本当に宇宙人……しかも都市伝説だと思われていた光の巨人「ウルトラマン」であることを球体から教えられ、無爪は啞然としていた。

一方その頃……とある場所で黒い服を着込んだ1人の男性が無爪に渡された物と同じ「ライザー」を手に持っており、男性はウルトラカプセルと酷似した「怪獣カプセル」を取り出し、その「古代怪獣 ゴモラ」と「どくろ怪獣 レッドキング」という2体の怪獣のカプセルを専用の装填ナツクルへ装填し、それをライザーでスキャンする。

「時は来た。 ゴモラ、レッドキング……。 これでエンドマークだ！」  
『フュージョンライズ！』

すると男性の姿が「ウルトラマンベリアル」の姿へと変わり、ベリアルの前にゴモラとレッドキングが現れると2体は粒子のようになってベリアルの口の中へと吸い込まれ、ベリアルはゴモラとレッドキングの姿を組み合わせたような巨大な怪獣……「ベリアル融合獣 スカルゴモラ」へと変身する。

『ゴモラ！ レッドキング！ ウルトラマンベリアル！ スカルゴモラ！』  
場所を戻し、無爪達はというと……。



『マスター、怪獣が出現しました』

「怪獣……!?!」

『ええ!?!』

突然球体にそんなことを言われて無爪とペガは驚きの声をあげ、1つのモニターを出現させるとそこには確かに怪獣……スカルゴモラが街を破壊しながら歩いていく光景が映し出されており、無爪はまさに空いた口が塞がらないという状況だった。

『怪獣って、ホントにいたんだね……』

「ってこの場所……なんか見たこと……。 あっ! ここって近くに家の宿がある場所だ」

無爪は慌ててスマホを取り出し、千歌に連絡を取ろうとするのだが……彼女は電話に出ることはなく、無爪は「クソ!!」と床を蹴る。

『マスター、現場までエレベーターで向かいますか?』

「行けるのか!?!」

『座標を設定できます。通信には先ほどのマシンを使ってください。触れていれば会話は可能です』

それを聞いたペガは「なにする気!? まさかあの怪獣と戦うつもり!？」と心配するが……。

「このままじゃ千歌ねえが危ないかもしれないんだ!! 千歌ねえだけじゃない、街を滅茶苦茶にされて多くの人が死ぬかもしれない。僕なら……ウルトラマンなら、怪獣を倒すことってできるんだろ!？」

無爪のその質問に対し球体は「可能です」と答え、それを聞いて「なら僕が行くしか無い!」と無爪はスカルゴモラのいる場所に連れて行くように頼む。

『でも無爪……自衛隊とかが怪獣を倒すかもしれないし……』

「自衛隊を待ってる時間なんてない! ペガはここで待っていてくれ」

無爪はそう言ってエレベーターへと乗り込むと「レム、頼む」と言うが「レム」と呼ばれた球体は「レムとは私のことですか?」と尋ねる。

「ああ、名前がないと色々と不便だろ?」

『レポート、マネージメントのイニシャルですね?』

「まあ、そんなところかな? という訳で頼むよレム。それと、僕のことも『無爪』って呼んで?」

球体改め「レム」は「分かりました、無爪」と無爪に返事をする。エレベーターの扉を閉じて転送を開始し、スカルゴモラのいる場所にまで無爪を転送する。

\*

無爪はエレベーターに乗って転送された場所へと辿り着き、エレベーターから出てスカルゴモラの姿を確認する。

「……これどこで○ドアだよなあ……」

無爪はそんなことを呟いたが今はそんなことを言っている場合ではないと思ひ、腰につけている装填ナツクルに触れてレムと通信を行う。

「レム、状況は？」

『怪獣の進行方向に大勢の人々が逃げ惑っています。フュージョンライズしますか？』

レムの問いかけに無爪は「ああ」と答え、レムから「フュージョンライズ後の名称を決めてください」と言われる。

「……」

そしてこの時、無爪は千歌の言っていたある言葉を思い出していた。

『こういう時は『ジード』だよ！ ジーツとしてもドーにもならないんだから！』

その言葉を思い出していた無爪はフュージョンライズ後の名称を「ジード」にすることに決め、ライザーも「そしてこれはジードライザーだ！」と新たに名付け、ジードライザーを取り出す。

「ジーツとしてても、ドーにもならねえ!!」

無爪はそう言い放つと腰のカプセルホルダーの始まりの巨人「初代ウルトラマン」のカプセルを取り出し、スイッチを押して起動させるとそこからそのウルトラマンが出現する。

「融合!!」

ウルトラマンのカプセルをナツクルに装填させた後、さらにそれとは別に最凶最悪のウルトラマンと呼ばれた「ウルトラマンベリアル」のカプセルを取り出し起動させると今度はそこからベリアルが出現。

「アイ、ゴー!!」

同じくベリアルのカプセルをナツクルに装填し、ジードライザーで装填したカプセルをスキャンする。

「ヒア、ウィー、ゴー!!」

『フュージョンライズ!』

「決めるぜ、覚悟!!」

そしてジードライザーを掲げて胸の前でスイッチを押すとウルトラマンとベリア

ルの姿が重なり合い、無爪は2人のウルトラマンの姿を合わせた「ウルトラマンジード プリミティブ」へと変身を完了させたのだ。

「はああ!! ジィーローード!!!」

『ウルトラマン! ウルトラマンベリアル! ウルトラマンジード!! プリミティブ!!』

そしてジードが大地へと降り立ち、スカルゴモラの前に立ち塞がる。

その様子を基地から見ていたレムは「フュージョンライズ、成功しました」と無爪に変身が成功したことを伝え……それを見たペガはその姿を見て「アレは……!!」と驚いた様子を見せていた。

また怪獣が出現し、慌てて家から出て避難していた千歌やその姉2人である「高海 志満」「高海 美渡」はジードが出現したことで一度足を止め、彼女等は唾然とした様子でジードを見上げていた。

「あれ……なに?」

「さ、さあ……?」

美渡と志満が不安そうにジードを見つめる中、千歌はジードの目を見て「あの目、



壊れた瓦礫を拾いあげる。

『どうなったんだ!? 建物も道路も、柔らかい! まるで砂で作ったみたいだ!!』

『今の君……まるで……』

すると、スカルゴモラは再び進行を開始する。

『これ以上、進行させてたまるか!!』

今はそんなことを気にしている場合ではないとジードはそう言い放ちながらスカルゴモラに飛びかかるのだがスカルゴモラは尻尾を振るってジードを海の方へと叩き落とし、スカルゴモラはジードに追撃しようと接近し、ジードに噛みつこうとするがジードはスカルゴモラの顔を左手でどうにか押さえつけて右拳を何発もスカルゴモラの胸部に叩き込む。

「グルアアアアアア……」

だがスカルゴモラは右足を振り上げてジードを蹴り飛ばし、倒れ込んだジードを踏みつけようとするがジードはそれをどうにか避けて立ち上がり、スカルゴモラの顔を狙って何発も拳を叩き込んでいく。

『シュアア!!』



「ギシャアアア!!!」

しかしスカルゴモラはジードの両手を掴んで受け止め、頭突きを喰らわせるとそれにジードはフラつき、スカルゴモラは尻尾を振るってジードを叩きつけて吹き飛ばす。

『ウグアアア!!!?』

ジードはすぐに立ち上がって助走をつけてからのドロップキックをスカルゴモラの腹部に喰らわせ、スカルゴモラは多少後退するものの再びジードに向かって尻尾を振るって攻撃を仕掛け……ジードはそれをどうにか両手で受け止める。

『ヘアツ!!』

ジードは尻尾を掴みそのまま力いっぱいフルスイングし、スカルゴモラを投げ飛ばす。

勿論、街に被害が及ばないように海の上に叩きつけ、倒れ込んだスカルゴモラに馬乗りとなってチョップを繰り返すがスカルゴモラはすぐに起き上がってジードを振り落とし、スカルゴモラはジードに向かって口から「スカル振動波」という光線を吐きだしてジードに直撃させ、それを喰らったジードは身体中から火花を散らし

て倒れ込んでしまう。

『ウグアアアアア…!』

それによってジードの胸部のクリスタルであるカラータイマーは激しく点滅を始めてレムから「間も無く活動限界時間です」ということが伝えられ、レムが言うにはこの星でウルトラマンでいられるのは3分が限界らしく、次に変身できるのは約20時間後だというのだ。

『ぐっ……20時間も……待ってられるか……!』

そしてスカルゴモラはジードを放ったらかしにして再び千歌達のいる方へと進行を開始し……それをジードはどうか立ち上がろうとする。

『まずい! 千歌ねえが……! みんなが危ない!!』

どうにか立ち上がったジードはスカルゴモラに向かって駆け出して行く。

挿入歌「GEEDの証」

ジードは背後からスカルゴモラに掴みかかり、どうにか持ち上げて千歌達とは真逆の方へと投げ飛ばす。

『マスター、光子エネルギーを放出することを提案します』

『レム……。そのやり方は!』

『もう知っている筈です』

レムの言葉に無爪は「はあ!」と驚くが……。突然、その方法が頭に浮かび、ジードは「よし!!」と言いながら千歌達を守るように立つ。

『千歌ねえ達に……。近づくなア!!』

するとジードは全身を発光させながら赤黒い稲妻状の光子エネルギーを両手にチャージさせ、両腕を十字に組んで放つ必殺光線「レッキングバースト」をスカルゴモラに向かって発射する。

『レッキングバーストオ!!!』

ジードの放った光線……。レッキングバーストがスカルゴモラに直撃し……。身体中から火花を散らしながらスカルゴモラは倒れて爆発したのだった……。

「やったあ!! 勝ったあ!!」

ジードがスカルゴモラに勝利し、千歌や周りの子供達は喜びの声をあげ……。ジードは肩で息をしながらも千歌達を守れたことに安心し、その姿を消し去るのだった。そして基地にいるペガはレムに「無爪の中に眠る、強大な力って……。?’」と疑

問に思ったことを質問するとレムはペガに答えたのだ。

『血液からBの因子が確認されました。彼はこの基地の本来のマスターと99。

9%の確立で親子関係です』

『親子ってことは……無爪の両親のことを知ってるの!?!』

『はい、彼の父親は……ベリアル、ウルトラマンベリアルです』

\*

怪獣の出現により、ほんの数日間だけ浦の星学院は休校となったのだがジードが即座に怪獣を退治したためにそこまで大きな被害が出ることはなく、そのために学校はすぐに授業が再開されることとなっていた。

ちなみに千歌の家は無事だった。

そして千歌、曜、無爪は何時も通り3人でバスで通学し、バス停を降りた際千歌がもう1度スクールアイドル部の申請に行くと言い出したのだ。

「うん！ ダイヤさんのところに行ってもう1回お願いしてみる！」

「でも……」

「諦めたらダメなんだよ！ あの人達も歌ってた！ その日は絶対来るって！」  
そんな千歌を見て曜は笑みを浮かべて「本気なんだね……」と呟く。

「ジーツとしても、ドーにもならないもんね、千歌ねえ」

「うん！」

また無爪も本気でスクールアイドルを目指す千歌を見て笑みを浮かべ、すると曜は千歌の隙を突いて彼女の持つてる申請書を奪い取りそれに千歌は「ちょっと!？」と怒るが曜は千歌の背中へと突然持たれる。

「私ね、子供の頃からずーっと思ってたんだ。千歌ちゃんと一緒に夢中で、何かやりたいなあって」

「曜ちゃん……?」

すると曜は鞆からペンを取り出し、なんと申請書に自分の名前を書き込んだのだ。

「だから水泳部と掛け持ちだけど！ えへへ、はい！」

そして自分の名前を書き込んだ申請書を千歌に渡し、そんな彼女の行為に千歌は思わず涙になってしまい、思わず曜へと抱きついたのだ。

「う、うう……！ 曜ちゃあくん!!」

「うわあ!? く、苦しいよお……」

「よおーし！ ぜったい凄いスクールアイドルになろうねえ!!」

千歌と曜はそう高らかに宣言したのだが……先ほど千歌が曜に抱きついた際、彼女は申請書を手放してしまい、その申請書は「ポチャリ……」と音を立てて水たまりの中に入ってしまい「あぁー!!!」と2人揃って叫ぶのだった。

そしてそれを見た無爪は頭を抱え「バカ千歌ねえ……」と呆れるのだった。

\*

その後、結局千歌と曜の2人はそのずぶ濡れの申請書をダイヤに提出しに行ったのだが彼女は「ふう。よくこれでもう一度持ってこようという気になりましたわね? しかも1人が2人になっただけですわよ?」と彼女も呆れた様子を見せていた。

「やっぱり簡単に引き下がったらダメだって思って!! きっと生徒会長は私の根性を試しているんじゃないかって!!」

しかしそんな千歌の言葉に対しダイヤは「違いますわ!!」と大否定。

「何度来ても同じとあの時も言ったでしょ!？」

そんなダイヤの言葉に千歌は「どうしてです!？」と尋ねるがダイヤは「この学校にはスクールアイドルは必要ないからですわ!!」と答えるが当然それだけでは千歌は納得せず「なんでです!？」と聞き、2人は睨み合う。

それを曜は「まあまあ」と止めるがダイヤは「あなたに言う必要はありません!!」と言い放ち、そもそもやるにしても曲は作れるのかと言われてしまい、それについて千歌達は全く考えていなかったらしい。

「ラブライブに出場するには、オリジナルの曲でなくてはいけない。スクールアイドルを始める時に最初に難関になるポイントですわ」

(スクールアイドル嫌って聞いてたけど詳しいなあの人)

部屋の外で話を聞いていた無爪はそんなことを思っていたが……だが彼女の言う通りだと思い、ダイヤの「東京の高校ならいざ知らず、うちのような高校だとそんな生徒は……」という言葉にも無爪は納得した。

(やっぱ難しいのか……)



\*

「1人もいなあゝい、生徒会長の言う通りだった」

それから千歌と曜は無爪を巻き込んで作詞作曲ができる生徒を学校中捜し回ったのだが誰1人として見つからず、千歌と曜の2人は机に突っ伏していた。

「はあ……なんで僕まで……」

「っっていうかなっちゃんもマネージャーとかで良いからアイドル部入ってよ」

「それはヤダ。部活入ったらリアルタイムでドンシャイン見れないだろ」

ちなみに無爪が言う「ドンシャイン」というのは「爆裂戦記ドンシャイン」とい

う名前の特撮番組であり、彼はこの作品の大ファンなのだ。

それに曜は「好きだね」と言いながら無爪の頭を撫で当然ながら無爪は恥ずかしそうにして「やめてよ！」と陽の手を振り払い、もう少しで授業が始まるので無爪は「じゃあまたね」とだけ言い残して2年の教室を出て行くのだった。

「じゃあねなっちゃん。よし、こうなったら!!」

すると千歌が音楽の教科書を取り出し「私が！　なんとかして!!」と自分でなんとかしようとするが曜に「できる頃には、卒業してると思う」と的確なツッコミを受け千歌も「だよな」とその辺は取りあえず諦めた模様。

とそこで授業のチャイムが鳴って担任の教師が入ってくると今日は転校生が来ていることを生徒達に説明し、教師がその転校生に入ってくるように言うとその転校生の少女が教室へと入ってくる。

「くしゅん！　失礼、東京の音ノ木坂という高校から転校してきました」

その少女を見ると千歌は「わあ……！」と嬉しそうな顔を浮かべる。

「桜内……梨子です。よろしくお願いします」

それはこの前出会った少女で千歌は「奇跡だよ!!」と勢いよく立ち上がり、梨

子は千歌の姿を見るや彼女も「あ、あなたは……!」と驚きの表情を浮かべる。

(それが……全ての始まりだった……!)

ED 「決めたよhand in hand」

そして千歌は梨子の元までやってきて手を差し伸べる。

「一緒に、スクールアイドル始めませんか!？」

そんな千歌を見て梨子は一瞬笑みを浮かべると……彼女は頭を下げ……。

「ごめんなさい」

と断ったのだ。



## 第2話 『リトルスター』

1話の変更点。

無爪が高海家に同居。

レムの名前をつける時のシーンをちょっと追加。

ちなみに起動可能な3つ目のカプセルがあります。

あと今回ジード本編のような戦闘シーンが良かったとか言われるような気もしますが、それはそれ、これはこれです。

「ハア……ハア……！」

彼女、「桜内 梨子」が千歌や無爪と出会った日の夜……。

彼女は突如として眩い光が胸から溢れ、それとほぼ同じタイミングであの怪獣……スカルゴモラが出現した。

光はすぐに収まったが、スカルゴモラがこちらに向かって歩いて来ていることに気づいた梨子は必死に怪獣から逃げる為に走っていた。

しかし、その後は「ウルトラマンジード」が駆けつけ、スカルゴモラを撃破したことでその日以来、身体に異常も無く、胸がまた光ることもなく事なきを得るのだった。

\*

それから数日後の夜……。

『音ノ木坂高校 1年、桜内 梨子さん。 曲は『海にかえるもの』』

とあるピアノのコンクール会場にて、そうアナウンスが流れて紹介されると梨子が現れて彼女は観客たちに向かって一礼した後、椅子に座りピアノを弾こうとするのだが……。

「……っ」

梨子はどこか不安そうな表情を浮かべており、なぜか手が震えていた。

何時まで経っても演奏が始まらないため、観客達はざわつき始める。

それが……少し前の、彼女……桜内 梨子に起こった出来事。

現在、彼女は以前のピアノコンクールで演奏ができなかった時のことを思い出しながらもどうにかピアノを弾こうとするのだが、結局は弾くことが出来ず、気分転換にベランダに出て静かに空を見上げた。

\*

その翌朝、無爪の部屋にて。

『先日、出現した巨大生物に対し『怪獣』という呼称を用いることが本日正式に決定いたしました』

彼の部屋でなぜか曜と千歌が一緒になってニュースを見ており、無爪自身も「なんで僕の部屋でテレビ見てるんだ」とでも言いたげな視線を2人に送っていたが、

2人は全くそのことに気づいていない。

『一方、怪獣と対峙した巨人はクライシス・インパクト時に撮影された存在ではないかとの見方もあります』

ニュースに映る人物はクライシス・インパクト時に撮影されたウルトラマンベリアルと今回現れたウルトラマンジードの写真を比較し、目の形などが似ていることから同一人物、または何か関連があるのではないかという説が出ており、またその人物はジードのことも危険視していた。

「ねえ、千歌ちゃんのはあの怪獣と巨人を近くで見たんだよね？ やっぱり、怖かった？ 私は、テレビでしか見てないんだけどちょっとどっちも怖いかなって思っちゃうんだよね……」

「まあ、確かに怪獣は怖かったけど……」  
と千歌がそこまで言いかけた時である。

「ぼ、僕ちょっとトイレ行ってくるね!!」

どこか慌てた様子で無爪は部屋を出ていき、そんな彼の慌てた様子に千歌と曜は互いに顔を見合わせて「んっ？」と首を傾げるのだった。



それから無爪は廊下をしばらく歩いた後、「はぁ」と大きなため息を吐いてその場に蹲ると、無爪の影の中からヒョコッとペガが顔を出す。

『無爪、大丈夫？』

「曜ねえに怖いって言われるのがこんなにショックだなんて思わなかったよ。曜ねえでこんなにショックなんだ。千歌ねえにも同じようなことを言われたら僕、二度と立ち上がれないかも……」

『それは、重症だね……』

ペガは苦笑しつつ蹲る無爪の背中をポンッとそっと手を置き、励ます。

「よし、決めた!! もうフュージョンライズしない!!」

それを聞いてペガは「ええ!？」と驚きの声をあげる。

「僕が出ていくとみんなが怖がるし、曜ねえや千歌ねえをこれ以上怖がらせたくもない! そうだろ? レム?」

無爪は腰に装着した装填ナックルに触れながら秘密基地のレムに話しかけるとレムはネットに書いてある情報を彼に教える。

『ネットの記事によれば無爪とベリアルを同一視して脅威を感じている人の割合は

全体の75%、世間はあなたに怯えている……。と判断して良いでしょう』

それを聞き、無爪は「ほらね！」と笑い飛ばすが……。その笑みはどことなく、無理して作っているようにペガには見えて仕方がなかった。

『無爪……』

\*

その後、学校にて……。

「ごめんなさい」

「だからね！ スクールアイドルって言うのは!!」

今は曜と無爪を引き連れて千歌は梨子をスクールアイドルに勧誘していた。

だが梨子は謝罪だけをして千歌の誘いを断り、スタスタとどこかへと行ってしま  
う。

しかし千歌はそんなことではめげず今度は食堂にてスマホでM.Sの画像を見せ  
てスクールアイドルの説明をしながら梨子を勧誘する。

「ごめんなさい」

「学校を救うことが出来たりして!! 凄く素敵で!!」

すると梨子は飲み干した缶を少し強めに「コトツ」とテーブルの上に置くと千歌、  
曜、無爪と周りの生徒たちは思わずそれに「ビクッ!」と肩を震わせる。

そのまま彼女は缶を持って立ち上がり、その場を立ち去っていく。

体育の授業のランニングでも相変わらず千歌は梨子と一緒に走りながら彼女の勧

誘を続ける。

「どうしても作曲できる人が必要でえ〜!」

「ごめんなさいい!!」

「待っ……うわっとなん?」

そして千歌はつまずいてその場に思いつきりこけてしまうのだった。

その後の昼休み、千歌と曜は中庭でダンスの練習を行っており、無爪は千歌に「練習で悪いところあったら教えて!!」と半ば強引に連れて来られ、2人の練習風景を見守っていた。

「またダメだったの?」

「うん! でも、あと一歩! あと一押しって感じかな!」

また梨子の勧誘を失敗したのかと曜が尋ねると千歌はそれに対して自信ありげに答えるのだが、正直そうとは思えない気がしてならない。

「ホントかなあ……?」

「とてもそんな感じには見えない気が……」

しかも見事に無爪の意見とほぼ一致、それから一旦休憩を挟むことになり、曜はベンチに腰かける。

「だって最初は! 『ごめんなさい!』だったのが最近は! 『うう……ごめんなさい』になって来たし!」

「明らかに遠ざかってるだろそれ!! あと一歩、あと一押しどころか10歩くらい遠のいてる!!」

苦笑しながら無爪はそう話す千歌にツッコミを入れ、曜もどう聞いてもそれは嫌がっているようにはしか聞こえなかった。

「だいじょーぶ！ いざとなったら!! ほい！ なんとかするし!!」

千歌はそう言いながら音楽の教科書を取り出すが……。

「それは、あんまり考えない方が良いかもしれない……」

「不安要素が拭えないんだけど、大丈夫なの？ そんなんで？」

すると、そんな無爪の言葉を聞いて千歌と曜はなぜかジーンと彼の顔を見つめて来る。

「な、なに？」

「いやあ、なんやかんや言いつつ、なっちゃんは心配してくれてるんだなあーって思ってる」

そんなことを言いながら「にしし……!」と笑う千歌に、無爪は顔を真っ赤にしてそっぽを向く。

「べ、別に心配なんかしてないし！ 千歌ねえが梨子さんに変なことしないか見張ってるだけなんだからな!!」

(おう……！ なっちゃんの見事なツンデレ頂いたであります！)

まるで面白いものを見たかのような表情を浮かべる曜はなぜか心の中で無爪に対し敬礼するのだった。

「変なことなんかしないよぉー！ もう！ あっ、そうだ！ そういえば曜ちゃんの方は？」

そこで千歌が曜に頼んでいたことを思い出し、それについて問いかけると曜は「あっ！」と彼女もそのことを思い出して声をあげて手を叩く。

「書いてきたよ！」

その後、千歌と曜は自分達の教室に戻り、無爪も千歌に首根っこ掴まれて強制的に自分達の教室へと連れて行かれる。

そして曜はスケッチブックに書いてきたアイドルの衣装の絵を千歌と無爪に見せて「どう？」と自信ありげな顔で感想を求めろのだが……。

その絵は女の子が駅員の格好をしているようにしか見えず、とてもアイドルの衣装には見えなかった。

「おおう……。 凄いね？ でも衣装と言うより制服に近いような……。 スカー

トとかないの?」

「あるよ! はい!」

すると曜は次のページを捲ると今度は府警の格好をした女の子が描かれており、これもまたアイドルらしくは見えなかった。

(つていうか、このイラストの女の子って千歌ねえがモデルなのかな? これはこれでこの格好をする千歌ねえが見たいかも……)

無爪がそんなことを考えていると曜は彼の考えてることを見透かしたのか、ボソッとあることを呟いた。

「なっちゃんのムツツリめ」

「えっ? 曜ねえなんか言った?」

「ううん、何でも」

無爪の問いかけに曜は首を横に振って誤魔化す。

「もっと可愛いのは……?」

千歌が曜に尋ねると彼女は「あるよ!」と答え、さらに次のページを捲ると今度は花柄の軍服を着てライフルを持っている女の子の絵が描かれていたのだった。

「武器持っちゃった！」

「可愛いよね〜」

「花柄は可愛いかもしれないけど……」

どこか感性がズレている曜に思わず苦笑する千歌と呆れる無爪。

「可愛くないよ！　むしろ怖いよ！」

千歌からもそうツッコまれる曜だが、彼女はなにがいけないのか分かっていないらしく、「んっ〜？」と首を傾げていた。

「もっとスクールアイドルっぽい服だよ〜」

「っと思っただけでも書いてみたよ！　ほい！」

そう言いながら曜は次のページを捲り、無爪はまたおかしなイラストが描かれているのでは無いかと思ったのだが……。

今度はフリフリとした頭にリボンがついているしっかりとしたアイドルらしい衣装が描かれており、これには流石に無爪も千歌も文句は言えなかった。

「すごい！　キラキラしてる！　こんな衣装作れるの？」

「うん！　勿論、何とかなる！」



それを聞いて千歌は嬉しそうに笑みを浮かべ、「よーっし！」と気合いを入れて放課後、彼女は再び生徒会長であるダイヤに部活申請をしに行くのだった。

ちなみに無爪もまた千歌に首根っこ掴まれて強制連行された。

「だからなんで僕まで!？」

「良いじゃ〜ん！ ダイヤさんの説得手伝ってよなっちゃん！」

＊

それから結局は無爪も生徒会室までついて行くこととなり、千歌はもう1度部活申請の紙をダイヤに提出するのだが……。

「お断りしますわ!!」

当然、前回の話の流れ的にもダイヤが部活申請を認めるはずもなく。

「こっちも!？」

「やっぱり……」

「5人必要だと言った筈です。それ以前に、作曲はどうなったのです？」

ダイヤがそう尋ねると千歌はどう答えようかと一瞬悩むが……。

「それは〜! いずれ〜、きっと!! 可能性は無人大!!」

「それで話が誤魔化せる訳ないだろ、バカ千歌ねえ」

「うう、だよね〜?」

どうにか話を逸らそう(?)とする千歌だったが、無爪に即座にツッコまれてしまい、ガックリと顔を俯かせる。

「で、でも……最初は3人しかいなくて大変だったんですね。『ユーズ』も」

「ユーズ」……その名前を聞いてダイヤは眉をピクッと動かし、無爪の影の中で話を聞いていたペガも「はい?」と少し不機嫌そうにする。

「知りませんか? 第二回ライブ優勝! 音ノ木坂学院スクールアイドル、

『ユーズ!』」

千歌はその「ユーズ」と呼ばれるスクールアイドルのことをダイヤに説明するのだが、その際ずっとダイヤが苛立つように指を申請書の上でトントンしていることに気づかず、千歌の説明が終わるとダイヤはゆっくりと椅子から立ち上がる。

「それはもしかして……『M.S (ミューズ)』のことを言っているのではありませんかですわよね？」

それを聞き、「あつ……」と千歌と曜は顔を見合わせてゴクリと唾を飲み込む。

「あつ、もしかしてアレ、『ミューズ』って読む……」

「おだまらっしゃい!!!」

その瞬間、ダイヤは大声で千歌達に怒鳴り声をあげる。

「なんか分かんないけど地雷踏んだっばいよ!? ちゃんと謝れバカ千歌ねえ!」

「ええ!?! え、えっとごめんなさ」

しかし、ダイヤはそんな千歌の言葉を遮ってズイツと詰め寄ってくる。

「言うに事欠いて、名前を間違えるですって!?! ああん!!! M.Sはスクールアイ

ドル達にとっての伝説! 聖域! 聖典! 宇宙にも等しき生命の源ですわよ!

その名前を間違えるとは!! 片腹痛いですわ……!」

ズイズイと千歌に詰め寄って怒鳴るダイヤ、それに千歌はどんどん後ろに追い込まれてしまい逃げ場を無くしてしまう。

「ち、近くないですか？」

ちなみにここで今のダイヤの心情を「ウルトラマンは知ってるけど、ラブライブ！ サンシャイン!!」のことはあんまり知らない」という方に分かりやすく説明すると「ウルトラセブン」を「ウルトラ『マン』セブン」と呼ぶようなものである。「フン！ その浅い知識だとたまたま見つけたから軽い気持ちで真似をしてみようと思ったのですね？」

「っ、そんなこと……！」

千歌から一度離れ、そう言い放つダイヤの言葉に反論しようとする千歌だが……。

「ならばμ'sが最初に9人で歌った曲、答えられますか？」

「えっ……？」

するとダイヤはまたもや千歌にズイツと詰め寄ってくる。

「ブー!! ですね!! 『僕らのLIVE君とのLIFE』、通称『ぼららら』。

次、第二回ラブライブ予選でμ'sがARRISEと一緒にステージに選んだ場所は

「？」

（あれ？ もしかしてこの人……）

そこで無爪は何かに感づいたようだったが、特に何も言おうとはせず、取りあえず今は成行きを見守ることにする。

「……ステージ？」

「ブブブー!! ですわ!! 秋葉原UTX屋上! あの伝説と言われるA・R・I・S Eとの予選ですわ! 次、ラブライブ第二回決勝! μ'sがアンコールで歌った曲は……」

そこで千歌は今度こそと言わんばかりに手をあげて答える。

「知ってる! 『僕らは今の中で』!」

「ですが……。曲の冒頭をスキップしている4名は誰？」

という引っかけ問題に千歌は思わず「えーっ!!!」と驚きの声をあげると又もやダイヤはズイズイッと千歌に詰め寄ってくる。

「ブブブブブー!! ですわ!!」

その際、あまりにもダイヤが千歌に詰め寄ってくるため、千歌は思わず後ろに

あった校内放送のためのマイクのスイッチを入れてしまい、全校内にダイヤの声が聞こえてしまうという事態になるのだが、ダイヤはそれに気づかず話を続ける。

『絢瀬 絵里』『東条 希』『星空 凜』『西木野 真姫』!!  
こんなの基本中の基本ですわよ!」

「す、凄い……!」

「生徒会長もしかしてM.Sのファン……?」

千歌がダイヤにそう尋ねると彼女は自信たっぷりの様子で答える。

「当たり前ですわ! わたくしを誰だと……んんっ! 一般教養ですわ!! 一般教養!!」

慌てて誤魔化すダイヤだが、曜と千歌、さらには珍しく無爪も一緒になって「へー?」とジト目でダイヤを見つめる。

「と、兎に角……! スクールアイドル部は認めません!!」

\*

「だって！ 前途多難過ぎるよ〜」

放課後、海辺でそんな風に落ち込む千歌だったが……。

「じゃあ、やめる？」

「やめない！」

無爪と曜がそう尋ねると彼女は元気を取り戻したように強きな表情を浮かべる。

「だよね〜」

するとそこで千歌が後ろを振り返ると彼女は花丸が歩いていることに気づき、千歌は彼女に向かって「おーい!!」と声をかけると彼女の方も千歌に気づいたらしく、挨拶する。

「こんにちわ」

「あー、やっぱり可愛い！ んっ？」

すると千歌は何かあることに気づき、ジッとある方向を見て目を懲らす。

「どうかした千歌ねえって……あそこに隠れてるのは……、ルビィちゃん？」

無爪が千歌と同じ方向を見ると確かに彼の言ったとおり、木の後ろにルビィが隠

れており、彼女の存在に気づくと千歌は大きくルビィに向けて手を振る。

「あっ！ ルビィちゃんもいるー!!」

「ピギィ!?!」

千歌はルビィの元へと駆け寄って行くのだが……前回のことを思い出してか怖がらせてはいけないと思い、彼女はポケットから飴を取り出してそれをルビィに差し出す。

「ほくらほら、怖くなあゝい。食べる?」

するとルビィはその飴に釣られるように木の後ろ側から嬉しそうに出てきて飴を受け取ろうとするのだが、ルビィが飴を取ろうとした瞬間、寸でのところで飴を引っ込める。

千歌はそのまま「ルゝルルゝ」と歌いながら飴を餌にルビィを誘導。

「犬かな? っていうか餌付け……?」

無爪が呆れた視線を千歌に送っているが、彼女はそんなことには気づかず、「フツ」と不敵な笑みを浮かべると飴を大きく放り投げる。

それを見てルビィが驚いている間に千歌は彼女に抱きつく。



「捕まえた！」

「うわわ！ うゆうゆ!?」

いきなり抱きつかれたことにビックリするルビィだったが、丁度先ほど投げて落ちて来た飴がルビィの口の中に見事収まり、それを見て無爪は「スゲえ！」と感心するのだった。

「でも今のはルビィちゃんが凄いのか千歌ねえが凄いのか……」

その後、途中まで花丸とルビィは帰りのバスが一緒ということで一同は全員でバスに乗ることとなり、千歌は花丸とルビィにスクールアイドルのことを話していた。

「スクールアイドル？」

「すっごく楽しいよ！ 興味ない？」

地味にここでも勧誘する千歌だったが、花丸は図書委員の仕事があるからと断り、千歌はルビィはどうかと尋ねるのだが……。

「ふえ!? えっと、ルビィはその……お姉ちゃんが……」

「お姉ちゃん？」

「ダイヤさんはルビィちゃんのお姉ちゃんずら」

花丸からの説明を受けて千歌は「えっ!？」と驚きの声をあげ、そこで曜はルビィが戸惑う理由を理解した。

「なんでか嫌いみたいだもんね、スクールアイドル」

「……はい……」

下を俯きながらそう答えるルビィ。

(いや、絶対好きだと思っただけ……。少なくともあの人絶対μ'sの大ファンだよ……)

とは思った無爪だったが、それを口にすべきかどうか少し悩み、ダイヤがあそこまでスクールアイドル部を拒否するには何か理由があるのではと考え、下手に踏み込むべきでもないだろうと考え結局は黙っておくことにするのだった。

「今は、曲作りを先に考えた方が良いかも。何か変わるかもしれないし!」

「そうだねー。花丸ちゃんはどこで降りるの?」

千歌が花丸にそう尋ねるとなんでも彼女は今日は沼津まで学校を休んでる善子にノートを届けに行くらしい。

「そう言えばあの娘、入学式以来全く見てないな……」

ちなみに無爪も花丸達と同じクラスである。

「実は入学式の日……」

花丸の説明によるとクラスでの自己紹介の時に善子は色々とやらかしてしまったらしい。

『墮天使ヨハネと契約してあなたも私のリトルデーモンに、なってみない？』

なんていう強烈な自己紹介をかました後、「ウフ♪」と不敵な笑みを浮かべ、クラスメイトの殆どが哑然。

『ピーンチ!!』

その光景を見たからか、彼女はすぐさま教室から出て行き、それ以来全く学校に姿を現さないのだという……。

「それっきり、学校に来なくなっただけなら」

「そうなんだ……」

これを聞いて曜は苦笑するのだった。

その後、千歌と無爪はバスを降りて曜達と別れるのだが……その時、バス停のすぐ側にある海辺に梨子がいることに気づく。

「桜内さん！」

梨子の存在に気づいた千歌は彼女の名前を呼びながら手を振り、梨子はこんなところまで自分を勧誘しに追って来たのかと思い、「はあ」と溜め息を吐く。

「まさか、また海に入ろうとしてる？」

すると千歌は梨子の元に駆け寄るといきなり彼女のスカートを捲り、梨子は「してないです!!」と慌ててスカートを押さえるのだが……。

「あっ……」

そこで梨子は両手で目を塞いでいる無爪の存在に気づき、彼女は顔を真っ赤にして彼に「見たの？」と問いかける。

「み、見てないです!! ちよっとしか……!! あっ……」

「結局見てるんじゃない!!」

顔を真っ赤にして怒る梨子だが、無爪に非は無いので彼女はそこまで怒ることはなく、無爪も顔を赤くしつつ千歌の頭に軽くチョップを叩きこむ。

「いたっ!? なにすんの!?!」

「千歌ねえのせいでしょ!」

「むう〜」っと頬を膨らませる千歌。

「それよりも、こんなところまで追いかけて来ても答えは変わらないわよ?」

梨子のその言葉に千歌は一瞬「えっ?」となるが、すぐに梨子が何か勘違いしていることに気づく。

「違う違う! 通りかかっただけ! そう言えば、海の音、聞くことができた?」

千歌は梨子にそう尋ねるのだが、梨子は暗い表情を浮かべたまま黙り込んでしま  
い、千歌はそれを見て未だに彼女が悩みを解決できないのを察するとあることを1  
つ彼女に提案した。

「じゃあ今度の日曜日、開いてる?」

「……どうして?」

「お昼にここに来てよ！ 海の音、聞けるかもしれないから！」

「聞けたらスクールアイドルになれて言うんでしょ？」

梨子が千歌にそう問いかけると彼女は「うーん、だったら嬉しいけど」と言いながら両腕を組む。

「その前に聞いて欲しいの！ 歌を……」

「歌？」

梨子が首を傾げると千歌は梨子はスクールアイドルのことを全然知らないから、だから知って貰いたいのだと語り、千歌は梨子にそれではダメかと尋ねる。

「あのね、私ピアノやってるって話したでしょ？ 小さい頃から、ずうーっと続けてただけで、最近、幾らやっても上達しなくて……やる気も出なくて、それで環境を変えてみようって！」

「成程、つまり……梨子さんは今はスランプ中ってことですか？」

無爪の問いかけに梨子は静かに「そう」と頷く。

「だから、海の音を聞ければ何か変わるのかなって」

梨子はそう言いながら両腕を伸ばして手の平を海に向ける。

「変わるよ、きつと」

そんな梨子に千歌はそう言いながら彼女の両手を握りしめる。

「簡単に言わないでよ！」

「分かってるよ、でも、そんな気がする。　ジーツとしてても、ドーにもならないんだから！」

千歌のその言葉に梨子は思わず少しだけ笑い、「変な人ね」と呟いた後、千歌の手から離れようとする。

「兎に角、スクールアイドルなんてやってる暇なんて無いの。　ごめんね？」

しかし、千歌は離れようとする梨子の手をもう1度握りしめ、それに梨子は少し驚いた様子を見せる。

「分かった！　じゃあ海の音だけでも聞きに行ってみようよ！　スクールアイドル関係なしに！」

「えっ？」

「なら良いでしょ!？」

笑みを浮かべながら千歌がそう言うのと梨子は少しだけ口元に笑みを浮かべる。

「ホント、変な人……」

その時のことである。

突如として梨子の手が熱くなり、手を握っていた千歌は「熱っ!？」と思わず手を離してしまう。

すると梨子の胸に眩い光が溢れ、そのことに千歌や無爪、梨子自身も驚きの表情を浮かべる。

「なっ、そんな……また!？」

「な、なに!?! 梨子ちゃん大丈夫!?!」

梨子は身体が熱くなるのを感じ、彼女は胸の光を両手で押さえ込む。

その光はすぐに消えたが、彼女の身体は熱いままであり、梨子の不安そうな表情は消えていない。

「何だったんだ? 今のは……? 梨子さん、身体なんともない?」

「え、ええ、でも、この前もさっきみたいに胸に光が溢れたことがあったの……」。

お医者さんに診て貰っても身体にはなんの異常も見当たらなかったらしく……

しばらく光が溢れることも無かったから、もう大丈夫だと思ったのに……!」



梨子は無爪と千歌にそう語り、彼女はどこか怯えた様子を見せており、千歌と無爪はどうか梨子を取りあえず落ち着かせようとする。

「怪獣が現れたのも、この光が溢れた時だった……。しかも、怪獣はあの時、心なしか私の方に向かって来てる気がして……。だからまた……。！」

どうやら、梨子が怯えているのはまたこの光が発祥したせいで再び怪獣が現れないか心配だったらしく、そんな風に不安そうな梨子を励ますように千歌は「大丈夫だよ！」と声をかける。

「あの怪獣は、あの巨人がやっつけてくれたじゃん!!」

「で、でも……。！」

「見つけた……。！」

「「っ!!!」」

その時だ。

突如として一同の背後から全身黒ずくめの……。黒い帽子と黒いマスクをしたいかにも怪しさ満載の男がこちらに向かって不気味な笑みを浮かべながら近づいて来ていた。

「な、なんですかあなた!？」

気配に気づいた無爪は後ろを振り返って男にそう言いながら梨子と千歌を後ろに下がるせる。

「ダダァ……!！」

男は無爪の頭上を軽々とジャンプして飛び越えると一気に梨子の元まで辿り着き、千歌を押し退かして彼女の左腕を掴むのだが……。

「い、嫌!? 来ないで変態!!」

梨子は右腕を突き出すとそこから炎が溢れ出して男の身体を燃やし、男は悲鳴をあげながら吹き飛ぶとその正体を表した。

それはシマシマ模様の身体とオカッパのような頭が特徴の異星人「三面怪人　ダダ」であり、ダダは「マイクロ化器銃」という武器を梨子に向ける。

「うえ!? 梨子ちゃんの手から炎が! っていうかな、なにあれ!？」

「も、もしかして……宇宙人……!？」

梨子が炎出すのを見て驚く2人。

だがそれ以上にダダの姿を千歌と無爪は見て驚く。

「何してんだこのオカッパ野郎!!」

だがそこですぐに無爪がダダに向かって掴みかかり、そのままウルトラマンとしての腕力を使ってダダを遠くへと投げ飛ばす。

『ぐわああゝ ちッ! 邪魔をするな!!』

地面を転がって倒れ込むダダ、無爪はそのままダダに向かって駆け出して行き、再び掴みかかろうとするがダダはパッと姿を消してしまふ。

「あれ!? どこに行った!?!」

無爪が辺りを見渡すと瞬間移動したダダが梨子の目の前に現れており、梨子を助けようとダダに飛びかかる千歌だったが、又もや瞬間移動で躲されてしまふ。

そしてダダは今度は梨子の背後に姿を現し、ミクロ化器銃を梨子に向けて引き金を弾くとそこから光の粒子のようなものが放たれ、それを梨子が浴びると彼女は身体が縮小され、ダダの持つ1つのカプセルの中に吸い込まれてしまった。

「きゃあああ!?!」

『ダダァ……!』

そのままダダはカプセルに入った梨子を連れ去って走り去って行き、無爪と千歌

は急いでダダのあとを追いかける。

「待てー!! 梨子ちゃん泥棒ー!!」

その後、ダダを追いかけて人気のない場所行くとダダは突然立ち止まり、小型の光線銃を取り出して無爪達に向ける。

「危ない!!」

咄嗟の判断で無爪は千歌の肩を掴んで一緒に頭を下げ、ダダの放った光弾をどうにか躲すことができた。

「ありがと、なっちゃん！」

「それより梨子さんを助けないと!!」

無爪は人間とは思えないほど大きくジャンプしてダダの背中に跳び蹴りを叩き込み、地面を転がるが……ダダはそれでも梨子の入ったカプセルを離さず。

「こんのおー!! 梨子ちゃんを返せー!! 今度梨子ちゃんと一緒に海の音を聞きに行くんだからあ!!」

そう言いながら今度は千歌が立ち上がろうとしているダダに後ろから跳び蹴りを喰らわせ、それによってようやくダダは梨子の入っているカプセルを手放し、それ

を無爪が見事にキャッチ。

『な、なんて乱暴な奴等なんだあ……!』

「お前にそんなこと言われたく無いんだけど!」

そのままダダは逃げ出していき、カプセルに入れられていた梨子もダダがいなくなると彼女はカプセルから出てきて元の大きさに戻り、千歌は慌てて梨子の元へと駆け寄る。

「梨子ちゃん大丈夫だった!? 身体、なんともない!」

「え、ええ、一応平気よ……。でも、まだあの力は消えてないみたい……」

梨子はそう言いながら右手から少しだけ小さな炎を出し、千歌も無爪も一体彼女の身に何が起っているのか分からず、首を傾げていた。

(レムなら何か知ってるかな……?)

\*

その後、とある廃工場に逃げ込んだダダだったが……そこに、スカルゴモラに変身していたあの黒ずくめの男性がダダの前に現れた。

『誰だ？ 貴様は……？』

「光に引き寄せられて来たか？ 研究の邪魔は控えて貰おうか……」

『貴様、『ストルム星人』か！ あれは俺が見つけた光だ！ 渡さない!!』

しかし、「ストルム星人」と呼ばれた男はそんなダダの言葉を一蹴するように「無駄だ!!」と言い放った。

「あの光、『リトルスター』は宿主からの分離が難しい。分離されるのは、宿主が祈った時だけだ。ウルトラマンに……」

『っ、黙れえ!!』

逆上したダダはミクロ化器銃を構えて男に光線を放つが、男は片手でバリアのよきなものを張り巡らせて攻撃を防ぎ、一瞬で姿を消す。

『むっ……!!?』

すると背後に男は現れ、右手から衝撃波をダダにち、ダダは身体が粉々に砕け散

る。

『ぬぐあ…!』

「フン……。それよりも、奴はリトルスターの宿主を保護したか。この状況、利用させて貰う!!」

男はそう呟くと「怪獣カプセル」を取り出してそれを起動させ、それを装填ナツクルに装填。

『『ドレンゲラン』!! エンドマークを打ってこい!!』

そのまま「ライザー」を取り出して装填ナツクルをスキャンし、ライザーを外に向かってかざすとそこから「宇宙鉱石怪獣 ドレンゲラン」を召喚した。

『ドレンゲラン!』

それからドレンゲランは無爪達の元へと一直線に進んでいき、それに気づいた梨子は再び怯えた表情を見せる。

「ま、また怪獣……!?!」

そしてドレンゲランの姿を見て無爪は思わず装填ナツクルに手を伸ばしたが……。『フュージョンライズしますか?』

「……いや、しない」

レムのその問いかけに無爪はそう答え、無爪と千歌は兎に角今はドレンゲランから逃げようと3人は一斉に逃げ出す。

「兎に角逃げよう！」

千歌が無爪と梨子にそう言つて2人は頷き、3人はその場から逃げるように走り出す。

その後、3人が逃げていると偶然買物中だったという梨子の母親と出会い、一同は梨子の母親と一緒にドレンゲランから逃げようと走り出すのだが……。

「……アレ？」

なぜか、無爪だけはその場から動くことができなかった。

「……ペガ、僕の足、なんで掴んでるんだ？」

するとひょっこりと無爪の影からペガが顔を出す。

『何もしてないよ？ ペガは』

「じゃあ、どうして足が動かないんだ？」

無爪のその疑問にペガは答える。



『それは、君の意思だ』

「僕の……?」

『君はベリアルルの息子、でも……君は君だ！ 梨子ちゃんを怪獣から救いたいと、本心では思ってる筈だよ?』

ペガにそう指摘され、少しだけ黙り込んだ無爪はそのまま千歌達とは反対の方向に走り去って行く。

「あれ!? なっちゃん!? そっちには怪獣がいるよ!! 危ないよおー!!」

千歌は怪獣の方に向かって行く無爪に気づき、彼女は無爪を追いかけて来るとだけ梨子に言い残して彼を追いかける。

「千歌ちゃん!!」

「危ないわよ!!」

しかし、梨子と梨子の母親の制止を振り切って千歌は無爪を追いかける。

そして人気のない場所に行くとならぬ無爪は「ジードライザー」を取り出す。

「ジーツとしても、ドーにもならねえ!!」

「なっちゃん……?」

そこに千歌も現れるのだが、無爪はそれに気づかず「ウルトラマン」のカプセルを起動させるとそこからウルトラマンが現れる。

「融合!!」

ウルトラマンのカプセルをナックルに装填し、続いて無爪は「ウルトラマンベリアル」のカプセルを起動させ、今度はそこからベリアルが姿を現す。

「アイ、ゴー!!」

同じくベリアルのカプセルをナックルに装填し、ジードライザーで装填したカプセルを無爪はスキャンする。

「ヒア、ウィー、ゴー!!」

『フュージョンライズ!』

「決めるぜ、覚悟!!」

そしてジードライザーを掲げて胸の前でスイッチを押すとウルトラマンとベリアルの姿が重なり合い、無爪は2人のウルトラマンの力を合わせた「ウルトラマンジード プリミティブ」へと変身を完了させたのだ。

「はああ!! はあ!! ジイイーイーード!!!」

『ウルトラマン！ ウルトラマンベリアル！ ウルトラマンジード!! プリミタイプ!!』

ジードへと変身した無爪は大地へと降り立ち、それを見た千歌は目を見開き、驚きの顔を浮かべていた。

「なっちゃんか、あの巨人……？ 嘘……!？」

『行くぞ!!』

戦闘BGM「ウルトラマンジードプリミタイプ」

ジードはファイティングポーズを取りながらドレンゲランへと駆け出して行き、助走をつけて勢いよく膝蹴りを叩きこむが……ドレンゲランは「だからどうした」と言わんばかりにその長い首を横に振るってジードの身体を叩きつけて吹き飛ばす。

『ウアッ!?!』

フラつくジードに対してドレンゲランは口から吐く火炎弾を放って攻撃し、ジードは前面に円状のバリアを展開する「ジードバリア」でどうにか攻撃を防ぐ。

『シユア!!』

バリアを解除してジードは再びドレンゲランに駈け出して行くが、ドレンゲランは首をさらに長く伸ばしてジードに頭突きを喰らわせ、首を元に戻すとさらにまた火炎弾を撃ち込んでくる。

「ギシャアアア……」

『ぐううう……!?』

するとドレンゲランは高くジャンプしてその巨体を生かしてジードを踏み潰そうとするが、ジードはどうか飛行してそれを回避し、空中へと逃げる。

『レッキングリッパー!!』

前腕の鰭状の部位から放つ波状光線「レッキングリッパー」をジードはドレンゲランの背中に炸裂させ、ドレンゲランは少し悲鳴をあげたことから多少のダメージを与えることに成功。

ジードはそのままドレンゲランの背中に乗り込むとそのままドレンゲランにチョップなどを叩きこんでいく。

『かったあ……!!』

しかし、流星に直接攻撃するのはキツいらしく、逆にこちらの方がダメージを受

けてしまう。

さらにそこでドレンゲランが尻尾でジードの首を後ろから締め上げ、そのまま後ろの方へと投げ飛ばすとジードは地面を転がる。

『グウ……!?!』

「グルルルル……!!」

ドレンゲランはジードの方に振り返ると口から火炎弾を発射。

しかしジードはそれをジャンプして躲し、一気に詰め寄るとドレンゲランの頭を左手で掴んで右拳で何度もパンチをドレンゲランの顔面に叩きこむ。

『顔の部分は背中ほど硬くないみたいだな!』

だがドレンゲランは首を激しく左右に振ってどうにかジードを突き飛ばし、再びジャンプしてその巨体を生かした重い体当たりを喰らわせ、ジードは吹き飛んで地面に倒れ込む。

『シェア……!』

そこからドレンゲランは又もや首を伸ばして頭突きを喰らわせようとしてくるが、ジードはそれを避けて脇にドレンゲランの首を挟み込み、そのままフルスイン

グしようとするのだが……。

『お、重い……！　こいつ、前に戦った怪獣より重いぞ……!?』

そのままドレンゲランはジードを掴んだまま首をさらに長く伸ばして首を上にあげるとそのまま首を上下に動かして自分の首を掴んでいるジードを地面に叩きつける。

『ウウ……』

腕を離してなんとかドレンゲランの攻撃から逃れるジードだが、ドレンゲランは今度はその長い首をジードの身体に巻き付けて拘束し、零距离からの火炎弾を撃ち込んでいく。

『ウグアアアア……!!?』

「なっちゃん!!」

それを見て悲痛な声をあげる千歌。

そしてドレンゲランは拘束を解くとジードはその場に倒れ込み、カラータイマーが点滅を始め、ドレンゲランは再び梨子の方へと向かって歩き出す。

しかも、梨子と梨子の母親はまだこの街に来たばかりなこともあり、道に迷って

しまい、行き止まりに追い込まれてしまった。

「な、なんでこっちに来るのよ!？」

梨子の母親は悲痛な声でそう叫び、梨子も怯えきった様子を見せている。

『無爪、怪獣には目的があるようです』

『目的……?』

『怪獣はあなたへの追撃より、移動を選択しました』

そこで無爪はレムの教えでやはりあの怪獣は梨子の光、「リトルスター」を狙って行っているのだと確信し、立ち上がろうとするが……先ほどの攻撃がかなり効いたのか、ジードは思うように立ち上がれなかった。

「なっっちゃああああああん……」

『っ!?!』

その時、千歌が自分を呼ぶ声が聞こえ、ジードは千歌の方へと顔を向ける。

『えっ? 千歌ねえ? もしかして今、こっちに向かって言った……?』

『どうやら、無爪が変身したところを目撃されたようです』

『嘘だろ……』

レムに言われ、無爪は頭を抱えて「やってしまった……」と落ち込むが……。

「なっちゃん!! 梨子ちゃんを、助けてあげて!! お願い!!」

『千歌ねえ……』

「私は、なっちゃんのことをずっと信じてる!! だから、立ち上がって!!」

『……』

そして、その言葉を受けたジードはコクリと頷いて拳を握りしめ……フラつきながらもどうにか立ち上がる。

『千歌ねえにそう言われちゃ、立つしかないよな!! それに、今思ったけどもしかしたらアイツ……!』

ジードは立ち上がるとさらに無爪は新たに別のカプセル、「ウルトラマンオーブ エメリウムスラッガー」のカプセルを起動させる。

『融合!!』

するとカプセルからオーブ エメリウムスラッガーが現れ、無爪はカプセルをナツクルに装填。

続いて無爪はベリアルのカプセルを再び起動し、カプセルからベリアルが現れる。



『アイ、ゴー!!』

ベリアルのカプセルもナツクルに装填し、ジードライザーで装填したカプセルを無爪はスキャンする。

『ヒア、ウィー、ゴー!!』

『フュージョンライズ!』

『飛ばすぜ、光刃!!』

そしてジードライザーを掲げて胸の前でスイツを押す。

「はあああ、はあ!! ジィーローード!!!」

『ウルトラマンオーブ エメリウムスラッガー! ウルトランベリアル! ウルトランジード! トライスラッガー!!』

最後にオーブ エメリウムスラッガーとベリアルの姿が重なり合い、2人の力を合わせた姿「ウルトラマンジード トライスラッガー」へとジードは姿を変える。

トリスラッガーへと姿を変えたジードは大きくジャンプしてドレンゲランの頭上を飛び越え、振り返るとそのままジードはドレンゲランに掴みかかって進行を阻止しようとする。

『これ以上、梨子さんの元には行かせない!!』

しかし、それでもドレンゲランの進行は止まらない。

ドレンゲランは近距離から火炎弾をジードに撃ち込もうとするがジードはドレンゲランの顎を掴みあげて顔を上に向け、火炎弾を何も無い上空に撃たせる。

するとジードは顔だけを梨子の方へと向け、「任せろ」とでも言うように頷く。

「あの巨人は……」

それを見てか、梨子はジードが必死に怪獣をこちらに向かわせないようにしているのだと理解し、彼女は両手を祈るように握り合わせる。

(もし、本当にそうなら……お願い、助けて……!)

『こんのおおおお三三』

挿入歌「GEEDの証」

するとジードは左手でドレンゲランの頭を掴みあげて右拳で何度も素早く顔面にパンチを叩き込み、最後にアッパーカットを叩きこむ。

ドレンゲランは火炎弾をジードに撃ち込むがジードは素早く後退して攻撃を躲し、頭部にある2本のブーメラン「アイスラッガー」を両手に持って構える。

『ハアアア!!』

そのままジードはドレンゲランに向かって駆け出して行き、ドレンゲランは火炎弾を放つが、ジードはそれらを全て切り裂きながら突っ込んでいき、身体を勢いよくスライディングさせてすれ違いざまにアイスラッガーでドレンゲランの右の足の膝を斬りつける。

するとドレンゲランは膝から火花を散らし、背後に回り込んだジードはさらに中央のアイスラッガーと両手のアイスラッガー、合計3つを飛ばして1つはドレンゲランの尻尾を切り裂き、もう2つはドレンゲランの足の膝の裏を切り裂く。

「キシヤアアア!!!」

『狙い通り！ 硬い奴は関節が大体弱いからな!!』

アイスラッガーを頭部に戻し、ドレンゲランはジードに振り返って首を伸ばして頭突きを喰らわせようとするが、ジードはジャンプしてそれを回避し、右足に炎を宿して急降下キックでドレンゲランの首を踏みつけるように蹴りつける。

「グア!？」

そのままジードはドレンゲランから離れると3本のアイスラッガーを放ち、そ

ここに腕をL字に組んで光線を発射して反射させ、拡散させ四方八方から浴びせる必殺技「リフレクトスラッガー」をドレンゲランへと繰り出す。

『リフレクトスラッガー!!』

そしてドレンゲランは自慢の身体の硬さもこの技を完全に耐えられるほどの防御力は無かったらしく、1番脆い間接部に幾つもの光線が直撃したこともあり、火花を散らして爆発したのだった。

「グルアアアアア!!!」

ドレンゲランが倒され、梨子や彼女の母、千歌は「やったああああ!!!」と喜びの声をあげる。

すると、梨子に宿っていたリトルスターの光は彼女から分離し、光はジードのカラータイマーの中へと吸い込まれ、ジードの中にいる無爪の持つカプセルを入れる小型ケースの中に宿る。

それを見て無爪はケースを開けるとその中に新たなカプセルがあり、それを取り出すとカプセルに「ウルトラマンレオ」の姿が浮かび上がる。

『ウルトラマンレオカプセルの起動を確認しました』

『これは、新しいカプセル……?』

そしてジードは空へと飛び去るのだった。

また、ドレンゲランを召喚した男はジッと空に飛び立つジードを見つめていた。

「これで必要なカプセルは残り……」

\*

「あいたたた……」

『無爪、大丈夫?』

戦いを終えた無爪は腰を押さえてペガに支えて貰っており、無爪は「はぁ」と溜め息を吐くと彼はそのまま近くにあったベンチに座り込んだ。

「ふう、疲れた……」

するとその時、無爪の頬に「ピトッ」と冷たい感触が伝わり、慌てて振り返ると

そこには缶ジュースを持った千歌が立っていた。

「お疲れ様、なっちゃん」

「あ、うん、ありがとう……。千歌ねえ、さっきも……」

「それにしても驚いたよ！ なっちゃんがあの巨人だったなんて！」

千歌はどこか興奮した様子でズイズイ顔を近づけ、無爪はそれに少し頬を赤くしつつ「取りあえず説明するから」と言っけて千歌を隣に座らせる。

それから無爪は千歌に自分がジードというウルトラマンにどういう経緯でなったのか、また父親がかつてクライシス・インパクトを引き起こした張本人「ウルトラマンベリアル」で、自分はその息子なのだということを彼女に一通り説明した。

「なっちゃんが、ベリアルの息子……」

ただでさえ無爪がジードであることに驚いたというのにさらにベリアルは実在し、無爪は彼の息子だという事実にも、千歌も流石に驚きを隠せなかったようで、そんな様子の彼女を見て無爪は沈んだ表情を浮かべる。

「やっぱり千歌ねえも僕のこと……怖い？」

本当は千歌がジードを、自分のことをどう思っているのか聞くのが怖かったが……

こうなってしまうっては気になって仕方が無い。

一緒に暮らしている仲ならば尚更だ。

その為、無爪は勇気を振り絞って千歌が自分が怖いかどうかを問いかけた。

「ううん、私はなっちゃんのことをずっと信じてるってさっきも言ったじゃん。

最初にジードとして現れた時も、必死に怪獣を止めようとしてジードは私達を守ろうとしてくれてるってすぐ分かったもん」

「千歌ねえ……」

「よく頑張ったね。 ナデナデ♪」

すると千歌はそう言いながら無爪を抱きしめて彼の頭を撫で、無爪は照れ臭そうにしつつも抵抗せず受け入れるのだった。

（無爪、嬉しそう。 良かった……）

またそんな2人の様子をペガは微笑ましく見守るのだった。

「さっ！ 梨子ちゃんも心配だし、そろそろ探しに行こう！」

「そうだね」

そして千歌は無爪の手を引いて2人は立ち上がり、梨子を探しに行くのだった。

\*

日曜日、あれから梨子の身体に異常が起こることもなくなり、今日は約束通り海の音を聞く為、果南の家のダイビングショップに訪れていた。

ちなみに曜や無爪も千歌に誘われてダイビングショップには来ている。

「イメージ？」

「人間の耳には、音は届きにくいからね！　ただ、景色はこことは大違い！　見えてるものからイメージすることは出来るとは思う」

そして今は果南からダイビングについてのことを説明しており、梨子の「海の音」を聞きたいという意見に対しても色々とアドバイスを受けていた。

「想像力を働かせるってことですか？」

「まっ、そういうことね。　用は勝利のイメージネーションってこと！　できる？」

「やってみます」



それから梨子、千歌、無爪、曜、果南の5人はダイビングスーツに着替えて一緒に船に乗ってある程度進むとそこから海の中に4人で潜り、梨子は「海の音」を聞こうとするのだが……。

「ダメ？」

「残念だけど……」

一度船の上にあがり、曜は「海の音」を聞くことができたどうかを尋ねるが、やはりそう上手くはいかないらしい。

「イメージか、確かに難しいよね」

「海の音をイメージしろってことだし、千歌ねえの言う通り難しそう」

「そうね、簡単じゃないわ。景色は真っ暗だし」

すると千歌は梨子の「真っ暗」という言葉を聞いてなにか思いついたのか、「もう1回良い？」と言って千歌と曜はもう1度海の中に飛び込み、それを追うように無爪も海の中へと飛び込んだ。

梨子もまた3人を追いかけるように再び海の中に潜り、しばらく4人で泳ぐのだが……。

そこで梨子は以前のコンクールでスランプからピアノを弾けなかったことをフツと思ひ出し、このままでは何時まで経ってもスランプから抜け出せないのではないかと不安になる。

その時、突然、海の中が明るくなり、梨子は曜と千歌が上を指差していることに気づいて見上げると蒼くて光輝く美しい光景が広がっていた。

それを見て梨子はなにかが聞こえたような気がした。

それはまるで、ピアノの音のようなもので……。

彼女はピアノを弾く時のように両手をあげるとさらにピアノの音色のようなものが聞こえ、それから4人は海面から顔を出す。

「ぷはあー！」

「聞こえた!？」

「うん！」

どうやら梨子が聞いた音色は他のメンバーにも聞こえていたらしく、曜や無爪にも聞こえていた。

「私も聞こえた気がする！」

「ホント!? 私も!」

「僕も聞こえたよ!」

それに千歌、梨子、曜、無爪は思わず笑い合い、その光景はとても楽しそうだった。

\*

その翌日……。

「うえ!? 嘘!」

「ホントに!」

なんと梨子は自分が曲作りを手伝うと申し出、それを聞いて千歌は涙目に「ありがと〜!」とお礼を言いながら彼女に抱きつかうとするのだが……梨子はそれを華麗に躲す。

「待って、勘違いしてない？」

「ふえ？」

「私は曲作りを手伝うって言ったのよ？ スクールアイドルにはならない！」  
それに対して千歌は「ええ〜!?」と不満そうな声をあげる。

「そんな時間はないの！」

「そっかあ〜」

「無理は言えないよ」

曜にもそう言われた為、千歌は「そうだねえ」と残念そうにしつつも曲作りの手  
伝いをしてくれるだけ十分だと思いい、梨子へのスクールアイドルへの勧誘は取りあ  
えずは諦めることに。

「じゃあ詩を頂戴？」

「詩？」

すると千歌は「詩？」と言いつつ教室の扉を開けてみたり、ベランダを開けて  
みたり、なぜかみかんが2つ入ってある鞆の中を開けてみたりする。

「詩ってなに〜♪」

「多分、歌の歌詞のことだと思っ♪」

そこで千歌と曜は歌いながらそんな会話をし、最終的に2人は「歌詞？」と首を傾げるのだった。

＊

その後、一同は歌詞についてのことを考えるために一度千歌の家の旅館に行くことに。

「あれ？ ここ……旅館でしょ？」

尚、千歌の家が旅館であることに梨子は驚きの様子を見せていた。

「そうだよ！」

「ここなら時間気にせずに考えられるから！ バス停近いし帰りも楽だしね」  
するとそこで志満が「お帰り」と外に出てきて千歌達を出迎えてくれたのだが、

その時、梨子はすぐそこに高海家の飼うペットの犬の「しいたけ」がいることに気づく。

そしてしいたけを見るや否や彼女は顔をなぜか引き攣らせる。

「そちらは千歌ちゃんと言ってた娘？」

「うん！ 志満姉ちゃんだよ！」

千歌は長女である志満を梨子に紹介し、梨子も慌てて名前を名乗って自己紹介を行う。

それから梨子はまた視線をしいたけに戻し、彼女は冷や汗を流す。

「わん!!」

そしてしいたけが一吠えすると梨子は「ひい!？」と悲鳴をあげてそのまま旅館の中へと逃げ込むように入る。

ちなみにそれと同時に次女の美渡も志満に用があったのか彼女の名前を呼びながらやってきていたのだが……、その手には食べかけのプリンが握られていた。

「美渡ねえ……。そのプリン、もしかして……。!」

「やばっ！」

そのまま美渡は千歌から逃げるように走り去って行き、千歌はそれに怒ってすぐに彼女を追いかける。

「待てえー!! 私のプリーーーン!!!」

その後、千歌、曜、梨子はなぜか無爪の部屋に訪れて千歌は自分の部屋の海老のぬいぐるみを抱きしめながら椅子に座り、頬を膨らませてふて腐れていた。

「だからなんで何時も僕の部屋に来るんだ……。梨子さんだって嫌でしようし、異性の部屋とか……」

「嫌というか……。何というか、凄いわね……」

尚、無爪は「ドンシャインの再放送があるから」ということで一足先に家に帰って来ており、また梨子は無爪の部屋がドンシャインのポスターや武器の玩具、アクシオンフィギュアやソフビ、DVDなどが大量に置かれている部屋を見て啞然としていた。

「しかも特にこれ凄いわね……」

その中でも特に目立っているのがアメコミヒーロー映画みたいに部屋に飾られているドンシャインのコスプレ衣装だった。

「っていうか無爪くんって千歌ちゃんと一緒に住んでるの!？」

「色々複雑な事情があるもんで……。っていうか何時まで千歌ねえはふて腐れてるんだ？」

無爪が千歌に視線を移すと彼女は未だに頬を膨らませてプリンを勝手に食べられたことを怒っていた。

「酷すぎるよ! 志満ねえが東京で買ってきてくれた限定プリンなのに!! そう思わない!？」

「それより作詞を……」

梨子はそんな千歌に苦笑しつつ、作詞を考えようと言いつつ出したのだが、その時彼女の後ろにあった部屋の扉が開いて美渡が現れる。

「何時までも取っておく方が悪いんです!？」

「べーっ」と美渡は舌を出し、そんな彼女に「うるさい!!」と海老のぬいぐるみを千歌は美渡に投げるのだが……。それは見当違いな方に飛んでいき、梨子の顔面に激突。

(……フェイ○ハガーかな?)



「甘いわ!!」

さらに今度は美渡が浮き輪を千歌に投げるのだが……それは千歌ではなく梨子の頭の上から首まですっぽりと入り、それに美渡は「やばっ」と呟く。

すると梨子その状態のまま立ち上がって美渡に振り返る。

「失礼します」

梨子はそれだけ言うと言をピシャッと閉めるのだった。

「新手のホラーだこの光景……」

そしてその光景を見て苦笑する無爪だった。

「さあ、始めるわよ？」

そこで梨子は作詞作曲についてのことを始めようとするのだが……。

「曜ちゃんもしかしてスマホ変えた!？」

「うん！ 進級祝い！」

「良いな〜」

とこんな風に千歌と曜は作詞作曲に全く関係のないことで話し込んでおり、それに梨子は力強く「ドスン！」と床を踏み、千歌、曜、無爪は肩を「ビクッ」と震

わせる。

「は・じ・め・る・わ・よ？」

海老のぬいぐるみが顔から外れると物凄く怖い形相で睨むように梨子は千歌達にそう言い放ち、それに千歌、曜、無爪は顔を引き攣らせつつ「は、はい……」と返事をするのだった。

そこから作詞は千歌が考えることになり、「どうせなら恋の歌が作りたい！」ということでそれをテーマに作詞を考えようとしたのだが、中々良いのが思い浮かばず、彼女は「う〜ん」と悩みながらテーブルの上で突っ伏していた。

「やっぱり、恋の歌は無理なんじゃない？」

「嫌だ！  $\mu$ sのスノハレみたいなの作るの！」

（スノハレって  $\mu$ sの中でもかなりの神曲だし、スノハレみたいなのはハードル高いと思うなあ）

無爪の影の中で話を聞いていたペガはそんなことを思い、梨子がいるので変わりに無爪にそのことを言って貰おうかと思ったが、言ったところで千歌が素直に聞くとは思えないのでペガは取りあえず黙っていることにした。

「そうは言っても恋愛経験ないんでしょ？」

「なんで決めつけるの!？」

梨子と千歌のその会話に漫画を読んでいた無爪はほんの少しだがピクッと反応し、視線を漫画に向けたまま聞き耳を立てる。

またそれに気づいた曜は無爪を見てニヤっとした笑みを浮かべた。

「じゃああるの？」

「っ……、それは……」

千歌は一瞬、無爪の方を見たあと、梨子の質問に答える。

「な、無いけど……」

漫画を読んでるフリをして聞き耳を立てていた無爪はその千歌の返答にがっかりとする。

(あれ? もしかして千歌ちゃんも割と……)

(なんで高海さんは今無爪くんの方を見たのかしら? ハッ、まさか……!)

しかし、そのことに無爪だけは気づかなかったが、曜とペガ、梨子だけはしっかりとそのことに気づいていた。

「でも、っていうことはμ'sの誰かがこの曲を作った時、恋愛してたってこと？  
ちよっと調べてみる！」

話を逸らしたためか、千歌はそう言ってノートパソコンを開くのだが、梨子と無爪はなんでそうなるんだとツッコむ。

「でも気になるし！」

「千歌ちゃん、スクールアイドルに恋してるからね」

「本当に……」

そこで、今ほど呟いた曜の言葉に梨子は「あっ！」とあることに気がつき、それによくように曜も今の自分の発言の中に作詞のヒントになるようなものがあることに気づく。

「なに？」

「今の話聞いてなかった？」

「スクールアイドルにどきどきする気持ちとか！ 大好きって感覚とか！」

「それなら書ける気しない？」

曜と梨子の言葉を受けて千歌はハツとなり、彼女は顔をあげる。

「成程、スクールアイドルに対しての憧れっていうか愛を書こうってことか」

「そうだねなっちゃん!! 確かにそれなら書ける! 幾らでも書けるよ!! えっと、先ず輝いているところでしょ! それから!」

曜と梨子の言葉からヒントを貰った千歌は早速色々と紙に文字を書き込んでいく。

そんな楽しそうな千歌の様子を見ながら、梨子は幼い頃の昔のことを思い出していた。

『梨子ちゃん、とっても上手ね!』

『だって、ピアノ弾いてると空飛んでるみたいなの! 自分がキラキラしてるの! お星様みたいに!』

するとそこで千歌が「はい!」と1枚の紙を梨子に手渡し、彼女はもうできたのかと驚く。

「それは参考だよ、私その曲みたいなの作りたいんだ!」

「……『ユメノトビラ』?」

「私ね! それを聴いてね! スクールアイドルやりたいって、μ'sみたいにな

りたいて本気で思ったの！」

そう楽しいに語る梨子は「Msみたいに？」と首を傾げて尋ねる。

「うん！ 頑張って努力して力を合わせて奇跡を起こしていく！ 私でも、できるんじゃないかって。今の私から、変わるんじゃないかって！ そう思ったの！」

「本当に好きなのね？」

「うん!! 大好きだよ!!」

そして梨子の問いかけに千歌は満面の笑顔でそう答えるのだった。

\*

それから夜、家に帰った梨子は薄暗い部屋の中でベッドにボーっとしながら座っていた。

梨子はなんとなくスマホを取り出して動画画面を出し、そこには「ユメノトビラ」と書かれた動画があり、彼女はそれを再生させる。

『みんな私と同じようなどこにでもいる普通の高校生なのに、キラキラしてた。

スクールアイドルって、こんなにも、キラキラ輝けるんだって!!』

梨子は千歌と初めて会い、話した時のことを思い出しながらμ'sの「ユメノトビラ」のライブ動画を視聴する。

すると彼女はベッドから降りて立ち上がり、自分の部屋に置かれたピアノの元へと向かい、椅子に座り込む。

「……」

そして彼女はピアノを開いて「ユメノトビラ」の曲をピアノで弾きながら歌い始めたのだ。

その時だ、彼女が窓の外を見ると……そこには風呂上がりなのか、頭にタオルを巻いた千歌がこちらを嬉しそうに見つめながら立っていた。

それは梨子の部屋と千歌の部屋は丁度向かい合う形となっていたからである。

「高海さん!？」

「梨子ちゃん！　そこ梨子ちゃんの部屋だったんだ！」

梨子はそのことに驚き、梨子は引越したばかりで隣が千歌の家の旅館だということに全く気づかなかつたらしく、梨子は窓を開けてベランダに出る。

「今の『ユメノトビラ』だよね！　梨子ちゃん歌ってたよね!!」

「いや、それは……」

梨子はなんとか誤魔化そうとするが……。

「ユメノトビラ……ずっと探し続けていた……」

「……そうね」

千歌にそう言われ、特に誤魔化す必要もないだろうと思った彼女は観念し、その曲を歌っていたことを認める。

「その歌、私大好きなんだ！　第2回ラブライブの……!」

「高海さん！」

とそこで梨子が千歌の名前を遮るように彼女の名を呼び、それに千歌は「へっ?」と首を傾げる。

「私、どうしたら良いんだろう?　何やっても楽しくなくて、変われなくて……」



「梨子ちゃん……」

どこか落ち込んだ様子を見せる梨子、そんな彼女を見て千歌は……。

「やってみない？ スクールアイドル？」

梨子に右手を伸ばし、再び彼女をスクールアイドルへと誘ってみる。

「ダメよ！ このまま、ピアノを諦める訳には……！」

「やってみて、笑顔になれたら、変わったらまた弾けば良い……！ 諦めること  
ないよ！ 言ったでしょ？ ジョーツとしてもドーにもならないって!!」

しかし梨子は千歌は本気でスクールアイドルをやろうとしているのに、そんな気  
持ちで自分が一緒にやるのは失礼だと言って彼女はその場に蹲ってしまう。

しかし千歌は……。

「梨子ちゃんの力になれるなら、私は嬉しい。 みんなを、笑顔にするのがスクー  
ルアイドルだもん」

彼女はそう言い放って身を乗り出し、さらに右手を梨子に伸ばすのだが、その際  
風によって頭に巻かれていたタオルが取れる。

「あっ、千歌ちゃん!!」

それに気づいた梨子は慌てて立ち上がるが、千歌は変わらず笑みを梨子に向けながら手を伸ばし続けていた。

「それって、とつても素敵なことだよ？」

「あっ……」

千歌にそう言われて梨子も薄らと笑みを浮かべながら彼女も自分の右手を千歌に伸ばす。

しかし、その手は僅かに届かない。

「流石に、届かないね……」

梨子が手を引っ込めようとした時だ。

「待って!! ダメえ!!」

それでも千歌は諦めずに必死に梨子に手を伸ばし、それを見て梨子もさらに手を伸ばす。

そして、互いの一差し指が触れ合い、梨子と千歌の2人は嬉しそうな笑顔を浮かべるのだった。

「わああ……!!」

「はぁあ……！！ ふふっ♪」

---

尚、このドレンゲランはそこまで動きが遅くなく、並みの怪獣くらいにはそれなりに動けます。



## 第3話 『ファーストステップ&amp;ゼロ参上』

千歌ちゃん、誕生日おめでとう!!

千歌、曜、そしてスクールアイドルに入ることになった梨子の3人は曲も完成した為、朝から海辺でダンスの振り付けの練習を行っていた。

またダンスの練習はどこかズレたところや間違ったところがないかなどの確認の為、スマホで動画も撮影していた。

ちなみに無爪はというと、千歌が「なんやかんやで手伝ってくれるなっちゃんだけど、部員でもないなっちゃんをこんな朝早くから起こすのも可愛そうかな」ということで彼は来ていない。

そして一通り練習が終わると3人でその動画を見てどこがおかしなところが無いかを確認し、梨子自身はダンスなどは大分上手くなってきた気がしていたのだが……。

「でもこの切り上げがみんな弱いのと、ここの動きも！」

曜はダンスでの不自然な点を即座に発見し、そんな風に素早く間違いなどを指摘する彼女に梨子は「流石ね」と感心の声をあげた。

「高飛び込みやってたからフォームの確認は得意なんだ！」

「リズムは？」

「大体良いけど、千歌ちゃんが少し遅れてるわ」

千歌の問いかけに梨子がそう答え、自分がズレていることを指摘されて彼女は頭を抱えて「私かー!!」と嘆く。

その時、空を一機のヘリコプターが飛行しているのを千歌が頭を抱えた際に発見し、同じくそれに気づいた梨子は「なにあれ？」と首を傾げる。

「小原家のヘリだね？」

「小原家？」

「淡島にあるホテル経営してて、新しい理事長もその人らしいよ？」

梨子の疑問に曜がそう答えるのだが、直後……ヘリは心なしかなぜかこちらの方に向かって来ているが気がしたが、千歌達はまさかと思ったのだが……。

気のせいなどではなかった。

へりはやはりどう見てもこちらに近づいて来ており、彼女達は「うわああ」と悲鳴をあげて慌ててその場に伏せる。

「なにになに?!」

するとへりは千歌達の前に降り立つとへりの扉が開いてその中から金髪の少女の「小原 鞠莉」が決めポーズをしながらウインクをして現れたのだ。

「チャオ〜♪」

\*

その後、学校の理事長室にて……。

そこでは千歌、梨子、曜、無爪の4人が集められており、4人の目の前には自身を「理事長」と名乗る鞠莉の姿があった。

「えっ? 新理事長?」

「えっ? でも3年生……ですよね? 制服着てるし」

無爪の言うように鞠莉はどう見ても千歌達ともそんなに歳が離れているようにも見えないし、3年生の制服も着ており、一同は自らを理事長と名乗る鞠莉に困惑した様子を見せていた。

「イエース!! 気軽にマリーって呼んで欲しいの! 紅茶、飲みたい?」

「あの、新理事長……!」

千歌が鞠莉のことを「新理事長」と呼ぶと彼女はムスっとしたふくれっ面となり、鞠莉は千歌に向かってズイッと詰め寄る。

「『マリー』だよ!!」

「ま、マリー……」

千歌は苦笑しつつ鞠莉が希望する名前を呼び、ちゃんと千歌に「マリー」と呼ばれた為か、どこか彼女は満足げな表情を見せる。

「その制服は……?」

「どこか変かなあ? 3年生のリボンもちゃんと用意したつもりだけど?」

「理事長ですよね!」

やはり千歌も理事長なのになんで制服を着ているのか、本当に彼女が新しい理事



長なのか疑問だったらしく、そのことについて戸惑いながらも尋ねる。

「しかーっし!! この学校の3年生!! 生徒兼理事長!! カレー牛丼みたいなものね〜!!」

「成程! 分かりやすい例えですね!!」

「無爪くんそれで理解出来ちゃうの!? 私は例えがよく分からないかな……」

自分の隣で鞠莉の言葉を理解する無爪の言葉に梨子は驚きの声をあげるが、梨子の言葉を聞いた鞠莉が困り顔で「ええ〜!? 分からないの〜!?」と詰め寄る。

「分からないに決まっています!!」

その時、いつの間にか理事長室にダイヤが入って来ており、突然現れた彼女に驚いたのか鞠莉は尻餅をつくが……その顔は笑顔のままだった。

「生徒会長いつの間に……?」

無爪は何時、ダイヤが理事長室に入って来たのか不思議に思いながら頭に疑問符を浮かべる。

「オウ! ダイヤ!! 久しぶり〜! 随分大きくなって♪」

すると鞠莉はダイヤの姿を見るや否や彼女に抱きついて嬉しそうに頭を撫で回

し、ダイヤはそんな鞠莉に呆れた視線を送る。

「触らないでいただけますか？」

「胸は相変わらずね？」

そう言いながらニヤニヤした笑みで鞠莉はダイヤの胸をワシッと掴み、それにダイヤは慌てて鞠莉を振り払う。

「やかましい……!! ですわ……」

「イツツ、ジョーク♪」

「全く、1年の時にいなくなったと思ったらこんな時に戻って来るなんて……。一体どういうつもりですか？」

どこか不機嫌そうにダイヤは鞠莉にそう尋ねるのだが、鞠莉はそんなダイヤの言葉をスルーしてなぜかカーテンを勢いよくバサッと開く。

「シャイニー!!」

それに怒ったダイヤは鞠莉のリボンを掴みあげてグイッと自分の方へと引き寄せ  
る。

「人の話を聞かない癖は相変わらずのようですね!？」

「イツツ、ジョーク♪」

鞠莉は再び笑顔でそう言い放ち、ダイヤは呆れつつもその手を離して鞠莉を解放する。

尚、そんな鞠莉とダイヤのやり取りを見て無爪は「鞠莉さんってフリーダムな人だなあ……」と心の中で苦笑いするのだった。

「兎に角、高校3年生が理事長なんて冗談にも程がありますわ!!」

「そっちはジョークじゃないけどね!」

その鞠莉の言葉にダイヤは「はっ?」と間の抜けた声が出てしまい、鞠莉はどこからか1枚の紙をダイヤに向かって突き出すように見せるとそこには「任命状」という文字が書かれていた。

さらにそれには「浦の星学院三年 小原 鞠莉 殿。 貴殿を浦の星学院の理事長に任命します」とも書き込まれ、判子まで押されている。

つまり、これは鞠莉が本当にこの学校の理事長になったことを意味していたのだ。

「私のホーム!! 小原家の学校への寄付は、相当な額なの」

「そんな! なんで……!」

確かな証拠を見せられたが、ダイヤは未だに信じられないといった顔を浮かべる。

「実は、この浦の星にスクールアイドルが誕生したという噂を聞いてね？」

「まさか……それで？」

ダイヤの疑問に鞠莉は「そう！」っと胸を張って答える。

「ダイヤに邪魔されちゃ可哀想なので……応援に来たのです！」

「あの、それなら千歌ねえ達がここにいる理由は分かるんですが、なんで僕まで……？」

その無爪の問いかけに鞠莉は「ホワッツ？」と不思議そうに首を傾げる。

「なんでって、てっきりあなたは彼女達のマネージャー的なやつかと思ったからよ？ 色々手伝ってるって聞いたし」

「いや、全然マネージャーとかじゃないんですけどね……。手伝いとかたまにしますけど……」

「そうなの？ なんか残念……」

なぜか少し残念そうにする鞠莉は無爪は「一体僕になにを期待してたんだ」と思ったが、あんまり深く考えない方が良いかと思ひ、取りあえずは気にしないこと

にした。

「それよりも！ 応援に来てくれたって本当ですか!？」

「イエース！ このマリーが来たからには心配ありません！ デビューライブは秋葉ドゥームを用意して見たわ！」

そう言いながら鞠莉は手持ちの小型のノートパソコンを開いて秋葉ドームの画像を千歌達に見せる。

「ちよつと、それハードル高すぎない!？」

「そ、そうよ！ いきなり……!！」

無爪と梨子はいきなりそんな場所でライブなんてハードルが高すぎると思ったのだが、千歌はその辺は全く気にしておらず、「き、奇跡だよ〜!」と感激していた。

「イツツ、ジョーク!！」

「ジョークの為にワザワザそんなもの用意しないでください」

しかし、これも鞠莉のジョークであり、それを聞いて千歌はツッコミを入れ、千歌、梨子、曜、無爪の4人からジトっとした視線を送られる。

「実際には……」

\*

そうして一同は鞠莉に案内されて連れて来られたのは学校の体育館であり、彼女が言うにはデビューライブの会場はここを使って欲しいとのことだった。

「ここを満員に出来たら人数に関わらず部として承認してあげますよ？」

「えっ？ ホント!？」

「部費も使えるしね♪」

それなのに千歌は「やったー!!」と嬉しそうに笑みを浮かべるのだが、そこで梨子が「満員に出来なければ？」と疑問に思ったことを彼女に尋ねる。

「その時は解散して貰うほかありません」

「えっ、そんなぁ……」

鞠莉のその言葉を聞いて千歌は今度は少し不安な表情になる。

「嫌なら断ってくれても結構ですけど……？ どうします？」

ニヤリとした笑みで鞠莉は千歌達に視線を送り、曜も体育館は結構な広さである

ため、ここを満員に出来るかどうかは微妙であると感じ、「やめる？」と千歌に問いかけるが……。

「やめない!! 他に手がある訳じゃないんだし!!」

「まあ、数少ないチャンスだし、ジーツとしてでもドーにもならないもんね、千歌ねえ？」

無爪の言葉を受けて千歌は「うん!!」と力強く頷き、それに同意するように千歌と梨子も頷くのだった。

「OK、行こうということの良いのね……?」

鞠莉はそれだけを言い残して体育館から立ち去って行くのだが、その時、梨子があることに気づいた。

「待って! この学校の生徒って、全部で何人？」

「えっと……あっ!」

梨子の問いかけに対して曜は少し考え込んだ後、すぐにあることに気づくのだが、千歌と無爪はイマイチ分かっていないらしく、首を傾げる。

「分からない? 全校生徒全員来ても……ここは、満員にはならない……」

「そういうことか……。あの理事長、多分分かっててあんなこと言ったな……」

\*

その後、4人は学校の授業も終わって帰りのバスに乗っていたのだが、千歌は窓の外を見ながら「どうしよう……」と今後のライブのことで頭を悩ませていた。「でも、鞠莉さんの言うことも分かる。それくらい出来なきゃ、この先もダメということでしょ?」

「ラブライブみたいな大きな大会を目指すなら尚更だよね?　これが成功してもまだ小さな一歩ってことだし」

実際にこれくらいやってのけなければこの先到底スクールアイドルなんてやっていけないだろうし、梨子も無爪も鞠莉の出した課題はそういうことなのだと理解していた。

「やっと曲が出来たばかりだよ?　ダンスもまだまだだし!」

すると曜と無爪は苦笑しながら顔を見合わせると千歌にある言葉を投げかける。



「じゃあ諦める？」

「諦めない!!」

曜と無爪のその言葉を聞いて千歌は拳を握りしめて逆にやる気を出す。

「なんでそんな言い方するの？」

そこで梨子はその言葉を聞いて少しキツイ言い方をした2人にどことなく不満そうな顔をするが、曜と無爪曰く「こう言った方が彼女は燃えるから」とのこと。実際に千歌はいかにもやる気満々といった表情を浮かべていた。

すると彼女は何かを思いついたのか突然「そうだ!!」と言って立ち上がり、そんな千歌を見て曜は「ねっ？」と視線を梨子に送る。

\*

「お願い!! いるでしょ、従業員？」

家の旅館に帰った千歌は居間でテレビを見ながらくつろぐ美渡にプリンを差し出して彼女が勤務している会社の従業員を今度のデビューライブに誘って欲しいと頼

み込んでいた。

ちなみに曜、梨子、無爪は今は千歌の部屋で待機している。

「そりゃいることはいるよ？」

「何人くらい？」

「本社も入れると……200人くらい？」

それを聞いて千歌はぱあっと明るい表情を浮かべて自分達が制作したポスターを美渡に見せる。

「あのね！ 私達来月の初めにスクールアイドルとしてライブを行うことにしたの！」

「スクールアイドル？ アンタが？」

美渡は千歌の言葉を聞いて思わず笑ってしまうが千歌はそれにムスっとしつつもそれでも会社の人200人ほど誘って彼女にも来て欲しいとお願いするのだが……美渡は呆れたような表情を浮かべる。

「むっ、満員にしないと学校の公認が貰えないの!! だからお願い!!」

千歌は両手を合わせて改めて美渡にそうお願いするのだが、美渡はテーブルの上

にあったマジックペンを手に取り……千歌の額に「バカチカ」と書き込むのだった。

\*

「むう、おかしい……！ 完璧な作戦の筈だったのに！」

それから美渡に追いつかれた千歌は自分の部屋に戻り、濡れティッシュで額の文字を消そうと拭きながらそんなことをボヤク。

「普通そうなる」

「うん、私もお姉さんの気持ちも分かるけどね」

無爪と曜も美渡の気持ちは分かるし、むしろ断られる可能性の方が高いのである結果は何となく分かっていた。

そんな2人に対して千歌は「ええ!? 2人ともお姉ちゃん派!」と驚きの声をあげるが……そこで彼女は一緒に来ていた筈の梨子がいらないことに気づき、曜に尋ねるとお手洗いに行ったそうさ。

尚、その梨子はというと現在……千歌の部屋のすぐその廊下でしいたけが眠っ

て道を塞いでいた為、彼女はしいたけを避けようとして襖と手すりに手と足をかけて移動しようとしていた。

「ぐぐぐ……！」

するとそこで襖が開いて千歌と無爪が顔を出し、そこでそんな梨子の今の状況に2人は気づく。

「あれ？ そんなところで何やってんの？」

「ストレッチ……？」

「違うわよ！」

それよりも今は先ず人をどうやって集めるかを考えなければならぬのが先決だと曜は言い、千歌も腕を組んで考え込む。

「なっちゃんは何か良い案ない？」

「うーん、町内放送とかは？ 頼めばできるんじゃない？」

それを聞いて千歌も「成程！」と無爪の意見に納得し、曜も「確かにそれならいけるかもね」と呟く。

あとは高校がいっぱいあるのでスクールアイドルに興味ある高校生もいっぱい

るだろうと考えて沼津にでも行って宣伝するのもありかもしれないと千歌は意見をだし、取りあえず人を集めるためにやることは大体決まった。

その際、丁度力の限界が来た梨子は手と足を手すりとは襖から滑らせて「ひいひい〜!!」と悲鳴をあげてしいたけの上に着っこちてしまった。

＊

翌日、学校の終わりに千歌、梨子、曜、無爪の4人は沼津駅にチラシを持ってライブの宣伝をするために訪れていた。

「東京に比べると人は少ないけど、やっぱり都会ね〜」

「そろそろ部活終わった人達が来る頃だよね？」

「よーっし、気合い入れて配ろう!!」

「っていうか、やっぱり僕も付き合われるのね……」

上から梨子、曜、千歌、無爪の順で喋り、千歌は右腕を上げ気合いを入れてチラシ配りを開始。

「あの！　お願いします!!」

したのは良いのだが……千歌はチラシを帰宅中の2人の女子生徒に配ろうとしたが、見事にスルーされてしまう。

「意外と、難しいわね……」

「こういうのは気持ちとタイミングだよ！　見てて！」

曜は梨子にそう言った後、すぐに先ほどとはまた別の女子生徒2人を発見して下から顔を出すようにしてその2人の目の前に現れ、チラシを配る。

「ライブのお知らせです!!　よろしくお願いします!!」

「ライブ？」

すると女子生徒の1人はチラシを受け取り、もう1人の女子生徒は「あなたが歌うの？」と尋ねると曜は「はい！」と元氣よく挨拶しながら「来てください♪」と敬礼する。

「日曜か、行ってみる？」

「よろしくお願いします!!」

そしてその光景を見て梨子は思わず「す、すごい……」と呟くのだった。

「コミユカお化けだね、曜ねえ……」

「よし私も!!」

もう1度気合いを入れ直した千歌は眼鏡をかけた、気弱そうな女子生徒に右手で「壁ドン」をして左手でライブのチラシをその女子生徒に見せる。

「ライブやります、是非……」

「えっ、でも……」

「是非……!!」

すると千歌はキリッとした表情と声を出してその女子生徒に顔を近づけ、女子生徒は戸惑いつつもチラシを受け取ってその場から逃げるように去って行くのだった。

ちなみにそれを見ていた無爪はなぜか羨ましそうな視線を千歌に送っており、梨子はそんな無爪を見て「なんで羨ましそうに見てるの？」と疑問に思うのだった。

「勝った!」

そう言いながらガッツポーズを決める千歌、またその一部始終を見ていた曜は無爪と千歌を交互に支線を送り、何かを思いついたのかニヤリとした笑みを浮かべる。

「千歌ちゃん千歌ちゃん！ ちょっと！」

曜は手招きしながら千歌の名を呼び、彼女「なあに〜？」と素直に曜の元に行く。彼女はゴニョゴニョと千歌にあることを耳打ちし、それを聞いた千歌は「よし！」と笑みを浮かべると彼女はジッと無爪の方へと顔を向ける。

「えっ、な……なに？　なんか怖いんだけど……」

「あの2人を企んでるのかしら……？」

すると千歌はドシドシと大きな足音を立てながら無爪の方へと歩いて行き、それに驚いた無爪は後ろ歩きで後方へと下がっていくのだが……すぐそこには壁があった。為それ以上下がることはできず、千歌は「フフッ」と不敵な笑みを浮かべると……。

そのまま「ドン!!」っと無爪に壁ドンしたのだった。

「ふあっ!?!」

それに驚きつつも無爪は顔を赤くして少し嬉しそうだった。

「えへへ、驚いた〜？　曜ちゃんもこれやればなっちゃんも喜ぶって言われたからやってみただけ……」



(ま、まさかの逆壁ドン……!?)

しかし、それだけには留まらず、千歌は再び不敵な笑みを浮かべてキリっとした表情を見せながら無爪の顎をクイッとあげる。

「ちよ、ちよっ……ちちちちちち、千歌ねねねね……!!」

顔を真っ赤にして頭から湯気を出す無爪に曜はお腹を押さえて笑っており、また梨子はそのような2人を見て彼女も顔を赤くしつつも「千歌ちゃんの顎クイ……」と小さく呟いていた。

「よし、また勝った!!」

そして無爪を解放し、又もやガッツポーズを決めて誇らしげにする千歌。

「って勝負してどうするの!？」

と梨子がそこでツツコミを入れる。

最もなツツコミである。

「次、梨子ちゃんだよ！」

「えっ、私!？」

しかし千歌に突然そんなことを言われて梨子は戸惑ってしまふ。

「当たり前だよ！　3人しかないんだよ！」

「それは、分かってるけど……ってん？　3人？」

そこで梨子には自分、千歌、曜、無爪の4人で来た筈なのだが……なぜかチラシ配りをする人数が1人減っており、彼女は辺りを一旦見回すとそこには先ほどの千歌の「壁ドンと顎クイコンボ」が余程効いたのか、未だに頭から湯気を出して目を回してダウンしている無爪の姿があった。

「ちよつ、無爪くん思いつきりダウンしてるじゃない!!　千歌ちゃんのせいで……」  
「ええ!?!　私のせい!?!　それを言うなら元々曜ちゃんが……」

千歌と梨子は曜の姿を探すと彼女は既にチラシ配りの作業に戻っており、一生懸命頑張っている姿を見たら怒るに怒れなかった。

「はあ、こういうの苦手なのに……」

そして意を決した梨子はチラシを手にとって堂々と宣伝を行う。

「あの！　ライブやります!!　来てね……!」

映画のポスターに対して。

「……何やってるの？」

ごもつとも。

「練習よ、練習！」

「練習してる暇なんてないの！ さあ!!」

千歌は素早く梨子の背後に回り込んで慌てる彼女の背中を押す。

「えっ？ あっ、えっ？ 千歌ちゃん!？」

その際、まだ春だというのにコートを着て、サングラスとマスクをつけたいかにも不審者なスタイルをした少女とぶつかりそうになってしまふ。

「あっ、すいません！」

すぐさま謝る梨子だが、すぐにハツとしてこの際チラシを渡そうと思ったのか彼女は「あ、あの、よろしくお願いします!!」と戸惑いながらもチラシを不審者少女に渡す。

「うう……」

「……あの……」

しばらく受け取るかどうか悩んだような素振りを見せた不審者少女は最終的に梨子の持っていたチラシを受け取り、そのまま彼女は逃げるように走って行くのだっ

た。

「受け取ってくれた……！」

それに梨子は嬉しそうな笑顔を見せる。

「あの人……どっかで見たような……」

またその光景を少し離れた位置で見ていた曜は先ほどの不審者少女に見覚えがあったのだが、思い出せず、取りあえず今はチラシ配りに専念しようとして通りかかった人にそれを渡そうとするのだが……。

「アレ？ 曜ちゃん？」

「へっ？」

そこにいたのは、ガタイがよく、物凄く厳つい顔をしたヤクザみたいな怖い顔つき  
きの男性が立っていた。

「……んっ？ はっ、ち、千歌ちゃん!! 大変!! 曜ちゃんがなんだか怖い人に  
絡まれてるわ!!」

また、それを見た梨子は曜がそのヤクザみたいな顔の男性に絡まれているところ  
を目撃して慌てて千歌を呼ぶ。

「ええ!？」

「つてアレ、レイジさんじゃないの？」

のだが、どうやら千歌や無爪の知人らしく、梨子は彼女のその言葉を聞いて「えっ?」と首を傾げた。

「ホントだ! あの人は『渡辺 レイジ』お兄ちゃん、曜ちゃんの従兄だよ!!」

「えっ、そうなの!？」

千歌のその言葉に梨子は驚きの声をあげる。

「もう、静岡まで帰って来てるんなら連絡くらいしてくれれば良かったのに……」

「ごめんね? 曜ちゃんを驚かせようと思って……」

再び場面は「渡辺 レイジ」と呼ばれた男性と曜が会話しているところに戻り、レイジは静岡県出身なのだが現在は東京の学校で教師として働いており、今回は少し長めの休暇が取れたのでこちらに戻って来たのだという。

「へえ、スクールアイドルやるんだね、曜ちゃん。 うん、曜ちゃんは可愛いし、人気者だからきつと人気出るよ、そのスクールアイドル!」

「うん!! それに千歌ちゃんや、東京からやってきた梨子ちゃんって娘と一緒に

今度ライブやるんだ!! レイジ兄ちゃんも見に来れたら来てみてよ!」

曜はそう言いながらレイジにチラシを受け渡し、それを手に取った彼は「うん」と頷き、彼女の頭を撫でる。

「頑張ってるね? 僕も応援してるから」

「えへへ♪ 頑張るであります!」

曜は頭を撫でられて嬉しそうにしながら敬礼し、レイジは「それじゃ、僕はこれから行くところがあるから」とだけ伝えて彼は千歌や無爪にも軽く挨拶した後、その場を去って行き、曜はそんなレイジに「バイバーイ!」と手を振って別れるのだった。

それから一同はチラシ配りを再開するのだが、しばらくすると千歌が花丸とルビィが一緒に歩いているのを発見。

「あつ、花丸ちゃん!!」

千歌は手を振りながら花丸達の元へと駆け寄り、それを見てルビィは慌てて花丸の後ろに隠れる。

そして千歌は彼女にも「ライブ来てね?」と花丸にチラシを渡し、その言葉を

聞いて反応したのか、花丸の後ろに隠れていたルビィが食いつくように飛び出して来た。

「やるんですか!？」

「えっ……?？」

しかし、すぐに気恥ずかしくなったのか、ルビィはまた花丸の後ろに隠れてその場に膝を抱えてしゃがみ込んでしまう。

「絶対満員にしたいんだ？ だから来てね？ ルビィちゃん？」

千歌は優しい口調でルビィにチラシを渡し、その様子を見ていた無爪はというと……。

「……姉の嫌いなものを自分も嫌わないといけない……かっ」

今の光景に何か思うことがあったのか、彼はそんなことを呟いていた。

それから千歌はまだチラシを配らないといけなからと別れを告げて立ち去ろうとするのだが、そこでルビィに「あ、あのお!!」と呼び止められる。

「えっ?？」

「ぐ、グループ名は……なんて言うんですか!？」

「グループ……名？」

千歌はルビィに言われてそこで未だにまだ自分達のスクールアイドルのグループ名を考えていないことに気づき、彼女は「あっ……」と小さく呟いた。

「やれやれ、千歌ねえらしいと言えばらしいけど……」

そして近くで話を聞いていた無爪も千歌に呆れて溜め息を吐くのだった。すると……その時のことである。

突如、上空に赤黒い光が現れ、その光はやがてウルトラマンにも酷似した姿……「ダークロプスゼロ」となって地上に降り立ったのだ。

「うわあ!? なにあれ!? ウルトラマン……?」

突然現れた千歌達はダークロプスゼロに驚くが……、無爪は直感からか、ダークロプスゼロがすぐにウルトラマンではないことを感じ取った。

「違う、アレはウルトラマンじゃない!! 千歌ねえ達は早く逃げて!!」

「あっ! なっちゃん!!」

無爪は千歌達にそれだけを言うと彼はすぐさまどこかへと走り出し、またダークロプスゼロは腕をL字に組んで放つ必殺光線「ダークロプスゼロショット」を放つ



て1つのビルを粉々に破壊した。

「ピギアアアア…?」

突然の出来事にルビィは驚きの声をあげ、千歌は「みんな兎に角逃げよう!!」と言って彼女は曜、梨子、ルビィ、花丸を連れてすぐにその場から走り出すのだった。

＊

数十分前の宇宙……。

そこでは突如、丸い穴のようなものが開き、その中から銀色の鎧「ウルティメイトイージス」を纏った戦士「ウルティメイトゼロ」が姿を現した。

だがゼロは「うぐっ……!?」っと苦しそうな声をあげた後、ウルティメイトイージスは「ウルティメイトブレスレット」というブレスレットに変形。

ゼロの左腕に装着されるのだがブレスレットには所々に亀裂が入っており、ゼロはブレスレットをジッと見つめる。

『ありがとよ、ウルティメイトイージス……』

調子が戻ったらその内直してやる

からな』

そしてゼロは視線を別の方向へと映すと、そこには1つの地球があった。

『キングの爺さん、久しぶりだな。俺の声聞こえてるか?』

その後、ゼロは人目のつかないところで地球人としての姿……「モロボシ・ラン」へと変わって地球に降り立ち、彼はかつてのクライシス・インパクトで街に何か影響が出ていないか確認するため、歩き始めるのだが……。

「ぐっ……!? 地球人の姿になっても、身体へのダメージはやっぱり残ったままか……」

ランは古傷を押さえつつも再び歩き出し、しばらく街を歩いているとビルに設置された巨大なテレビ画面にのニュースでスクールアイドルと思わしき少女達の特集が取り上げられており、その中には現役時代のM.Sの姿も確認でき、ランはそれを見て少し驚いた様子を見せる。

「ありゃ、穂乃果達か? 成程な、この世界はどうやら、オーブのところと似た世界らしいな。だがこの世界にも穂乃果達までいるとは驚いた……。まあ、アスカやコウマのどちらの世界にも響達とかがいたし、不思議じゃないか」

そう眩きながらランがまた歩き始めようとしたその時、突如として黒い光のようなものがどこからか放たれ、ダークロプスゼロが出現。

ダークロプスゼロは現れてすぐさま街を破壊しながら歩き始める。

「アイツは……ダークロプスゼロ!？」

それに以前対戦したことのあるダークロプスゼロを見てランは驚きの声をあげる。

さらにランはダークロプスゼロが元々はベリアルが作った「ダークロプス」というロボットだったことから、彼はまさかベリアルが生きているのかと考え、真相を確かめる為にもランはゼロに変身しようと変身アイテム「ウルトラゼロアイNE O」を取り出すのだが……。

『ウルトラマンジード! プリミティブ!』

そこに、ダークロプスゼロに対抗するため無爪が変身した「ウルトラマンジード プリミティブ」が現れ、ジードはジャンプして勢いをつけて拳をダークロプスゼロに叩き込む。

『ぐう!? いったあゝ… ってか硬い……!』

しかし、ジードはダークロプスゼロの予想以上の硬さに手をブンブン振り、その隙にダークロプスゼロはジードの肩を掴んで胸部を殴りつける。

『ウグアア!!』

「アレは……!! あの手は、ベリアル……!!? いや、似ているが……違う……?」  
ランはジードを見て一瞬自身の宿敵でもあるベリアルかと思ったが……。

ジードからはベリアルほど邪悪な気配を感じなかった為、即座にジードがベリアルではないことを理解した。

そしてジードは今度はダークロプスゼロに蹴りを入れようとするのだが、ダークロプスゼロは膝を曲げてそれを受け止め、ジードの右肩にチョップを叩きこむ。

『グア!?!』

さらに続けざまにダークロプスゼロは2回連続で拳をジードに叩き込み、最後に腹部にストレートキックを炸裂。

『ウワアア!!』

蹴り飛ばされ倒れるジードだが、なんとか立ち上がってジャンプし、ダークロプスゼロの背後に回り込むと後ろから掴みかかってバックドロップを決める。

『オリヤアア!!』

それを喰らいながらもダークロプスゼロはなんとかすぐにジードから離れ、多少はダメージはあったのか若干フラつく。

しかしダークロプスゼロはすぐに体勢を立て直し、単眼から発射する破壊光線「ダークロプスメイザー」をジードへと撃ち込む。

『ウルトラマンジード！ トライスラッガー!』

それに対してジードは「トライスラッガー」となるとジードは3つのアイスラッガーを操って扇風機の容量で光線をかき消そうとするのだが……ダークロプスメイザーはそれを撃ち破ってジードに直撃する。

『シェアアア…!』

火花を散らして倒れ込むジード、ジードはアイスラッガーの1つを頭部に戻した後、なんとか立ち上がって2つのアイスラッガーを両手に持ってダークロプスゼロに向かって接近。

それに対してダークロプスゼロも頭部の2本のブーメランである「ダークロプスゼロスラッガー」を両手に持ち、ジードはアイスラッガーを素早く振るうのだ

が……ダークロプスゼロはトライスラッグの素早さにもついて行き、ジードのアイスラッグによる攻撃をことごとく防ぐ。

「姿が変わった……。アレはまかさ、ウルトラカプセル……？ アイツが持っているのか？」

『グッ、こいつ……硬いだけじゃなくて動きも読んでくる……！』

先ほどはドレンゲランの時と同じようにアイスラッグでジードは相手の関節を狙おうとしたのだが、ジードの言うようにダークロプスゼロはこちらの動きを読んでくるため、ドレンゲランと同じようにはいかなかった。

さらにダークロプスゼロがジードの攻撃を次に受け流すと近距離からダークロプスメイザーが放たれて直撃し、直撃を受けたジードは膝を突き、ダークロプスゼロはジードにトドメを刺そうとダークロプスゼロスラッグを振り上げる。

しかし、その時、ジードにトドメを刺そうとするダークロプスゼロを見てランはウルトラゼロアイNEOを目に装着する。

「デュア!!」

するとランは「ウルトラマンゼロ」へと変身し、ダークロプスゼロとジードの間

に割り込むようにして現れる。

『お前等2人には色々と言いたいことがある……！ 先ずはダーククロプスゼロ！  
なんでテメーがいる!? ベリアルは生きているのか!?』

しかし、ダーククロプスゼロはゼロの問いかけには答えず、敵意だけを向けてダーククロプスゼロスラッガーを構えて襲いかかってくる。

『なんとか言えよコノヤロー!!』

それに対してゼロも反撃しようと駆け出して行く。

戦闘BGM「ウルトラマンゼロアクション」

ダーククロプスゼロはダーククロプスゼロスラッガーを振るって攻撃するがゼロはそれを頭をしゃがめて回避し、後ろに回り込む。

それに気づいたダーククロプスゼロは即座に振り返りざまにダーククロプスゼロスラッガーを振るうが、ゼロはそれを受け流し、ダーククロプス腹部に連続で拳を叩き込む。

『デヤアア!!』

ダーククロプスゼロは一度後退してゼロから距離を取ると額のビームランプから放

つ光線「ダークロプスゼロスラッシュ」を放つがゼロはジャンプしてそれを躲し、そのまま右足に炎を宿した跳び蹴り「ウルトラゼロキック」を急降下キックの容量でダークロプスゼロへと叩きこむ。

『ウルトラゼロキック!!』

それを喰らって身体から火花を散らしてよろめくダークロプスゼロだが……、その時、クライシス・インパクトの時のダメージによってゼロは一瞬苦しそうな声をあげて胸の辺りを右手で押さえる。

その隙にダークロプスゼロは腕をL字に組んで放つ必殺光線「ダークロプスゼロショット」を発射。

それに対抗するようにゼロもすぐさま左腕を伸ばした後、腕をL字に組んで放つ必殺光線「ワイドゼロショット」を放つ。

『ワイドゼロショットオ!!』

2人の光線がぶつかり合うが……ゼロの方が威力が上だったらしく、ダークロプスゼロの光線はアツサリとかき消されてゼロのワイドゼロショットがダークロプスゼロに直撃。



完全に倒せなかったものかなりのダメージを受けたダークロプスゼロは部が悪いと思っただのか、ゼロに背を向けてその場から飛び去ってしまった。

『逃がすかよ!!』

しかし、ゼロは逃がすまいと頭部の2つのブーメラン「ゼロスラッガー」を胸部のカラータイマーの左右に装着し、エネルギーをチャージしてそこから放つ強力な光線「ゼロツインシュート」を逃げようとするダークロプスゼロに発射。

『ゼロツインシュート!!』

そしてダークロプスゼロはゼロツインシュートの直撃を受けて空中で爆発し、完全に破壊されるのだった。

『はあ、はあ、流石に身体へのダメージはそれなりにあるせいで何時もよりは上手く戦えねえな……』

するとゼロは話を聞こうとジードの方へと振り返り、肩で息をするジードにゼロは「おい、大丈夫か？」と声をかけるのだが……。

『ううっ……! あなたは……?』

『あっ、オイ!!』

そのままジードはその場に倒れ込み、それと同時に変身が解除されて無爪の姿へとジードは戻ってしまふ。

そんな倒れ込んだ無爪の元に「大丈夫!？」と声をかけながら心配そうにペガと千歌が駆けつける。

『……仲間がいるのか?』

『い、行こう無爪!』

今は無爪の身体を安静にさせるべきだと考えたペガは取りあえずはゼロのことは置いておいて一旦秘密基地の「星雲荘」に行こうということで一同はその場を離れ、ゼロは「オイ！」と声をかけようとするのだが、その時……ゼロの目に崩れ落ちそうなビルが彼の目に飛び込んできた。

そしてビルが崩れて瓦礫が1人の小学生の少年目がけて降り注ぐとし、それをあのレイジという1人の男性がその少年の元に「危ない!!」っと駆け出そうとするのだが……。

その際、足下にあった「バナナの皮」に気づかず、レイジはそれを踏んづけてツルっとその場に盛大に倒れ込んでしまったのだ。

「うわあああ!!」

しかも運の悪いことにバナナの皮を踏んづけてしまったことで道路にいきなり飛び出した形となり、1台の運転中のトラックと衝突してしまうのだった。

\*

それからしばらく経った後の星雲荘にて……。

「いやあ、曜ちゃんや梨子ちゃんに色々と誤魔化すの大変だったね？ 私も途中で2人とはぐれちゃってなっちゃちゃんを探しに行っちゃったから後で合流した2人から怒られるし」

「うん、今度からもう少し心配かけないようにしないとね……」

今は無爪は傷を癒やすことと倒されたとはいえ念のために敵の情報を知ること、そしてあのウルトラマンゼロについてのことを知るために、無爪、千歌、ペガはこの場所に訪れており、まずはレムに頼んでゼロのことを調べて貰うことにした。

「っていうか、私、初めてこの秘密基地に来たけど凄いねー！ カッコイイ!!」

千歌は興味深そうに辺りを見回し、それに対して無爪は「でしょ！」と一言どこか自慢げな表情を浮かべる。

『あっ、2人とも！ データ出たみたいだよ！』

ペガの声を聞いて無爪と千歌の2人は部屋の中央に出されたモニターに視線を送り、そこではゼロが今日戦ったダークロプスゼロと戦闘を行っている映像が映し出されており、レムはゼロについての説明を行う。

『彼の名前はウルトラマンゼロ、ベリアルと敵対するウルトラの星の戦士です』

「えっ？ ってことは、僕のこと捕まえに来たのかな……？ 僕が、ベリアルの息子だから……」

レムの話を聞いて無爪は不安な気持ちになるが、そんな無爪の気を使ってか千歌は「大丈夫!!」と言って無爪の両手を握りしめる。

「なっちゃんは何も悪いことなんてしてないもん!! 捕まる理由なんかないし、例えそうだとしても私がどうにかゼロに話を聞いて貰えるように説得する!!」

「う、うん……! ありがとう、千歌ねえ……。でも、あの……」

両手を握られ、顔を赤くしてドギマギする無爪に千歌はキョトンとした表情を

しながら不思議そうに首を傾げる。

「あ、あの……！ その、なんていうか、手を握られるのちょっと恥ずかしいっていうか……」

「あっ……」

無爪にそう言われて彼の両手を握りしめている自分の両手に視線を送り、そこで彼女は急に恥ずかしくなったのか千歌はパッと急いで手を離し、「あ、あははは！」と笑って誤魔化す。

「ご、ごめんね？」

「い、いや……」

ただ手を離された無爪はどことなく名残惜しそうにしており、同時にまた「千歌ねえの手、柔らかかった……」などと考えていたりするのだった。

『ところでアレは？ ウルトラマンゼロに似てる！ 親戚かな？』

「いや、親戚だったらゼロが倒すのおかしくない？」

ペガがダーククロスゼロの方へと指差すとレムはすぐにダーククロスゼロのことについての解説を行う。

『ダークロプスゼロ、かつてゼロを模して作られたロボット兵器です』

「成程、通りで硬い訳だ……。しかもドレンゲランと違って機動性は高いみたいだし、あの時みたいに関節を狙うのは難しかったよ」

取りあえず、何にしてもゼロがダークロプスゼロが倒してくれたおかげでファーストライブのことも心置きなく集中できるし、しばらくは大丈夫かもしれないという事で千歌はライブのことは自分達に任せて無爪は寝て傷を治すように言い、彼を寝かしつけるのだった。

「なんだったら眠れるまで子守歌でも歌ってあげようか？」

「ニシシ♪」とからかうように笑う千歌に無爪は「いらないよ！」とふて腐れたように言い返す。

「第一、僕もうそんなに子供じゃないし!!」

「まあ、何にしてもしばらくはここで休んで。それじゃ私は梨子ちゃん達と一緒にグループ名考えなくちゃいけないから！」

千歌はポンポンっと無爪の頭を軽く撫でたあと、彼に手を振ってからエレベーターに乗り、地上へと戻るのだった。

\*

とある病院にて……。

そこでは少年を助けようとトラックに轢かれ、瀕死の重傷となったレイジが運び込まれており、彼の命はもう長くは持ちそうには無かった。

「ご家族にはもう連絡した？」

「いえ、まだ……」

「ちよつともう、急がないと！」

病院の看護師達がそんな会話をしているとレイジの前には見えないようにしたゼロが現れたのだ。

『見てたぞ？ お前は少年を助けようとした。顔は怖いけど良い奴じゃねえか、気に入ったぜ』

ゼロはそう言い終わった後、彼の命を救うためにゼロはレイジの身体の中へと入り、レイジとゼロは同化……。

すると、ゼロがレイジと同化したことにより、彼の負っていた傷は瞬時に回復し、一気に生命力の戻った彼は突然パチリと目を覚まし、起き上がった。

「あ、あれ!? えっ!? なに!? ここは!?!」

突然起き上がったレイジに看護師達は驚き、「きゃああ!?」と悲鳴をあげるが……そんなことは露知らず、レイジは自分の腕時計を見て「ヤバイ!?!」と言って病院を飛び出すのだが……。

「あれ? なんだこれ?」

その時、胸の内ポケットに違和感を感じたレイジは変わった形をしたメガネのよなアイテムを取り出すのだが……すぐに今はこんなことをしている場合ではないと考え、近くのタクシー乗り場へと向かうのだった。

\*

夕方、海辺にて……。

そこでは準備運動をしながら自分達スクールアイドルのグループ名のことを話し



合っている千歌、梨子、曜の3人の姿があった。

「まさか忘れてたなんて……」

梨子が呆れた様子で言うが……。

「梨子ちゃんだって忘れてた癖に！」

と千歌も言い返す。

「兎に角、早くグループ名を決めなきゃ！」

「そうだよねえ……。 どうせなら、学校の名前が入ってる方が良いよね？」 『浦

の星・スクールガールズ』とか？」

しかし、そのグループ名には「まんまじゃない！」が梨子がツツコミを入れて却下。

すると千歌は「じゃあ、それなら梨子ちゃんが決めてよ」と無茶ぶり気味なことを言われて梨子は「えっ!？」と一瞬戸惑う。

「そうだね！ ほら、東京で最先端の言葉とか！」

「そうだよそうだよ！」

曜と千歌に言われて梨子は「えーっと」と呟きながら少し考え込む。

「じゃあ、3人海で知り合ったからスリーマーメイドとか……?」

少し自信なさげな様子で梨子はそうグループの名前の案を出すのだが……。

あまりにもあんまりなネーミングだったのがいけなかったのか、千歌と曜はスルーして準備運動に戻る。

「待って！ 今の無し!!」

それから3人は体力作りのジョギングを行いながら話の続きをし、千歌は曜にもなにか良い名前が無いかと尋ねるのだが……。

『制服少女隊』!! どう?」

曜はそう言いながら自信ありげに敬礼しながら提案するのだが、千歌と梨子からは「無いかな?」「そうね」と見事に却下され、却下された曜は「ええー!?!」と驚きの声をあげてショックを受ける。

それから3人は砂浜に木の棒で色々なグループ名を考えては書き込んで行くのだが、やはり良いのが無く、中々決まらなかった。

「ねえ、無爪くんにも電話で聞いてみたら? ほら、無爪くんってヒーロー好きだからカッコイイ名前の案とか出るかも……」

梨子は無爪にもグループ名を考えるのを協力して貰ってはどうかと言うのだが、それには曜も千歌も反対だった。

「無理無理、なっちゃんに頼んだらそれこそスクールアイドルとは思えない名前になるよ。ドンシャインに因んで『爆裂アイドル戦記』とかいう名前になるよ絶対」  
「うんうん、他にもなっちゃんが考えそうなのは超人機なんたらとか特警なんたらとかになるよ多分」

千歌と曜のその説明に梨子は「成程、確かにあり得るかも……」と納得し、結局無爪に頼む案も無くなってしまふ。

「こういうのはやっぱり言い出しっぺがつけるべきよね？」

「賛成!!」

と梨子と曜が言いだし、千歌は「戻ってきた!？」と頭を抱える。

「じゃあ制服少女隊でも良いって言うの!？」

「スリーマーメイドよりは良いかな……?」

「それは無しって言ったでしょ!？」

「だってえ〜」

千歌と梨子がそんな会話をしていると不意に千歌はすぐ近くに書いてあった名前に気づいて視線を送り、それに釣られるように梨子と曜も千歌と同じ方向へと視線を向けるとそこには砂の上に「A Q U O U R S」と書かれた文字があったのだ。

「これ、なんて読むの？ えーきゅー、あわーず？」

「アキュア……？」

「もしかして『アクア』？」

曜の言葉に梨子は「水ってこと？」と尋ねると彼女は「うん」と頷く。

「……水かあ。なんか、よくない？ グループ名に！」

「これを!? 誰が書いたのか分からないのに……」

千歌の意見に梨子は少し不満げな様子を見せるが……千歌曰く「だから良いんだよ!!」とのこと。

「名前決めようとしている時にこの名前に出会った！ それって、凄く大切なんじゃないかな!?」

「そうかもね!」

「このままじゃ決まりそうもないし」

そんな千歌の言葉に曜と梨子も納得し、彼女達のグループ名はスクールアイドル「Aqours」に決定するのだった。

「この出会いに感謝して……！ 今から！ 私達は……！ 浦の星学院、スクールアイドル！！ 『Aqours』！！」

また、そんな時のことである。

しょんぼりとした様子で海辺の近くを歩いて帰っていたレイジが近くにやってきたのは。

「はあ……」

何やら落ち込んだ様子で肩をガツクリと落とすレイジに、レイジと同化したゼロが心配して話しかける。

『なんでショゲてんだ？』

「今日、東京からこっちの学校に転勤して明後日から早速教師として行くことになったんですけど、前の日に色々手続きなんかもあって……。でも今日その手続きの約束の時間に遅刻しちゃったから『やる気があるのか』って怒られて……」

レイジはその場に蹲ってしょんぼりとした様子で自分が落ち込んでいる理由を話

す。

『成程な。でもまあ、あのダークロプスゼロの騒ぎに巻き込まれたんだから遅刻するのはしょうがねえだろ』

「あつ、そっか！　ちゃんとその辺説明してませんでした！　急いでたから忘れて……んっ？」

『んっ？』

そこでようやくレイジは自分が見えない誰かと話していることに気づき、彼は「えっ？　えっ!？」と戸惑い、辺りを見回すが自分のすぐ周りに人はおらず、頭を抱えて半分パニックを起こす。

「えっ、なんですかこの声!?　まままま、まさか!!　おばおばおば……!!」

『お化けじゃねえよ！　俺はゼロ、ウルトラマンゼロ。　お前の命を助けるにはこうするしかなかった』

レイジは取りあえず耳を塞いでみるが、耳を塞いでいてもゼロの声は聞こえ、レイジはますますパニックを起こす。

「耳塞いでも聞こえるんだけど!？」

『そうだよお』

「なななな、なにこれ怖い… おぼおぼ…！ お化けさんごめんなさい!! マジですいません!! 何がいけなかったのか分からないけど兎に角すいませえええええええん…!!!」

パニックのせいでゼロの話があまり聞いていないレイジはその場で土下座して未だにお化けと勘違いしているゼロに対して必死に何度も頭を下げる。

さつき子供を助けようとした男の姿はどこに行っただと言いたくなるくらいヘタレっぷりにゼロは少しばかり呆れるが…ゼロは「いいから黙って聞け!!」と大声で言い放ち、それに対してレイジもビビりながらも「は、はいいー!!」と返事をして言われた通りしばらく黙ることに。

『ええっと、じゃあ話を戻すけど…。命を助けるにはこうするしかなかった。身体を一体化させ、お前の身体の傷を癒やした。一体化には俺にも利点がある。前の戦闘で深いダメージを負い、まだ治ってない。お前の身体の中に入らなければ俺は地球で長時間の活動ができないんだ』

またゼロは一応、人間態でもある「モロボシ・ラン」になることは出来るが、そ

れでも身体のダメージを完全に無くすことは出来ないのだということも説明し、同化の方がダメージを人間態の時よりも最小限に抑えられるというのだ。

『だからそうだな。まあ、つまり、Win Winの関係だな。説明終わり！ 分かったか？ あっ、喋って良いぞ』

「いや、何を言ってるのかやっぱりよく分からな……」

その時、「ちょっと何するんですか!!」という聞き覚えのある声が聞こえ、レイジが声のした方に顔を向けるとそこには海辺で練習していた千歌達に4人のチンピラがナンパしていたのだ。

「君たち可愛いね〜！ なにしてんの？」

「え、えっとスクールアイドルのダンスの練習を……」

チンピラの質問に素直に答える千歌に梨子は「こんな人達に答えなくて良いわ！」と注意するのだが、そんな梨子の腕をもう1人のチンピラが掴む。

「こんな人達なんて酷いね〜！ 俺達傷ついちゃう！」

「梨子ちゃんを離して!!」

すると今度は曜が梨子の腕を掴んでいるチンピラの腕を引き離すのだが、それで



もチンピラ達は千歌達にべたべたと触って来ようとする。

「スクールアイドルって今流行のやつだっけ？ そんなものよりさ、もっと楽しいことしようよ！」

リーダー格のチンピラがそう言って千歌達3人をどこかに連れ去ろうとし、それを見ていたレイジは……。

「あわわわ！ たたたた、大変だ!! 曜ちゃん達が！ な、なんとか助けないと……！」

『随分下らねえことしてんな。おい、ちょっと身体借りんぞ？』

「えっ？ 借りるって……」

するとゼロはレイジの意識を乗っ取って文字通り身体を借りると彼は素早く千歌達の元へと駆け寄り、彼女達の腕を掴みチンピラ達の腕を素早く振り払う。

「っ、なんだテメェ……」

チンピラ達はレイジの人相の悪さに少しビビるが、それでも臆せず怒鳴り声をあげてチンピラAがレイジに殴りかかるがレイジはそれを片手で受け止めて右拳を振り上げるのだが……。

（んっ？　ちょっと待てよ、教師が暴力沙汰ってまずいよな？）

と考え、拳を下ろすと今度は後ろから回り込んだもう1人のチャンピラBが殴りかかる。

しかし、レイジは拳を掴んでいたチャンピラを盾にし、盾にされたチャンピラは仲間の拳を顔面に受けて軽く吹き飛ばす。

さらに今度は別のチャンピラCが背後から殴りかかるのだが、レイジはジャンプしてチャンピラBの後ろに回り込み、今度はBを盾にしてCはBを殴ってしまう。

「ぐふ!？」

「コノヤロー!!」

すると今度はリーダーがレイジに襲いかかるのだがリーダーの攻撃を受け流しつつ、一瞬の隙を突いて額にデコピンを喰らわせる。

「げふ!？」

『さてと、それじゃちょっと失礼しようか』

「「わわわ!？」」

そう言ってレイジはチャンピラのリーダーが倒れている隙に千歌、梨子、曜の3人

を纏めて抱えるとそのままスタコラさっさとその場から逃げ出すのだった。

「いやあ、ありがとうね？ レイジお兄ちゃん！」

「えっ？ あっ、うん……。 どういたしまして」

それから一定の距離まで逃げ切ったゼロは意識をレイジに返し、曜達からお礼を言われるのだが……。助けたのは自分ではないので何とも微妙な気持ちだった。

「それにしても、これじゃ今日は海で練習はできないわね……」

「うん、取りあえず今日はここまでかな……」

千歌と梨子は残念そうにしつつも今日はお開きということになるのだった。

＊

それから千歌はレムから持たされた通信機でまだ無爪が星雲荘で休んでいるというのを聞いて迎えに行こうと思ひ、無爪の元へと訪れる。

「なっちゃん？ もう大丈夫？」

『彼の名はウルトラマンジード、敵ではありません。運命に逆らい、立ち上がる者です。無爪、これで良いですか?』

「……なにしてんの?」

そこでは無爪が世間やゼロに対して自分は脅威ではないということを知らせるためにレムに文章を作らせており、そんな時に丁度千歌がやってきて彼女は不思議そうな表情を浮かべて首を傾げる。

「僕が世間に敵じゃないって知らせる為のメッセージをマスコミに送ろうと思って? それにゼロにも……」

「まあ、確かに少しは効果があるかもしれないけど……『運命に逆らい、立ち上がる者』ってところはちよつとかつこ付けすぎじゃ無い?」

「ええ? そうかなあ? まあ、取りあえずこれで送るよ! レム、お願い」  
無爪の言葉にレムは「了解しました」と返事をし、先ほどの文章をマスコミ宛てにメッセージを送るのだった。

「ところであのゼロって、僕の父さん……やっぱりベリアルと何かあったのかな?」

「

そこで無爪はフツと疑問におもったことを口にする。

「ああ。そう言えば、クライシス・インパクトってベリアルと色んなウルトラマン達が戦ったって噂もあるし、その中にゼロもいたのかな？」

『はい、この宇宙はその影響で崩壊寸前にまで陥りました』

千歌と無爪が疑問に思ったことに対してレムがそう解答し、2人は「成程……」と納得する。

するとその時、パソコンを弄っていたペガがネットで何かを発見し、2人を呼んでパソコンの画面を見せる。

『ねえ！ これ見て！』

無爪と千歌はパソコンの画面を覗き込むとそこには1人のまだ小学生くらいの少年が映し出されており、少年の頭上から瓦礫が振ってくるのだが……。

その瓦礫は少年の頭上に突然現れた光のバリアによって防がれ、少年は無傷だった。

『不思議な力……。これってもしかして梨子ちゃんの時と同じあの不思議な力じゃ？』

「確か、リトルスター……。早く探さないと……」

「ここってもしかして、今日行った沼津駅の近くじゃない？」

千歌の言う通り、動画が投稿された日が今日であることやこんな災害があった場所なんてダークロプスゼロが現れた辺りしかない。

それに明日もここでチラシを配る予定なので、その時に探そうということになるのだった。

「明日が学校じゃなければもっと早く探しに行けるんだけどなあ……」

「しかも私は明日は町内放送で梨子ちゃんと曜ちゃんと一緒に宣伝しないといけなからなあ……。 なっちゃんは今に行っというて貰える？」

千歌の言葉に無爪は「うん、分かった」と頷く。

\*

そしてその翌日、千歌たちは町内放送でライブの宣伝をしていた。

「浦の星女学院スクールアイドル、Aqoursです!!」

「待って！でもまだ学校の承認もらってないんじゃない？」

しかしそこで梨子があることに気づき、彼女に指摘され、千歌は「だぁー!?」と頭を抱える。

「じゃあ、えーっと……。浦の星学院非公認アイドル！Aquaです!! 今度の土曜、14時から浦の星学院体育館にてライブを……。!」

千歌は一応訂正を入れつつもライブの開催場所と時間を伝えようとする。

「非公認というのはちよっと……」

しかし、そこで梨子が「非公認」というのはいかがなものかと言ってきたため、千歌は困り果てた表情を浮かべる。

「じゃあ、なんて言えば良いのー!!」

そして彼女の叫びは駅に向かって歩いていった無爪にも聞こえ無爪は呆れたような顔をしていた。

「はあ、なにしてんだかバカ千歌ねえは……」

ちなみにペガは星雲荘で待機している。

同じ頃……とある喫茶店のとある席にて……。

そこではスカルゴモラに変身したり、ドレンゲランを呼び出したりした中性的な顔立ちの黒いスーツを着込んだ人物……「荒井」が椅子に座ってコーヒーを飲んでおり、彼は小説家としても活動しているため、今はその小説の編集者と打合せ中だった。

「先生、重版決まりました！ おめでとうございます！」

「……そうですか」

「編集長も喜んでました！」

嬉しそうにそう荒井に対して語る編集者だったが、編集者は荒井がどこか暗い雰囲気を出していたことに気づき、何か嫌なことでもあったのかと問いかける。

「……気の合わない相手と、久しぶりに会うかもしれないのです。あなたにもいるでしょう？　そういう人が……？」

「は、はあ……？」



すると荒井は窓の外を見つめ、その先には少し離れた場所から光の柱のようなものが立っていたのだが……それは荒井にしか見えなかった。

「気分次第でついたり消えたり……」

＊

無爪が沼津に到着してから数十分後、彼はペガと一緒にあの動画に映っていた少年を捜し回っていたのだが……中々発見することができないでいた。

そんな時、チラシ配りを終えた千歌も合流し、一緒に探すことになるのだった。

「って千歌ねえ、曜ねえと梨子さんはどうしたの？」

「えーっと、『なっちゃんと一緒に寄るところがあるから先帰ってて良いよ』って言って先に帰らせたよ」

それに対して無爪は「ふーん、そっか」とだけ返すのだが……気のせいかな、千歌の顔が少し赤かった。

「千歌ねえ？　なんか顔赤いけど大丈夫？」

「へっ!? あ、イヤ、大丈夫大丈夫!!」

千歌は笑って誤魔化し、彼女は梨子と曜と別れる際に言われた言葉を思い出していた。

『無爪くんと一緒に寄るところ……。それって……』

『デートだね』

『デートね』

『ち、違うよお!』

なんて2人にからかわれ気味に言われたものだから千歌は変に無爪を意識してしまい、彼女はまたも顔を赤くしてしまい、無爪に心配されるのだった。

(うう)。もう〜! 2人が変なこと言うからあ〜!)

すると……………。

2人が河原の辺りを歩いていると無爪が突然「あっ!」と声をあげ、隣を歩いていた千歌は「どうしたの?」と尋ねると無爪はある場所を指差す。

そこにはあの動画に映っていた少年が積み重ねた石をジッと見つめて立っていたのだ。

そして少年は右手に光を宿して石に向かって振り下ろすと石は見事に真っ二つに割れ、それを目撃した無爪と千歌は間違いないくあの少年がリトルスターの保有者であることを確信する。

「見つけた!!」

「行こうなっちゃん!!」

千歌の言葉に頷き、無爪と千歌の2人はすぐさま少年の元へと駆け寄る。

「探したぞ少年! ってん? ああ!?!」

すると無爪は少年の背負っていたランドセルについていたドンシャインのキーホルダーを発見し、彼は思わず大きな声を出して隣にいた千歌は思わず肩をビクリと振るわせてしまう。

そして少年はというと何も言わずにいきなり逃げだそうとし、慌てて千歌は少年の手を掴む。

「待って!! って熱!?!」

千歌が手を握った少年は梨子の時と同じく熱かった。

少年は千歌の手を振り払って逃げようとするが無爪は素早く回り込んで少年の肩

を掴んで引き止める。

「ちょっと待って!! 少年! そのキーホルダー、どこで買ったの!? 教えてお願い!!」

無爪は頭を下げて少年にドンシャインのキーホルダーをどこで買ったか聞こうとし、そんな無爪に千歌は呆れた表情を浮かべる。

「なっちゃん、今それどころじゃ……」

「それどころだよ!! ドンシャインだよ!?!」

\*

また、同じ頃……別の場所では。

『今日は学校とやらには行かなくて良いのか?』

「ええ、出勤は明日からなんで……」

レイジは外を歩きながらゼロとそんな会話をしており、ゼロはレイジの身体の中から街の辺りを見回す。

『この街にはもうスッカリ破壊のあとは見当たらないな』

「……破壊？」

なにやら物騒な言葉が出てきたことにレイジは驚きつつも、どういうことかと尋ねてみるとゼロはかつてこの地球でクライシス・インパクトがあった時のことを説明する。

『この宇宙はかつて崩壊寸前の状態まで追い込まれていたんだ。それを救ったのが、『ウルトラマンキング』の爺さんだ』

ゼロが言うにはこの宇宙は今のレイジと同じようにもう少しで死ぬところだったらしく、彼等ウルトラマンは身体を一体化させることで相手の傷を癒やすことができる。

その応用とも言える形でキングはこの宇宙と一体化したというのだ。

『しかし、宇宙は幾ら何でもデカ過ぎた。宇宙の崩壊は間逃れたが、キングの爺さんは宇宙全体に拡散し、呼びかけても返事がない』

「……知らなかった……。 あっ！ それじゃ、テレビで言ってたベリアルのことって？」

『全部本当だ。だが、まだ終わっていない。騒動の最中、光の国で開発された強力なアイテムが何者かに盗まれて行方不明だ。俺はそれを探しに来た』

そこでレイジは「あるもの？ それって……？」と尋ねる。

『戦況を覆し得る、究極の力。無限の可能性……。それは、『ウルトラカプセル』だ』

\*

同じ頃、さらに別の場所では……。

人気のない場所に荒井は立っており、1つの「怪獣カプセル」を取り出し、それを起動させる。

「ダークロプスゼロ」

それを装填ナックルに入れ、ライザーでスキャンさせた後、ライザーを空に向けて掲げるとそこから紫の光が放たれる。

「エンドマークを打ってこい！」

『ダークロプスゼロ！』

やがてその光は昨日ゼロに倒されたのと同じ、「ダークロプスゼロ」となって街中に出現したのだ。

＊

場所は無爪達のところへと戻り……。

ダークロプスゼロは無爪達からも近い場所に出現しており、無爪と千歌は昨日倒された筈のダークロプスゼロがまた現れたことに驚きを隠せなかった。

「あれって昨日ゼロが倒したのに!？」

「それより今は！ 少年！ 君は狙われてる！ 早く逃げろ!!」

無爪はすぐに少年に逃げるように言うのだが、少年は「イヤだ！」と言って言うことを聞かなかった。

「この力でみんなを守るんだ!!」

そう言いながら少年はダークロプスゼロに向かって走って行ってしまふ。

「あっ！ ちょっと!? もう！ 子供って面倒だね!？」

「千歌ねえ、ブーメランって知ってる？ 取りあえず千歌ねえはあの子をお願い

！ その間に僕は!!」

無爪の言葉に千歌は頷いて少年を追いかけ、無爪はジードライザーを取り出す。

「ジーツとしても、ドーにもならねえ!!」

無爪はそう言い放つと腰のカプセルホルダーの始まりの巨人「初代ウルトラマン」のカプセルを取り出し、スイッチを押して起動させるとそこからそのウルトラマンが出現する。

「融合!!」

ウルトラマンのカプセルをナックルに装填させた後、さらにそれとは別に最凶最悪のウルトラマンと呼ばれた「ウルトラマンベリアル」のカプセルを取り出し起動させると今度はそこからベリアルが出現。

「アイ、ゴー!!」

同じくベリアルのカプセルをナックルに装填し、ジードライザーで装填したカプ



セルをスキャンする。

「ヒア、ウィー、ゴー!!」

『フュージョンライズ!』

「決めるぜ、覚悟!!」

そしてジードライザーを掲げて胸の前でスイッチを押すとウルトラマンとベリアルの姿が重なり合い、無爪は2人のウルトラマンの力を合わせた「ウルトラマンジード プリミティブ」へと変身を完了させたのだ。

「はああ!! ジイイイイイード!!!」

『ウルトラマン! ウルトラマンベリアル! ウルトラマンジード!! プリミティブ!!』

「あれは……!」

また、ジードの出現にあの少年は立ち止まって嬉しそうな表情を浮かべ、それと同時に千歌も少年に追いつく。

(……なっちゃん……)

ジードは出現と同時に跳び蹴りをダークロプスゼロへと放つのだが……。

ダークロプスゼロは両手を交差してそれを防ぎ、逆にその身体の硬さ故に逆にジードの方が弾き飛ばされてしまう。

『ウワアア!!』

空中でバク転し、どうにか着地するジード。

『今度こそ僕が勝つ!!』

ジードはそう言いながらダークロプスゼロに向かって行き、ダークロプスゼロの胸部を殴りつけるのだが「カーン!」という音が聞こえ、逆に自分の方がダメーシを受けてしまう。

『っっ!!』

「うわあ、やっぱり痛そう……」

そしてそれを見て千歌は小さくそう呟く。

『こんのお!!』

ジードはさらにダークロプスゼロを殴りつけようとするのだが、ダークロプスゼロはその手を掴み上げてジードの顔面を殴りつける。

『ウグッ!? シェアアア!!』

一度距離を取ってから勢いをつけてジードは走り出し、ドロップキックをダークロプスゼロに放つのだが……ダークロプスゼロはジードの両足を掴み取り、フルスイングして投げ飛ばす。

『シューアアヒッ!』

投げ飛ばされたジードはビルに激突し、崩れたビルの瓦礫に埋もれてしまう。

それでもどうにか立ち上がり、ダークロプスゼロに向かって行くジード。

「ウルトラマンゼロ、どこに隠れている! そちらが出ないのであれば、こうするまでだ!」

また荒井は新たな2つのカプセルを1つずつ起動させ、1つずつスキャンしてライザーを掲げる。

「お前達もエンドマークを打ってこい!」

『ダークロプスゼロ!』

『ダークロプスゼロ!』

それによってジードの周りに新たなダークロプスゼロが2体出現し、ジードは「増えた!?!」と驚きの声をあげる。

『残存していた試作機か、もしくは量産された個体と推測されます』

レムへの説明を受けて、それで昨日倒されたダーククロプスゼロが今日もまた新しく出現したのかとジードは納得したのだが……。

『って今は納得とかしてる場合じゃないか！』

3体のダーククロプスゼロは一斉にジードへと向かって行き、1体は拳をジードに叩き込み、さらにもう1体はジードに鋭い蹴りを喰らわせ、さらに最後の1体が回し蹴りをジードへと喰らわせ……ジードは身体から火花を散らして倒れ込む。

『ウグウ……!?!』

また別の場所から戦いの様子を見ていたレイジとゼロはというと……。

「ひい〜！　なんか凄いことになってる!?!　ってアレ？　ゼロさんは……その、行かないんですか……?」

少しレイジは恐る恐るゼロに尋ねるとゼロ曰く今は「様子見」だそうだ。

それを聞いてレイジはホッとした表情を浮かべる。

『古傷のせいで俺への変身時間は限られている。それに、アイツを見極めたい』  
そしてジードはというと……。

ダークロプスゼロが自身の単目から放つ破壊光線「ダークロプスメイザー」を3方向から同時に喰らい、大ダメージを受けてジードは倒れ込んでしまう。

『グウウウ……!?!?』

さらに倒れ込んだジードをダークロプスゼロの1体が首を締め上げながら持ち上げる。

「このままじゃ……ジードが負けちゃう……!!」

千歌は不安そうな顔を浮かべながらそう呟くが……。

「そんなことない!! 僕は知ってるんだ!! ウルトラマンは、必ず勝つて!!」

そんな千歌の言葉を否定するように、少年はそう叫んだのだ。

「頑張れ……頑張れ!! ウルトラマンジード!! 頑張れー!!」

少年は必死に恐らく昨日のテレビのニュースの放送で知ったであろうジードの名を呼びながら彼を応援する。

一方でレムは通信でジードに撤退を提案するのだが……。

『ぐう……!! 待って! 聞こえる……!! 僕を、呼んでる!!』

ジードはダークロプスゼロに首を締め上げられながらも視線を少年の方へと向け

る。

「頑張れええええ…三三　ウルトラマンジード!!　頑張れええええ…三三」

『名前だ……!!　僕の名前を呼んでる!!』

すると少年の胸から光が溢れ、それは少年と分離してジードのカラータイマーの中へと入ると無爪の元へと行き、『ウルトラセブンカプセル』として起動したのだ。

『ジェアアア…三三』

ジードは力を振り絞って両足を振り上げ、ダークロプスゼロの腹部を蹴りつけてどうにか相手を引き離す。

『ウルトラセブンカプセルの起動を確認しました。　無爪、カプセルの交換を』

「……よし!!　ジーツとしてても、ドーにもならねえ!!」

そして無爪はジードライザーを構え、セブンカプセルを起動させる。

『融合!』

するとカプセルの中から赤い戦士の「ウルトラセブン」が出現する。

『アイ、ゴー!』

さらに無爪は赤き獅子の戦士「ウルトラマンレオ」のカプセルを起動させるとカ

プセルからレオが現れる。

『ヒア、ウィー、ゴー!!』

『フュージョンライズ!』

『燃やすぜ、勇氣!!』

そしてジードライザーを掲げて胸の前でスイッチを押すとセブンとレオの姿が重なり合い、赤い鎧を纏ったような姿……「ウルトラマンジード ソリッドバーニング」へと変身を完了させる。

『はああ!! はあ!! ジイイーロード!!!』

『ウルトラセブン! ウルトラマンレオ! ウルトラマンジード!! ソリッドバーニング!!』

戦闘BGM「ウルトラマンジード ソリッドバーニング」

「おお! 赤くてめっちゃ強そう!!」

『これなら行けるかも!』

千歌と星雲荘にいるペガはソリッドバーニングを見て興奮した様子でそう言い、またソリッドバーニングとなったジードを見てゼロも思わずレイジの意識を交換し

てメガネを外し、驚きの声をあげた。

『あの姿は親父と師匠!? やはり、アイツがカプセルを持ってるのか!』

『シエア!!』

ダークロプスゼロの1体がジードに向かって駆け出し、右の拳を振るって殴りかかる。

それと同時にジードも駆け出して右腕を振り上げて腕部のブースターによる加速を加えたパンチを放ち、2人の拳は激突するが……ダークロプスゼロの腕はジードの放った拳によって破壊される。

『ダアアア!!!』

さらにジードは連続で拳を何発も叩き込み、ダークロプスゼロを殴り飛ばし、吹き飛ばされたダークロプスゼロは地面に倒れ込む。

『全然痛くない! 鎧を着てるみたいだ!』

すると今度は別のダークロプスゼロが胸部を開いてそこにある「デイメンションコア」を展開して放つ光線「デイメンションストーム」を放つ。

それに対してジードは胸部のプロテクターから発射する光線「ソーラーブース



ト」を発射。

『ハアアア!! ソーラーブースト!!』

2人の光線はぶつかり合うが……ダーククロプスゼロの光線はあっさりとかき消され、ジードのソーラーブーストがダーククロプスゼロに直撃し爆発して倒された。そして今度はもう1体のダーククロプスゼロが頭部にある2本のブーメラン「ダーククロプスゼロスラッガー」を両手に持ち、ジードに向かって突っ込んでいく。

『シユア!!』

それに対し、ジードは自身の頭部にあるブーメラン「ジードスラッガー」をダーククロプスゼロに投げ飛ばすがダーククロプスゼロはダーククロプスゼロスラッガーで弾き、ジードスラッガーは宙を舞う。

『タアア!!』

しかしジードは空中に飛んだジードスラッガーをジャンプして掴み、そのまますれ違いざまにダーククロプスゼロを斬りつける。

腹部に傷を受けるものの負けじとダーククロプスゼロはジードに振り返って向かって行き、ダーククロプスゼロスラッガーを振るう。

それにジードもジードスラッガーを振るってダークロプスゼロの攻撃を防ぎ、ダークロプスゼロスラッガーを弾き飛ばした後、ジードスラッガーを足に装着し、回し蹴りを放つ「ブーストスラッガーキック」をダークロプスゼロに炸裂させる。

『ブーストスラッガーキック!!』

身体を斬りつけられたダークロプスゼロは爆発、ジードはジードスラッガーを頭部に戻す。

今度は最後に残ったダークロプスゼロがジードへと襲いかかるがジードはその攻撃を全て受け流す。

そしてジードは両肩にチョップを叩き込み、身体中のブースターを使いながら素早く後方へと下がり、装甲を展開した右手にエネルギーを集中させ、炎を纏った爆熱光線を正拳突き姿勢で放つ「ストライクブースト」を放つ。

『ストライクブーストオ!!』

直撃を受けたダークロプスゼロは直撃を受け、攻撃に耐えきれず爆発するのだった。

『やったあ!! 勝ったあ!!』

「勝ったあ!! やったー!!」

星雲荘にいるペガやあの少年や千歌もジードの勝利を飛び跳ねるように喜び、少年は千歌の方へと顔を向ける。

「ヒーローはね、必ず勝つんだよ!」

「……彼は、ヒーローだと思う?」

千歌は笑みを浮かべながら、少年にそう問いかけると少年は元気よく「うん!!」と頷くのだった。

「私も! そう思うよ!」

一方で戦いの光景を見ていた荒井は……。

「また新たにカプセルを起動したか……。あと……」

\*

その翌日……千歌達の教室にて。

「……アレ?」

「ほ、本日より、この学校で働くことになり、副担任となることになった……わ、渡辺……レイジです！ よろしくお願いします！」

今日この日、レイジが副担任となって千歌達の教室へとやってきたのだった。

「「ええ!？」」

そのことに千歌と曜は驚きの声をあげ、また梨子は「転勤してきたのね……」とボソッと呟くのだった。

ちなみにレイジはビクビクとした性格とは正反対に顔が怖いため、周りの生徒達は「副担任？ ヤクザじゃなくて?」「顔怖っ!」と呟かれていたりしたが。

そして休み時間、曜はレイジに詰め寄って話を一切聞いていなかった曜は副担任とは一体どういうことなのかと問い詰めていた。

「レイジお兄ちゃんどういうこと!? 私、全然聞いてないんだけど!？」

「い、いやあくごめんね? 曜ちゃん達を驚かせたくって」

レイジは照れ臭そうにしつつこのことを黙っていたのを謝罪。

「それよりもさ、折角曜ちゃんがいるこの学校で働くことになったんだから、僕も手伝わせてくれないかな? スクールアイドルって前々から少し興味もあったし

「！」

それを聞いて千歌と曜は「ホント!?」っと目を輝かせ、レイジは笑みを浮かべて「うん」と頷くのだった。

そして今日からレイジを加えて無爪、千歌、梨子、曜の5人は放課後からまた沼津でチラシ配りをする事になったのだが……。

『アイツ……』

レイジが無爪と会った際、彼の中にいるゼロが何かを感じ取ったらしく、レイジは「どうしたんですか?」と尋ねるのだが、ゼロは「いや、なんでもない」とだけ答えるのだった。

尚、千歌と無爪は何時も通りではあったが、最初恥ずかしかっていた梨子も今では普通にチラシを配れており、また曜はそのコミユ力の高さを遺憾なく発揮してチラシ配りついでに大勢と写真を撮ったりしていた。

「じゃあせーの! 全速ぜんしーん!」

『ヨソロー!!』

と全員が曜と合わせて同じポーズを取っていることから彼女の人気っぷりが伺

える。

「流石曜ちゃん、人気者〜」

「あはは……」

「やはり、コミュカお化けだ曜ねえは……」

と曜の方を千歌、梨子、無爪の3人が見て眩く。

一方でレイジはというと……。

「あ、あの……」

「はい？ ひい!?!」

道行く女子高生にチラシを渡そうとするレイジだったが、その時顔が厳ついこともあって凄んでるようにはしか見え、旗から見たら怪しい勧誘しているようにはしか見えなかった。

「あ、あの良かったらこの娘達のライブ……」

「ひ、ひい〜!?!」

そしてそのせいで女子高生は悲鳴をあげながらレイジから逃げ出すように走り去って行くのだった。

『お前、このままやると警察沙汰になりそうだな』

「うう……僕ってそんなに顔怖いですか？」

『まあ、ヤクザレベルだな』

ゼロにそう言われレイジは「トホホ……」と落ち込むのだった。

＊

その後は千歌の家で色んなことを打ち合わせることにになり、無爪、千歌、曜、梨子の4人は千歌の部屋で色々と相談していたのだが……。

「千歌ちゃん！　ここどう思う？」

ダンスの振り付けについて千歌に質問しようとした梨子だったが、千歌は疲れ果てたのか机の上に突っ伏した状態で寝てしまっており、それを見た梨子は思わず笑みを浮かべてしまう。

「最近は何々と忙しいから疲れたんだな千歌ねえ？」

無爪は千歌の肩を軽くポンッと叩くと彼は「でもベッドで寝ないと風邪引くぞ」

と言いながら彼女を抱きかかえ、そっとベッドの上に降ろして布団をかける。

「おお、なっちゃん意外と大胆な……」

「ほ、ホントにね……。でも、千歌ちゃんがこれじゃ今日はもうおしまいね？」

梨子の言葉に曜も「うん」と頷くのだが、時計を見ると既にバスに乗れる時間とはつくに過ぎており、それを聞いた無爪は「志満さんに曜ねえを車で家まで送って欲しいって頼んでくる」と言っただけの彼女の元へと行くのだった。

＊

それから曜は志満に車で家まで送って貰うことになり、そのことを車の中で親に連絡。

連絡を終えると志満は「大丈夫だった？」と曜に尋ねる。

「はい！ いい加減にしなさいって怒られちゃったけど」

「ホント、夢中よね？ 千歌ちゃんがここまでのめり込むなんて思わなかった」

そんな志満の言葉に曜は「そうですか？」と不思議そうに首を傾げる。



「ほら、あの娘ああ見えて飽きっぽいところあるでしょ？」

「飽きっぽいんじゃないやなくて中途半端が嫌いなんですよ。やる時はちゃんとやらないと気がすまないって言うか!!」

志満の言葉に曜はそう言葉を返し、志満はそれに対し「そっか……」と答えるのだった。

「流石曜ちゃん！」

「えへへ♪」

「それで、上手いききそうなの？ ライブは？」

志満のその質問に曜は不安な表情を浮かべ、彼女は自信なさげに「上手いくといいいけど……」と呟く。

「人、少ないですからねここら辺……」

「……大丈夫よ！」

「えっ？」

「みんな、暖かいから！」

そんな志満の言葉に曜は思わず笑みを浮かべるのだった。

\*

そしてライブ当日。

この日は雨が降っていたが、特に大した雨でもないので千歌達はアイドル衣装に着替え、体育館の裏側で待機しており、無爪も彼女達の様子を見る為にそこに来ていた。

「やっぱり慣れないわ、本当にこんなに短くて大丈夫なの？」

梨子は自分達の衣装のスカート丈が少し短くないかと不安になるが、それを千歌は「大丈夫だって！」と言いながらμ'sの最初のライブ時に彼女達が着ていた衣装の写真をスマホに表示させ、梨子に見せる。

(・・・μ'sの人達も千歌ねえ達も露出度高いな・・・)

尚、無爪は千歌のスマホを覗き込んでそんなことを思い、また梨子はこんなことならスクールアイドルなんてやめておけば良かったかなと少しだけ後悔した。

「でもまあ、みんな似合ってますし、可愛いと思いますし・・・その辺は自

信持って良いと思いますよ梨子さん？」

「うん、ありがとう……」

「あれ？　もしかしてなっちゃん珍しく私のことも褒めた？」

無爪の「みんな似合って可愛い」という言葉に千歌が少し嬉しそうにするが、素直じゃない無爪は「そ、そんなこと言っていない!!」と顔を赤くして否定するが……。「いや言ったよ。もう、なっちゃんってばホントにツンデレなんだから」

「でもそこがなっちゃんは可愛いとは思うけどね」

千歌と曜はニヤニヤしながら無爪の頬をツンツン弄り、「う、うるさい！」と2人の手を振り払ってすぐさま離れる。

「もう!!　兎に角、僕はもう表に出てライブ始まるの待ってるから!!」

無爪は顔を赤くしたままそう言ってその場を立ち去ろうとするのだが、途中でピタッと急に立ち止まり、千歌達は首を傾げる。

「そ、その……頑張って……」

千歌達に背中を見せたまま、エールの言葉を贈った無爪はそのまま急いでその場から今度こそ去って行き、そんな無爪に千歌は小さな声で「ありがとう……」

と呟くのだった。

「そろそろだね！ えっと、それからどうするんだっけ？」

「確かこうやって手を重ねて……」

曜の言うように千歌、梨子、曜の3人はライブに気合いを入れる為にそれぞれ手を重ね合わせるのだが……。

「繋ごうか」

「えっ？」

「こうやって互いに手を繋いで……ねっ？ 暖かくて好き……」

千歌の言うように3人はそれぞれ互いに手を繋ぎ、曜も「ホントだ」と千歌の言葉に同意して頷く。

「……雨、だね」

「みんな来てくれるかな？」

彼女達はまだ会場にどのくらいの人達が来ているのかを知らない、そのため梨子は「もし来てくれなかったら……」なんて不安を口にするが、それに千歌は「じゃあやめて終わりにする？」と尋ねる。

「……」

少しの間の沈黙が流れた後、3人はなぜか急におかしくなって笑い出す。

「フフ、さあ行こう!! 今全力で輝こう!!」

千歌の言葉に梨子と曜は頷き、3人はかけ声をあげる。

「「A q o u r s、サンシャイン!!!」」

\*

そして体育館の幕が上がり、目を瞑って手を繋ぎ合った3人が目を開けるとそこには確かに観客が来ていた。

しかし、そこにいたのは無爪や鞠莉や花丸、ルビィにレイジ、変装した善子、体育館の入り口辺りにいるダイヤや外で傘を差して様子を見ていた果南に他数人の生徒だけで……体育館を満員にするには程遠い人数だった。

「千歌ねえ……あんなに頑張ったのに……たったこれだけ」

『でも、μ'sファーストライブよりは多いんだけどね』

「でもそんなのなんの気休めにもならないな……」

無爪と、無爪の影の中にいるペガがそんな会話をしている中、この光景に千歌、梨子、曜は人があまり来なかったことに悲しそうな表情を浮かべるが……。

すぐに3人は気が引き締まった表情を浮かべ、千歌が前に出て叫ぶ。

「私達は!! スクールアイドル!! せえーの!!」

「「Aqoursです!!」」

千歌に合わせ、梨子と曜の3人が自分達のグループ名の名乗りをあげる。

「私達はその輝きと!!」

「諦めない気持ちと!!」

「信じる力に憧れ、スクールアイドルを始めました! 目標は……スクールアイドル、μ'sです!! 聞いてください!!」

千歌はそう大きな声で宣伝し、そして始まる千歌達スクールアイドル、Aqoursのファーストライブ……曲は「ダイスキだったらダイジョウブ!」

しかし、曲がサビに入ろうとしたその時だった。

外の電線に雷が落ちて切れてしまい、ステージのライトの光が消えてしまったのだ。

「えっ!? なに!? 一体なにが……!」

『恐らく、雷かなんかで電線が切れたんだろうよ。 しっかりし、このままじゃ……』

レイジが停電に驚いている中、ゼロがそうレイジに説明し、ゼロは「発電機とかないのかよ?」と尋ねるとレイジは少しだけ考え込んだ後、「あるかどうか探してみます!!」と答えて外へと飛び出し、発電機を探しに行く。

その途中、ダイヤが体育館の近くにあった外の倉庫に向かって走って行くのが目に止まり、レイジは首を傾げる。

「あれって、生徒会長の黒澤さん?」

『もしかして……おいレイジ! あいつを追いかけろ!! 多分、あの娘も考えてることは同じかもしれないぜ?』

「わ、分かりました!」

ゼロに言われるままレイジはダイヤを追いかけて行き、一方停電によってダンスが中断になってしまった千歌達はどうすればいいのか分からず困惑してしまう。

「どうすれば……!!」

「一体、どうしたら……!!」

それでも、ここで諦めたくない千歌は「歌」の続きを不安な顔を浮かべながらも口ずさみ、それに曜も続いて歌を口ずさみ、それに梨子も続いて歌を歌う。

だが、やがて千歌は自身が口ずさんでいる歌詞の内容とは裏腹に、どんどん元気を無くしていき、彼女は顔を俯かせ、泣きそうな顔を見せる。

それを見た無爪は唇を噛み締める。

(千歌ねえの泣き顔なんて……見たくない!! だから……!!)  
千歌の泣き顔を見たくない、だからこそ、無爪は叫んだ。

「ジーツとしてても、ドーにもならないだろうが千歌ねえ!! だから!! 頑張れええええええええええ!!!」

「っ!？」

大きな声で精一杯の声援を無爪が送り、その声に反応して千歌が顔をあげると次の瞬間、止まっていた電気の光が再びついたのだ。

「へっ?」



「バカチカー!!」

それと同時に体育館の扉が開き、千歌の姉の美渡や、他にも町中の人達が体育館にやってきたのだ。

「アンタ開始時間間違えたでしょー!!?」

「えっ?」

美渡の言葉を聞いた無爪が慌ててライブのチラシを取り出して見ると確かに彼女の言う通りライブの開始時間が間違っており、無爪は頭を抱え、同時にちよつとした怒りも覚えた。

「こんの……! バカ千歌ねえー……!」  
ちやっただろうがー……!」

その無爪の文句に千歌も思わず「ご、ごめん!」と苦笑いしながら謝り、そして町の人達によって満員になった体育館を見て千歌達は元気を取り戻す。

「ホントだ私、バカ千歌だ……」

また、体育館の近くにあった倉庫……。

そこではレイジとダイヤが協力して発電機を使い、体育館の電気を復活させてお

り、レイジは「会長さんありがとう」と笑みを浮かべてお礼を述べるのだが……。「別に、このまま終わられるのも気持ちが悪いですわ！」とそっぽを向くダイヤだったが、それを見てレイジもゼロも「素直じゃないな」と思うのだった。

そして場所は体育館へと戻り……。

元気を取り戻した千歌はキツとした顔となり、ライブを再開させる。

やがてライブは今度は何事もなく無事に終了し、観客達は彼女達に拍手喝采。

千歌達も達成感に満ちた表情を浮かべており、それを見て無爪もライブが成功して内心ほっとするのだった。

「その、ありがとう。美渡姉さん」

「んっ？ なにがなっちゃん？」

無爪は自分の隣に立つ美渡にお礼を突然言うのだが、美渡はなんのことか分からず首を傾げる。

「結局千歌ねえのお願い聞いてくれたんだよね？ この前こっそり幾つかの宣伝用のチラシ千歌ねえの部屋から持って行くの見たよ？」

「あはは・・・・。バレてた？先輩にチラシ貼りすぎだって怒られたけどね」

そして舞台に立つ千歌達は互いが互いに頷き合う。

「彼女達は言いました!!」

「スクールアイドルはこれからも広がって行く!! どこまでだって行ける!! どんな夢だって叶えられると!!」

曜と梨子の2人がそれぞれ言葉を言い放ち、2人に続いて千歌が続きを言おうとするのだが・・・・。

「これは今までのスクールアイドルの努力と街の人達の善意があつての成功ですわ!! 勘違いしないように!!」

そこへダイヤが前に出てきて厳しめな口調で千歌達に言うのだが、それに対し千歌は「分かっています!!」と言葉を返し、それにダイヤは少し驚く様子を見せる。「でも、でもただ見てるだけじゃ始まらないって!! 上手く言えないけど・・・・。今しかない、瞬間だから!!」

そして千歌は左右に立つ梨子と曜と手をつなぎ合わせる。

「だから!!」

「「輝きたい!!!」」

千歌、梨子、曜の3人が言い放つとそれに大きな拍手を送る観客達。

それを見て千歌は満面の笑顔を浮かべるのだった。

## 第4話 『A I B』

サンシャイン映画公開記念。

A q o u r s のファーストライブは無事、体育館を満員にしたことで成功。

その為、鞠莉からは約束通り彼女等スクールアイドル部の設立の許可を貰い、今は彼女が色々と手続きしているとところだそう。数日後には部室も与えられて本格的に部活動を行うことができるだろうとのこと。

そして現在、千歌、梨子、曜、無爪の4人は初ライブの成功のお祝いということで千歌の部屋でお菓子などを食べてプチパーティーをしているところだった。

「いやあ、ライブが成功して本当によかったよー！」

千歌はライブ成功に感動して泣きながらポテチを食べており、そんな彼女に無爪は「感動するか泣くか食べるかどれか1つにしろ!!」とツッコミ、そんな光景に曜と梨子は苦笑い。

「でも、ホントに成功して良かったわ。停電が起きた時は一時期どうなるか分からなかったもの」

梨子の言う通り、ライブの最中に停電が起きた時は本当に焦ったものだと彼女の言葉に千歌、無爪、曜は「うんうん」と同意するように頷くのだが……. . . . .そこで1つ疑問に思うのが「でも、なんでまた電気がついたんだろう?」ということ。曜は普通に電気が復旧したんじゃないか、落ちたブレーカーが誰か戻してくれたのではないかと予想するが……. . . . .

「今それ考えてもしようがないんじゃない? 原因も僕達はよく知らない訳だし」  
「まあ、それもそうだね。取りあえず今はパーティーとソーロー!! と行きま  
すか!」

そう言いながら曜と無爪は自分の手に持ったコップのジュースを飲み始め、その時、無爪は千歌が自分に視線を向けていることに気づき、彼は「なに?」と彼女に尋ねる。

「へっ!? あっ、いや……. . . . .その、なっちゃんにお礼を言わないとな〜っと思ってる」

それを聞き、無爪は彼女の言う「お礼」とは恐らくチラシ配りなどを手伝ったりした時のことなのだろうと考えるのだが……千歌が言うには「それもあるけど」とのことです。それ以外にも何か無爪にお礼を言いたいことがあるのだという。

「停電が起こった時、なっちゃん私達に『ジューツ』としてでもドーにもならないだろうが』って励ましてくれたでしょ？ なっちゃんが、あの時言葉をかけてくれたおかげで……私達は……私はきつと、最後まで諦めなかったんだと思う。私が言いたいのは、そのお礼。だから、ありがとうなっちゃん！」

満面の笑顔でお礼を述べる千歌、それに対して無爪は顔を赤くしつつ「べ、別に……」と照れ隠しをするかのようにお菓子をパクパク素早く食べ始める。「それに、僕があの時千歌ねえに声をかけなくっても、お客さんはいっぱい来てたんだ。チラシ配りこそ手伝ったけど、あのライブでは僕は何もできてなんか……」  
無爪がそこまで言いかけた時だった。

「そんなことないもん!!」

無爪の言葉を遮るように千歌が声を上げ、彼女は無爪の頭を優しく撫でる。

「あの時、なっちゃんが励ましてくれてなかったら……私は完全にそこで

1度は諦めてた。諦めかけてたけど、完全に諦める前になっちゃんが声をかけてくれたから……最後まで諦めずにいられたんだよ?」

「そうだよなっちゃん!! あれでなっちゃんは諦めてないって私達は思えて……だからこそ私達も諦めたらダメだって思えて頑張れたんだよ。流石は私の弟だね

!!」

曜はそう言いながら後ろから無爪に抱きつき、それを見て千歌はムスっとした表情を浮かべる。

「曜ちゃん!! なっちゃんは私の弟だよ!! 私の家に住んでるんだから!!」  
「そんなの関係ないもんね!!」

すると今度は千歌が前方から無爪に抱きつき、前から千歌、後ろから曜に抱きつかれた無爪は顔をみると真っ赤にして目を回し、恥ずかしいやら嬉しいやら色々な感情が渦巻き、半パニック状態に陥ってしまう。

(ちよっ、ちよっ……2人とも胸が……!! って曜ねえは意外でもないが千歌ねえやっぱり意外と胸大きいな……って違う!! こういふ時は奇数を数え……あれ? 奇数だっけ、偶数だっけ!?)



「ちよっ、2人とも無爪くんがオーバーヒートしかけてるから!?!」

梨子が立ち上がって慌てて無爪から千歌と曜を引き離そうとするが……その時、彼女は足をテールブルにぶつけてしまい、バランスを崩し、彼女は無爪達の方へと倒れそうになる。

「ひゃああ!?!」

「あ、危ない!!」

咄嗟に無爪が両手を突き出して梨子を支えようとするのだが……その際、無爪の両手に「ムニツ」という感触が伝わり、彼女を支えようとした両手は……丁度、梨子の胸の位置に……。

「あっ……あの……えっと」

「ひっ……いやああああ!?!」

梨子は耳まで顔を真っ赤にして涙目になってすぐさま大量の冷や汗を流す無爪から離れ、そのまま彼女は走るようにして千歌の部屋から出て行くのだった。

それにしばらくの間嘔然となり、千歌も曜も無爪も黙り込んだままだったのだが……そこで無爪の影からひよっこりペガが現れる。

『ちよつと!! なにポーッとしてるの無爪!! 梨子ちゃんに早く謝りに行きなよ!!』

ペガにそう言われて無爪はハツとなり、「そ、そうだね!! 僕梨子さんに謝りに行ってくる!!」と急いで彼女を追いかけることになり、千歌も「私も行く!!」と言って無爪と一緒に部屋を出て行くのだった。

『それにしても、ずっと影から見ただけど、無爪さっきからハーレムものの主人公みたいだね』

「まあ、実際女の子3人に囲まれてたらねえ? ペガくんは影の中にいる訳だし」その後、無爪は梨子に土下座して謝ったこととワザとやった訳では無く、助けようとしてやった事故ということもあり、彼女に許して貰えたのだった。

ちなみにこの作品は主人公のハーレムなどになったりしないのであしからず。

『そう言えば、今日は美渡さんがいなかったけど、仕事かな?』

「そだよー、ニコニコ生命保険……だっけ? それのね?」

\*

その頃、その美渡はというと……。

彼女はとある男性と一緒にある古びた建物の立つ場所へと訪れており、男性と美渡は互いに視線を合わせて頷く。

「それじゃ作戦通りに」

「しくじらないでよ？」

「お前こそな!!」

男性はそう言って物陰に隠れ、それを確認すると美渡はコンコンと建物のドアを叩く。

するとすぐに1人の中年の男性が「どなた？」と尋ねながら扉を開けて現れ、美渡は「ニコニコ生命保険のものです!!」と営業スマイルで言うのだが、男性は

「セールスカ……」と呆れたような顔を浮かべて扉を閉めようとする。

「あっ!! ちょっと待って!!」

しかし、そうはさせまいと美渡は扉に足を引っかけ、無理矢理部屋の中を覗くとそこにはいかにも怪しげな植木に入った花のような植物が置かれており、彼女は「今です!!」と声をあげると待機していた先ほどの男性が駆けつけて扉を無理矢理こじ開け、中年男性の腹部に蹴りを叩き込む。

「ぐあっ!?!」

「なんだお前等!?!」

部屋にはもう1人、中年の男性がおり、美渡と一緒にいた男性は植物を見て「やはりな」と口元をニヤつかせる。

「ええい!! 退けえ!!」

すると2人の中年男性は正体を現し、「集団宇宙人 フック星人」「冷凍怪人 ブラック星人」としての姿に変身し、彼等は美渡と男性を押し退かして逃げようとするのだが……それに對して男性も両手がハサミで緑の1つ目の「脳魂 宇宙人 ザム星人 ザルド」としての姿に変身。

ザルドはジャンプしてフック星人とブラック星人の頭上を飛び越えて道を塞ぐ。そこに丁度、1台の車が現れ、中からまた別の……レイジほどではないが強面の男性……人間に擬態した「宇宙ゲリラ シャドー星人ゼナ」が現れ、ザルドと共に殴りかかって来たフックとブラックに応戦する。

ザルドはフック星人の放つ拳を受け流しつつ右手のハサミでフック星人の腹部を挟み込み、持ち上げて地面に叩きつける。

「ぐらあ!？」

それでもなんとか必死に逃げようとするフックだったが、逃がすまいと後ろから美渡は跳び蹴りを喰らわせ、倒れ込んだところにすかさずサソリ固めを決める。

「おりゃああ!! 大人しくしろ!!」

『くおおお!!』

しかし、どうにか美渡を振り払って逃げようとするフック。

だがそうはさせまいとザルドは胸から放つ「ザムビーム」を発射し、それが命中したフックは身体が痺れてその場に倒れ込み、ザルドに取り押さえられるのだった。またゼナはブラックの放って来た拳を受け流しつつカウンターで自分の拳をブ

ラックの顔面に叩き込み、それによってブラックは僅かに怯むもののすぐさま再びゼナに殴りかかる。

だがそれをしゃがみ込んで避けつつゼナは拳をブラックの腹部に叩き込み、膝を突いたところをゼナはブラックの後ろに回り込んで腕を押さえつけ、確保することに成功するのだった。

「うぐお!!!」

『我々はA I Bだ!! 観念しろ!! 高海 美渡、油断するなと言った筈だ。危うく容疑者を取り逃がすところだったぞ。それとザルド、戦闘になると本来の姿に戻る癖を直せと言った筈だ』

「A I B」とは犯罪行為を行っている異星人の取り締まりを主な任務としている様々な星の宇宙人達で結成された組織である。

そしてゼナの言葉に対し、美渡とザルドは「す、すみません先輩!!」と謝罪し、ゼナはブラックとフックを車に放り込んだ後、ザルドと美渡に中を確認するように指示。

ちなみに、ゼナは全く口を動かさずに言葉を発しているのだが、これは彼が地球

人の姿になって口を動かすのが苦手な為であり、自分の言葉を伝える時はテレパシーを使っているのである。

そしてゼナの命令を受け、人間態に戻ったザルドと美渡は「アスタナージ・ガン」と呼ばれる銃を構えながら建物内に侵入。

一通り見たところ、他に仲間の影もなく、美渡は先ほど見た植物が間違いなく自分達が予想していたものと同じものであることを確認し、インカムでゼナに美渡はそのことを報告。

「ありました！ 『宇宙植物ルグス』!! 条例により栽培が禁止されている植物です!! これって強力な睡眠花粉を出してそれを吸っちゃうと眠くなるんですよ?」

「全く、アイツ等変なもん持ち込みやがって」

「ホントに余計な仕事増やしてくれちゃって。確かこの黄色いところを触ると花粉が噴射されるんだよね?」

そう言いながら美渡はつついっというっかりとルグスの黄色い場所を触ってしまい、ザルドは「あっ!! このバカ!!」と叫ぶが時既に遅く、ルグスから黄色い花粉が

噴出され、それを吸い込んだ2人は強烈な眠気に襲われ、倒れ込んで眠ってしまった。  
うのだった。

千歌の姉だけあって、美渡も案外こういううっかりなところがあるのかもしれない。  
い・・・・・。

\*

その後、ゼナにザルドと美渡は叩き起こされ、一同はフックとブラックを一件なんの変哲もない建物だが・・・・・中身は異空間となっており、近未来的な光景が広がったA I B本部に連行。



『全くお前等は……』

「は、は、はい、すいません!!」

「いや、ルグスを触ったのは美渡さんで俺は関係ないっすよ!」

『しっかりと見張っていなかったお前も悪い』

ゼナにそう叱られて不満そうな顔をしつつもザルドは「うっ、すいません」と謝罪。

『ルグスをちゃんと保管庫にしまっておけよ』

「りよ、了解!!」

ゼナは美渡とザルドにルグスを後で保管庫に仕舞っておけと指示した後、3人はフックとブラックを本部の中央部に連れて行く。

その後、ザルドと美渡はフックとブラックの2人がある場所に立たせ、ゼナは顔を地球人に変える為のインカム型の装置を取り外すと本来のデスマスク風の顔をしたシャドー星人の姿へと戻る。

「おおっ!」

それを見て美渡とザルドは驚きの声をあげるが、それに対しゼナは呆れたような

声を出す。

『いい加減に慣れる。　　とうか、なぜザルドまで驚く?』

「こう言っちゃなんですけど・・・ゼナ先輩の本来の姿の顔ってちょっと怖くて・・・」

『1つ目のお前に言われたくはないな』

それからゼナは何かの装置を起動させる準備に取りかかり、それを見て美渡はブラックとフックの罪状を彼等に告げる。

「あなた達は違法な宇宙植物を栽培していました。　よって地球からの強制退去を命じます!!」

そう命じられたフックとブラックは「えっ!?　ちょっと待っ・・・!!」  
と言いかけたが、勿論そんな言葉は無視され、ゼナは装置を起動させ、ブラックとフックは地球以外のどこかへと強制転移させられたのだった。

『達者で暮らせ』

「ふう、今日はもう仕事は終わりですかね?」

『いや、まだだ』

ザルドの言葉をゼナは否定し、ゼナは宇宙全域からベリアルに酷似していることからウルトラマンジードに関する問い合わせが殺到しており、その対処に当たらなければならぬのだという。

『ウルトラマンゼロも動いた。宇宙警備隊も感心を寄せているのだろう。ここは、ウルトラマンキングと融合した宇宙だからな』

\*

その頃、千歌と無爪はとあるスーパ―へと訪れていた。

ちなみにペガは空気を呼んで留守番である。

「なんでスーパ―？ お使いとか、頼まれてないよね？ しかもなんで私も連れて来たの？」

「梨子さんへのお詫びに、果物でも持って行こうかと思って。千歌ねえ連れて来たのは同じ女の子としてどんなのが良いかアドバイスして欲しいから」

それを聞いて千歌は「へっ？」と首を傾げる。

なぜなら無爪はあの後、ちゃんと梨子に謝罪し、彼女もそれを受け入れて無爪を許してくれたのだから別にもうお詫びの品などいらぬのではないかと千歌は思ったからである。

だが、千歌はそれを無爪の尋ねると無爪曰く「それだけじゃ僕の気が収まらない!!」とのこと。

「それに女の子の胸を触るとか事故とはいえ普通の重罪だよ重罪!! お小遣いも貯金も全部使ってお詫びしなきゃ!!」

「いやいや!! そこまでされると梨子ちゃん逆に困ると思うよ!?!」

そんな無爪に、千歌は苦笑しながら「そこまで気負うことないと思うけど……」と呟くのだった。

＊

その頃、ゼナ達はというと……。

ゼナは「乙車」という車をとある喫茶店の前に停めており、そこへ丁度ドーナツとコーヒーを買ってきたザルドと美渡が戻って来た。

だが、その時2人は揃って「あっ！」と何かを思い出したかのように声をあげ、2人は急いで車の荷台を開けるとそこにはゼナに「保管庫に移しておけ」と言われたルグスが置きっ放しになっていたのだった。

それを見て2人は顔を見合わせて「ヤバイ……。」と呟く。

「あ、アンタちゃんと仕舞っておけて先輩に言われたでしょ!？」

「お前も言われただろうが!! と、兎に角先輩に正直に言っただけさ」

「そだね!!」

兎に角、今はゼナに謝罪するのが先決だと思い、「あ、あのおく」と2人は恐る

恐る声をかけようとするのだが……その直後にZ車に通信が入る。

『Z車、応答願います』

『こちらZ車、どうした？』

『ピット星人の科学者がスピード違反を起こして事故が発生、逃亡中です。直ちに捕獲してください』

ゼナはその指示を受けて「了解」と返事し、場所を聞いた後、何かを言いかけているザルドと美渡に「行くぞ、乗れ」と命令し、2人は「は、はい!!」と慌てて返事をしてドーナツとコーヒを持って車に乗り込むのだった。

『名前は『トリィィティプ』、顔は分からないが、目撃者が服装を覚えていた。我々の存在を地球人に悟られるな。文明に影響が出ることをよしとしない』

「はら!!」

\*

その後、無爪は千歌の説得もあって果物の詰め合わせのセットをお詫びの品としてスーパーで購入。

2人は自転車に乗って家に帰ろうとするのだが……。

突然現れた青い服を着た女性が現れ、女性は無爪を押し退かして彼の自転車に乗り、それを見た無爪は「なにしてんだ!!」と怒って女性の手を掴む。

「あっつ……!!」

しかし、その女性の手は熱く、無爪は思わず手を引っ込めてしまい、女性は無爪の自転車を奪ってそのままどこかへ去って行こうとする。

「僕の自転車!!」

無爪は即座に脅威的なジャンプ力で女性の頭上を飛び越えて立ち塞がるのだが……女性の胸の中央が光ると彼女の右手から光の剣が現れ、彼女はそれを振るい、無爪は慌てて攻撃を回避する。

その間に女性は素早くその場から逃走し、すぐに千歌が無爪の元に駆け寄る。

「どうしよう、なっちゃん自転車が……! っつか何あの剣!? あっ

！ 私の使って追いかける!？」

「うん、お願い……」

しようとしたその時、「あれ？ なっちゃん？ 千歌？」と2人の名前を呼ぶ声が聞こえ、声のした方を見るとそこには乙車から顔を除かせている美渡の姿があり、千歌と無爪の2人は彼女を見て「美渡ねえ!？」と驚きの声をあげる。

「あっ、丁度良いや!! 美渡ねえ車乗せて!! そっちの方が早い!! 自転車!! 僕の自転車盗まれたの!!」

無爪の指差す方を美渡が見ると自転車に乗った女性が逃走しており、その女性の格好は本部から聞いていたピット星人の服装と完全に一致しており、美渡はすぐに無爪の自転車を盗んだのが自分達が追いかけている人物と同じだと理解。

「分かったわ!! 2人とも乗って!!」

美渡は無爪と千歌を乗せ、一同は急いであるの女性……ピット星人のトリイを追いかけるのだった。



\*

その後、無爪と千歌は乙車に乗せて貰い、全員でトリィを追いかける。

「っていうか美渡ねえ達は どうしてあの人追いかけてるの？」

「あつ、えつと〜・・・あの人事故を起こして逃げてるの。私達ほら、保険のセールスしてるでしょ？ 事故と保険はあのと、あれな訳で!! 事情を今すぐ・・・あれしないといけないの」

千歌の疑問に歯切れ悪くもなんとかA I Bのことは伏せて説明する美渡。

そんな彼女を見てザルドは「説明雑だな」とケラケラ笑っていた。

「じゃあアンタが上手く説明してみなさいよ!!」

「はあ!? なんで俺が!? お前の身内だろ!!」

また無爪はこっそりとゼナ達に気づかれないうちに装填ホルダーに手を当てて星雲荘にいるレムに小声で連絡を取る。

「レム、聞こえる？」

『はい、聞こえています』

＊

その頃、とある喫茶店にて……。

「先生、お疲れですか？」

そこでは荒井が担当者と小説の打ち合せをしている最中であり、担当者の男性は荒井の様子から少し疲れているのかと思ったが、本人は首を横に振ってそれを否定した。

「いいえ、報告をしていたんです。現状を」

「報告……？」

「宇宙のとある場所に、心の一欠片を置いていましてね？ 目を瞑ればそこにおられる神と対話ができるのです」

それを聞いて担当者は「またご冗談を！」と笑い、荒井も笑みを浮かべた後、窓

の外を眺めると荒井の目にだけ移動する光の柱のようなものが映っているのだ  
た。

\*

同じ頃、外を歩いていたレイジは500円玉を手にしながら「はぁ」と溜め息を吐いており、手に持った500円玉を見つめながら「今月これだけしかないのか」と呟くのだった。

『無駄使いしすぎたんじゃねえの?』

「あはは、かもしれませんね。でもまあ、給料日までもう少しだし……」  
するとそこへ、自転車に乗ったトリイが「退いて!!」と叫びながら目の前を通り過ぎ、それに驚いたレイジは500円玉を池の中に落とし、彼は絶叫する。

「ああ〜!!!」

その時、レイジの中にいるゼロが何か近づいて来ているのを感じし、すぐさま意識をレイジと切り替えて高くジャンプしながらその場を離れると地中から黄色い身体の怪獣、「宇宙怪獣 エレキング」が出現。

「キイイイイイ!!!」

エレキングはトリイを追いかけるように移動し、レイジはゼロに怯えた口調で「い、行くんですか？」と尋ねるがゼロは首を横に振る。

『いや、様子見だ。本調子ではないからな』

それを聞いてレイジは内心ほっとするのだが……。

『だが念のためにあの怪獣を追いかけるぞ。いざって時の為にな!!』

『ええ!?! ちょっと!!』

ゼロはレイジの言葉を無視して急いでエレキングの後を追いかけるのだった。

\*

そしてトリイは人気のない山場まで行くと自転車を降りてそこに置いてあった車になんとか乗り込もうとしており、そこに丁度ゼナ達が乗った乙車も駆けつける。

「いたぁー!!」

「後は私達に任せて2人はここにいなさい」

美渡にそう言われる無爪と千歌。

それに対し無爪は「えっ、でも美渡ねえ、あの危険かも……」と言うのだが、美渡は「大丈夫！」と答える。

「だって私、保険のセールスだから!!」

そう言いながらゼナ、美渡、ザルドの3人は車から降りてトリイを追いかけ、それを見て千歌は「保険のセールスって大変なんだね」と呟くのだった。

「えっ、いや……これホントに保険のセールスなのかな……?」

その時丁度、レムからの通信が入り、レムは無爪と千歌に怪獣が出現したことを知らせる。

「怪獣!？」

『はい、宇宙怪獣 エレキング。ピット星人が惑星侵略の際に用いられることで知られています。恐らく、無爪達が遭遇した女性もピット星人と思われれます』

さらにエレキングがこちらに向かって来ていることをレムは知らせ、それに無爪は「分かった!!」と頷くと急いで千歌と無爪は車から降りる。

「レムの言葉からすると、その怪獣はあの女の人が操ってるってことなのかな？」  
「いや、どうにも違うみたい。レムが言うには、むしろ、怪獣はあの人のリトルスターを狙ってるっぽいんだ。兎に角、このままじゃ美渡ねえ達も危ない!!」

僕があいつを足止めする!!」

既に肉眼でハッキリと確認できるほど、エレキングがこちらに近づいて来ており、千歌は無爪の言葉に頷く。

「なっちゃん、頑張ってる!!」

笑顔を浮かべ、無爪にエールを送る千歌に、無爪も笑みを浮かべて「うん!!」と頷き、ジードライザーを取り出す。

「ジーツとしても、ドーにもならねえ!!」

無爪はそう言い放つと腰のカプセルホルダーから「初代ウルトラマン」のカプセ

ルを取り出し、スイッチを押して起動させるとそこからそのウルトラマンが出現。

「融合!!」

ウルトラマンのカプセルをナックルに装填させた後、さらにそれとは別に「ウルトラマンベリアル」のカプセルを取り出し起動させると今度はそこからベリアルが出現。

「アイ、ゴー!!」

同じくベリアルのカプセルをナックルに装填し、ジードライザーで装填したカプセルをスキャンする。

「ヒア、ウィー、ゴー!!」

『フュージョンライズ!』

「決めるぜ、覚悟!!」

そしてジードライザーを掲げて胸の前でスイッチを押すとウルトラマンとベリアルの姿が重なり合い、無爪は2人のウルトラマンの力を合わせた「ウルトラマンジード プリミティブ」へと変身を完了させたのだ。

「はああ!! はあ!! ジイイーロード!!!」

『ウルトラマン！　ウルトラマンベリアル！　ウルトラマンジード！！　プリミティブ！！』

戦闘BGM「ウルトラマンジードプリミティブ」

ジードはエレキングの前に立ち塞がり、これ以上は進行させまいと駆け出し、いき、エレキングに膝蹴りを叩きこむ。

「キュイイイイ」

エレキングも反撃しようと尻尾をジードに向かって振る、ジードは尻尾を掴んで受け止める。

だが、エレキングは自分の尻尾から強烈な静電気を発生させ、「バチィ！！」という大きな音が鳴るとジードは苦痛の声をあげて思わず両手を離す。

『いったあゝ！！　今のまるで静電気だ』

「キュイイイイ」

すかさずエレキングはジードに向かって突進し、ジードはジャンプしてそれを回避し、振り返りざまに前腕の鱗状の部位から放つ波状光線「レッキングリッパー」をエレキングに向かって発射。



『レッキングリッパー!!』

しかし、エレキングもすかさず振り返って口から三日月状の電撃光線を放ち、互いに光線はぶつかり合って相殺。

『シユア!!』

その爆発にエレキングは少しだけ驚き、その隙を突いてジードはエレキングに向かって駆け出し、勢いよく拳を突き出してエレキングの顔面を殴りつける。

『デヤアアア!!!』

『キイイイ!!!』

一方、トリイを追いかけていたゼナ達は見事彼女の両腕を掴んで捕まえることに成功。

「あっ、ゼナ先輩アレ!! ウルトラマンジードです!!」

そこで美渡はジードがエレキングと戦っていることに気づき、またトリイはそれを見て「エレキング!!」と怪獣の名を呼び、ザルドは「お前が呼んだのか?」とトリイに尋ねる。

「確かにエレキングは私達が育てた個体よ。でも眠りにつかせておいたの!

私が仲間を裏切って……地球侵略を中止に追い込んだ時に……」

「なに？」

「裏切ったって……どうということ？」

トリイは視線を美渡に向けながら、彼女は自分が仲間を裏切った理由を語る。

「この星の文明が気に入ったから。 だけどあの子が目覚めるのを感じた。 あの子、私を狙ってる。 だから周辺に被害が出ないよう人が少ない場所を目指してたの」

「そういうことか……」

ザルドはトリイがずっと逃げていた理由を知って「成程」と頷き、また美渡はそんなトリイに笑みを浮かべて彼女を優しく抱きしめる。

「ありがとう。 あなたはみんなを守ろうとしてくれたんだね」

「……っ」

そしてジードはエレキングの顔のアンテナ部分から放つ電撃をバク転して避け、高く跳び上がってからの跳び蹴りをエレキングの胸部に叩きこむ。

「キュイイイイ……」

『シエア!!』

さらにそこからジードはエレキングに掴みかかるのだが、エレキングはジードを両腕を振るって振り払い、さらに尻尾を振るってジードの身体を叩きつけて吹き飛ばす。

『グウウウ!!!?』

「キイイイイイ!!!」

エレキングは電撃を纏わせた尻尾を伸ばしてジードの身体を拘束し、ジードに強烈な電撃を流し込むとジードは身体中から火花を散らして大きく吹き飛ばされ、岩山に激突し倒れ込んでしまう。

『グアツ・・・!!?』

ジードを吹き飛ばしたエレキングは視線をトリィ達がいる方へと移し、エレキングは彼女達のいる方向へと歩き始める。

それを見てジードはエレキングを止める為になんとか立ち上がろうとするのだが・・・先ほどのエレキングの攻撃のせいで身体の全身が痺れて動けずいたのだ。

『身体が、痺れて動かない……!!』

『高圧電流の影響です。立ち直るまで、数十秒かかります』

レムがジードの身体が動かない理由を説明し、それを聞いたジードは「そんなに待ってられるか!!」となんとか身体を起こそうとするが、身体は言うことを聞かなかった。

そうこうしている間に、エレキングはトリィ達に迫っていたのだが……その時……。

『シェア!!』

突如、空中から「ウルトラマンゼロ」が右足に炎を纏わせた「ウルトラゼロキック」をエレキングに喰らわせながら現れ、攻撃を受けたエレキングは大きく蹴り飛ばされる。

「キイイイイ!!!」

『ウルトラマンゼロ……!!』

『追いかけてきて正解だったな。ここは俺に任せな!!』

ゼロはファイティングポーズを取りながらエレキングに向かって駆け出し、エレ

キングは三日月状の電撃をゼロに向かって放つが……ゼロはそれら全てを弾きながら一気にエレキングに接近。

ゼロはエレキングの頭を掴んで背負い投げを繰り返す。

『デヤア!!』

「キュイイイ!!?」

\*

同じ頃、荒井は戦闘が行われている近くの場所で静かにゼロとエレキングの戦いを見つめていた。

戦いはゼロが圧倒的に優勢、しかし荒井はそれを快く思わなかった。

「……困りますね。リトルスターがジードに譲渡される前にエレキングを倒されては」

荒井はそう呟くとライザーを取り出し、2つの怪獣カプセルを起動させる。

「ベムラー」

1つは「宇宙怪獣 ベムラー」のカプセルでそれを装填ナツクルに装填。

「アーストロン」

次に起動したのは「凶暴怪獣 アーストロン」のカプセル。

それも起動し、ナツクルにカプセルを装填。

そしてライザーでナツクルをスキャンし、ライザーのトリガーを引く。

「これでエンドマークだ!!」

『フュージョンライズ!!』

すると荒井の姿が「ウルトラマンベリアル」の姿へと変わり、ベリアルの前にベムラーとアーストロンが現れ、2体は粒子のようになってベリアルの口の中へと吸い込まれるとベムラーとアーストロンが融合した「ベリアル融合獣 バーニング・ベムストラ」へと変身を完了させる。

『ベムラー! アーストロン! ウルトラマンベリアル! バーニング・ベムストラ!!』

\*

場面は戻り、エレキングの振るう尻尾を回し蹴りで弾き飛ばし、左腕を伸ばして「エメリウムスラッシュ」を発射する態勢になるゼロ。

そこへ一閃の光線がゼロの背中に直撃し、ゼロは苦痛の声をあげてその場に膝を突きながら後ろを振り返る。

『なんだアイツは……!!? 新手か!?!』

そこには光線を吐いた後のベムストラの姿があり、ベムストラは両腕を広げてゼロに向かって突進。

鋭いパンチを立ち上がったゼロへと繰り出し、ゼロは両腕を交差してガード。

しかし、そこに今度はエレキングの放った三日月状の電撃光線が迫り、ゼロは手でそれを弾く。

すかさずゼロは次にベムストラが自分に攻撃を仕掛けて来ると読んで振り返りざまに拳から「ビームゼロスパイク」という光弾を放つのだが、ベムストラは青い球体になって攻撃を回避。

球体となったベムストラはゼロの周りを高速で飛び回り、ランダムに移動しながら球体状態から光線を発射。

『グウウウ… ウロチョロしやがって!!』

ゼロは頭部にある2本のブーメラン、「ゼロスラッガー」を球体状態のベムストラに投げつけるのだが、ベムストラはそれらを軽く回避。

『エメリウムスラッシュ!!』

だが、ゼロは額のビームランプから放つ「エメリウムスラッシュ」を先ほど投げたゼロスラッガーに向けて放ち、スラッガーに当たると光線は反射。

さらに反射された光線はもう1つのスラッガーに当たってまた反射し、光線が球体のベムストラに直撃。

落下する球体をゼロは回し蹴りで蹴り飛ばし、スラッガーを頭部に戻す。

『デアアア!!』

「グアアアア…」

地面に激突し、元の姿に戻るベムストラ。

ベムストラはすぐに立ち上がるが、ゼロに両腕を掴まれて動きを封じられてしま



う。

だが、ベムストラは頭を大きく振りかざして頭部の角でゼロを斬りつけ、自分から引き離す。

『グウウ!!』

そしてエレキングはベムストラがゼロの相手をしている間にトリイのリトルスターを狙って移動を始め、ゼロは「待て!!」とエレキングを追いかけようとするのだが、それを阻止するようにベムストラが立ち塞がる。

「グルアアアアア三三三」

ベムストラは一度吠え、口から青い光線を発射する「ペイルサイクロン」をゼロに向かって発射。

対するゼロも左腕を伸ばしてから腕をL字に組んで放つ「ワイドゼロショット」を放ち、ぶつかり合った光線は両者の間で爆発が起きる。

その直後に、ベムストラのドロップキックがゼロに炸裂し、ゼロは地面に転がるように倒れる。

『クッ!!? こいつ、中々やるな!!』

そしてエレキングが迫っているのを見てトリイは「あなた達は逃げて!! エレキングは、私の体内の光を狙っている!!」とゼナ達に逃げるように言い、胸の光……リトルスターが輝くと彼女はピット星人の姿へと戻る。

『ここは私がなんとかする!! だから……!!』

「……あの怪獣は、トリイさんを狙ってるんですね？」

美渡はあることをトリイに尋ね、それに対し、トリイは「そうよ。確実に来る」

と頷き、だから自分が囷になって美渡達を逃がそうとするのだが……。

トリイは美渡に強く肩を掴まれ、彼女はトリイに対し、首を横に振った。

「そんなことしなくても大丈夫。私に良い考えがあります」

「お前それ大体失敗する時に言う台詞だけど大丈夫か？」

「大丈夫よ!! だから、トリイさんついて来てください」

ザルドの言葉に美渡はそう叫び、そしてそれを聞いたゼナは怪訝な様子で「何をするつもりだ？」と問いかける。

「ジーツとしても、ドーにもならないってね。これ、あの男の子……」

なっちゃん、無爪って子やウチの妹の千歌がよく言ってる言葉なんだ。さあ、早

くしよう!!」

『おい!』

トリイ達は美渡に言われた通り、取りあえずは彼女について行くことに。

「千歌!!」

「あっ、美渡ねえ!」

彼女等は乙車のある場所に戻るとそこではジード達の戦いを見つめている千歌だけがその場に残っており、美渡は「なっちゃんは?」と問いかけると千歌は焦って「えっと、あの!」となんとか誤魔化そうとする。

「そ、その美渡ねえ達が行った後、急にお腹が痛いって言ってトイレを探しに……!」

「何してんのよこんな時に全く……。 兎に角!! 取りあえずは千歌も車に乗って!!」

美渡の指示によってトリイと千歌、念のためにザルド、ゼナを乗せ、ゼナは乙車でこのまま逃げるのかと思ひ、車を運転しようとするのだが美渡に「待って!!」と言われてゼナは引き止められる。

「このまま動かさないで!!」

それから美渡は車の後ろに回り込み、またこちらに向かって来ているエレキングを見てトリィは「やはり胸のリトルスターに引き寄せられてる」と呟く。

『リトルスターとはなんだ?』

『研究所仲間の話では幼年期放射の結晶で、発生条件は不明。最近なぜかこの街を中心に同時多発的に発生してる!!』

「誰かが裏で操ってるってことでしょうか?」

『・・・今はまだ、なんとも言えん』

そして美渡はエレキングが目と鼻の先というほどZ車の近くまで来ると彼女はZ車のトランクを開いてルグスを取り出し、それをバックミラーで確認したゼナは「何をしている!?!」と慌てて車から出る。

「お願い、上手く行って!!」

すると美渡はルグスの黄色い部分を掴むと緑の花粉が放たれてそれがエレキングの鼻の中に入り、エレキングは苦痛の声をあげる。

「キュイイイイ!!!?」

また、それを近くで受けたゼナは眠りにつき、美渡もまた急激な眠気に襲われるのだが……。

彼女は眠気を必死に抑え、ルグスの黄色い部分を「ブチィ!!」と千切り取ると朦朧とする意識の中……けれども確実に当てるように……。それをベムストラへと全力で力を込めて放り投げたのだ。

「届けええええええええええ!!!」

そして、美渡の投げたルグスは見事ベムストラの鼻の中に「スポッ!」と入り、ベムストラもエレキング同様に目尻に涙を溜めて苦痛に満ちた鳴き声をあげた。

「グルアアアアアア!!!」

その後、それを見届けた美渡は「よし!」っとガッツポーズをしてから、彼女は目を閉じて倒れ込んで眠ってしまうのだった。

『ありがとよねーちゃん!』

『エレキング、及び新たに出現した怪獣に異変発生』

『よし、僕もようやくなんとか動けるようになった!! 今の内だ!!』

レムからの報告を受け、痺れの解けたジードは立ち上がり、使用カプセルを交換

する。

『融合!!』

1つは既に使用している「ウルトラマンベリアル」のカプセルをもう1度起動させ……。

『アイ、ゴー!!』

それから新たに「ウルトラマンオーブ エメリウムスラッガー」のカプセルを起動させてナツクルに装填。

『ヒア、ウィー、ゴー!!』

『フュージョンライズ!!』

『飛ばすぜ!! 光刃!!』

そこからジードライザーで装填ナツクルをスキャンし、トリガーを引いてライザーを掲げる。

『はああああ、はあ!! ジィーロード!!!』

『ウルトラマンベリアル! ウルトラマンオーブ エメリウムスラッガー! ウルトランジード! トライスラッガー!!』

そしてジードはプリミティブからウルトラマンベリアル、ウルトラマンオーブ・エメリウムスラッガーの力を融合させた「ウルトラマンジード トライスラッガー」に姿を変える。

戦闘BGM「ウルトラマンゼロ アクション」

一方でゼロはルグスの影響により、フラつくベムストラに向かってストレートキックを叩きこんだ後、ベムストラの身体を持ち上げて投げ飛ばす。

『シエア!!』

「グルアアアア!!!」

それを受けてもベムストラはフラつきながらも立ち上がり、なんとか破壊光線、ペイル・サイクロンを放とうとするのだが、それよりも素早くゼロのアップカーツトが顎に炸裂し、ベムストラは殴り飛ばされる。

「グオオオオ………」

ならばとベムストラは今度は球体に変化してゼロに攻撃を仕掛けようとするのだが………。

『その技は既に見切った!!』

ゼロはゼロスラッガーを融合させて三日月状の剣にした「ゼロツインソード」を構え、刀身を緑色に輝かせ……こちらに向かって迫ってくるベムストラにすれ違いざまにツインソードを横一閃に切り裂く「プラズマスパーククラッシュ」を炸裂させる。

『プラズマスパーククラッシュ!!』

「グウ……ラアアアア!!!」

球体は真つ二つに切り裂かれて爆発するのだった。

そしてジードはというと……。

『トライスラッガーアタック!!』

ジードは頭部の3つのアイスラッガーをエレキングへと投げつけて切り裂く「トライスラッガーアタック」を繰り出し、斬りつけられたエレキングは身体から火花を散らす。

「キイイイイ!!!」

『デュア!!』

エレキングはどうか電撃光線をジードに向かって放つが、ジードは腕を振るっ



て弾き飛ばし、ジャンプして勢いよく拳をエレキングの顔面に叩き込む。

さらにそこからすかさず連続で拳を叩き込み、最後にまた拳をエレキングの顔面に喰らわせ、ジードはエレキングを殴り飛ばす。

「キュイイイ!？」

また、その様子を見ていたトリイは……。

『エレキング……!』

エレキングを可愛がりながら育てていたことを思い出し、彼女は車から勢いよく飛び出し、ザルドも彼女を追いかける。

「おい!」

『エレキング……。っ、お願い、その子を楽にしてあげて!!』

トリイのその叫びを聞き、ジードはその願いを聞き入れ、頷く。

ジードは右拳に黒いエネルギーを集めてから腕をL字に組んで放つ「デススラッガーショット」を発射。

『はあああ、デススラッガーショットオ!!』

デススラッガーショットはエレキングに直撃し、直撃を受けたエレキングは身体

から火花を散らして倒れ込み爆発するのだった。

『ごめんね、エレキング………。ありがとう、ウルトラマン……。』  
トリイが悲しげにそう呟くと、彼女の胸の光……リトルスターが分離し、ジードのカラータイマーの中へと入り、無爪の手元へとウルトラカプセルとなって届く。

そして手にしたカプセルには青い姿の光の国の科学者、「ウルトラマンヒカリ」が描かれていたのだった。

「今度は青いウルトラマンか！」

その後、ゼロがジードに対して何か言いたそうにしていたが、活動限界が迫っていた為、結局は何も言えず2人はそれぞれ別々の場所で人間の姿へと戻るのであった。

＊

「ゲホゲホッ!! おのれ、あの小娘……!!」

その一方でゼロに敗れた荒井はというと……。

怪獣に変身していた為にルグスの効果を最小限に留められていた為、眠気こそあるものの気を失っておらず、荒井はルグスを投げてきた美渡に怒りを覚えていた。

「だが、これで新たな私のカプセルは手に入る」

すると荒井は何も描かれていないカプセルを空中に向けると、そこに漂っていた黒い霧のようなものがカプセルに吸収され、何も描かれていなかったカプセルにエレキングの姿が浮かび上がるのだった。

「恐怖に追い立てられ、人は祈る……」

\*

それから数日後、トリイから自転車を無事返して貰い、また彼女はA I Bに新た

に所属することとなった。

また無爪はお詫びの品を梨子に渡し、彼女からは胸を触ったことを完全に許して貰うことができたのだった。

そして今は無爪がバイトしているという駄菓子屋「銀河マーケット」の飲食スペースで無爪、美渡、千歌、梨子、曜の3人が購入したお菓子を食べてくつろいでいるところだった。

ちなみに無爪は今日はバイトではなく普通の客として来ている。

「全く、なっちゃんは………。お腹壊したのは仕方ないけど、やっぱり怪獣が出たのに千歌を置いて行くななんてねえ？」

「そ、その、その説は……。本当にごめんなさい。美渡ねえ、千歌ねえも……。」

「い、いやいや!! 仕方ないよそりゃ!! だから謝ることないって!! 美渡ねえももういいでしょ! それよりもさ、美渡ねえ。あの女の人だけど……。なんか変なとこなかった?」

不意に千歌がトリイのことを尋ねると美渡は飲んでいたラムネを吹き出しそうに

なり、「なななな、なんにもないよ!」と目を泳がせながら誤魔化する。

「あ、あのお〜」

そこへレイジが恐る恐る店へと入って来るとその顔を見た店長のハルヲが「ひい!?! ヤクザ!?!」と怯えていたが……それは放っておいてレイジは無爪に話があると言って店の外に連れ出す。

「なんだろ? レイジ兄ちゃんがなっちゃんに話して?」

「さあ?」

店の外に連れ出された無爪は「どうかしたんですか?」と尋ねると、レイジは意識をゼロに切り替え、レイジの身体を借りたゼロは無爪に「よお!」と挨拶する。

「えっ? レイジさん!?!」

『俺はゼロ、ウルトラマンゼロだ。 訳合って俺はこいつと今一体化している』

「ええ!?! レイジさんが……ウルトラマンゼロと!?!」

レイジ……というよりも、ゼロから告げられた真実に無爪は驚きの声をあげる。

「確かに、今のレイジさん声もゼロに似てるけど……」

『しばらくお前の戦いの様子を見させて貰ったぜ？ お前には色々聞きたいことがある……がっ……』

ゼロは視線を楽しげに談笑している千歌達に映すと、彼は「今日はまあいい」と言っただけ無爪の肩に手をかける。

『頑張れよ。 スクールアイドルの手伝いもウルトラマンもな』

「は、はあ……」

ゼロはそう笑顔で言うと言意識をレイジに戻す。

「あっ、驚いたよね？ でも、僕も無爪くんがジードなのは驚いたし、そこはお互いさまってことで。 じゃ、じゃあ僕はまだちょっと仕事があるから……」

「曜ちゃん達によろしくね！」

「あっ、はい」

無爪はレイジの言葉に頷き、彼はそれだけを告げるとその場を立ち去るのだった。

デススラッグーショット

トライスラッグーアタックは本作オリジナルの技です。

デススラッグーショットは普通にスラッグー使わないリフレクトスラッグーです。

ちなみにザルドがゼナと同じ装置を使っても戦闘時になるとどうしてもザム星人の姿になります。

そしてジードサンシャインは戦闘要員が1人欠けている為それを埋めるキャラでもあります。





## 第5話 『もう1つの炎』

今年はラブライブ！9周年なのでそれを記念しての更新です。

国木田 花丸は小さい頃から隅っこで遊ぶ目立たない子だった。

運動も苦手で、学芸会も木の役で……だからだんだん、彼女は1人で遊ぶようになっていった。

彼女は本を読むことが大好きになっていったのだ。

中学頃の当たりから図書室はいつしか彼女の居場所となり、そこで読む本の中でいつも空想を膨らませていた。

そんなある日のこと……。

彼女が何時ものように本を読み終え、本を読み終えて少し寂しさを感じていた時……。

近くで「ガサガサ」と物音が鳴り、音のした方を見てみるとそこには赤い髪をし

たツインテールの小柄な少女の姿があり、彼女は何やらアイドルの雑誌を読んでいるようだった。

そしてルビィが花丸の視線に気づくと人見知りな彼女は「わあ!?!」と少し驚きの声をあげて顔を雑誌に隠し、そんな少女を見て花丸は思わず笑みを浮かべる。

するとこっそりと雑誌の上から花丸の笑った顔を見て、少女も自然と釣られるように笑顔を浮かべるのであった。

『その娘は黒澤 ルビィ……………。マルの大切な友達!』  
そう、それこそが……………花丸とルビィの出会いだったのだ。

\*

エレキングの騒動から数日が経ち、鞠莉の手続きが終了した為、千歌達スクールアイドル部の活動が承認され……………。

彼女等は今、与えられた体育館の部室にスクールアイドル部の表札をかけているところだった。

「それにしても、まさかホントに承認されるなんて！」

「部員足りないのにね」

「理事長が直々に承認してくれたんでしょ、別に良いんじゃない？」

「良いっていかノリノリだったよね？」と苦笑しながら曜が無爪に言葉を返す。

「でも、どうして理事長は私達に肩を持ってくれるのかしら？」

「まあ、『スクールアイドル目指すならここくらい満員にしてみせろ!!』ってちょっとキツイこと言って来たけどね」

無爪のその言葉を聞いて曜と梨子は鞠莉ってそんな言い方していただろうかと首を傾げるが、それよりも今は梨子が疑問に思った「どうして自分達に肩を持ってくれるのか」という部分である。

それに対して千歌は「鞠莉もスクールアイドルが好きなのでは？」と予想するが……梨子はどうにもそれだけではないような気がしてならないのだった。

「兎に角入ろうよ！」

鞠莉のことも少し気になるが、今は先ず部室に入って中の様子を見ることが先決だということまで千歌は貸して貰った鍵を使って部屋の中へと入るのだが……。

「……………おおう」

「片付けて使えって言ってたけど……………」

「これ全部う……………」

その部屋はかなり散らかっている上に埃だらけの汚部屋で千歌、無爪、曜、梨子は少々どん引きし、千歌は文句を言っていたが梨子に「文句を言っても片付かないわよ!？」と注意される。

「もお〜！」

「じゃあ僕は部員じゃないんでこれで！」

そして無爪は部員じゃないのを良いことにそそくさとその場から離れようとするが……………当然、彼女等が逃がす訳もなく、「逃がすかあ!!」と千歌と曜に首根っこを掴まれて無理矢理引き止められるのだった。

「そんなこと言わないで!!」

「お願いだから手伝ってよなっちゃん！」

曜と千歌にそう必死に懇願され、無爪は「ええ〜？」と嫌そうな顔を浮かべる。

「おねがい……」

目尻に涙を溜め、上目遣いでそう頼み込んで来る千歌。

それを見て無爪は「うっ」と声をあげ、うるうるとした瞳で訴えてくる千歌に無爪は溜め息を吐き「しょうがないなあ」と部屋の掃除を手伝うことを決めるのだった。

(なっちゃんチョロい)

「ホント!? ありがとうなっちゃん!!」

それに千歌は笑顔を浮かべて喜び、彼女は無爪の手を握りしめながらお礼を言い、それに対し、無爪は頬を赤くする。

「も、もう……。じゃあ早く済ませよう！」

無爪は千歌の手を少々名残惜しく思いつつも離し、掃除を始めようとみんなに言うのだが……。その時、千歌が部屋に置いてあったホワイトボードに何か書かれているのを見つける。

「んっ？　なんか、書いてある？」

「歌詞……かな？」

「どうしてここに？」

そこには歌の歌詞らしきものが書かれており、なんでこんなところでそんなものが書かれているのだろうと疑問に思う一同。

その中で無爪はそのホワイトボードを見て1つのある予想を立てていた。

（昔、アイドル部みたいなのがあったってことなのかな？　歌詞みたいなのが書いてあるってことは）

その時、一同は気づかなかつたのだが……外から部室の中の様子を伺っているルビィの姿があり、彼女は千歌達の姿を目にするとすぐにその場から走り去って行き、A Q O U R S に部室が出来ていることを親友の花丸に報告しに行くのだった。

\*

学校の図書室にて。

周りには誰もおらず、そこでは図書委員である花丸が静かに本を読んでいるところだった。

そこへ、部屋の扉を勢いよく開いたルビィがやってきて花丸の元へと駆け寄り、彼女は嬉しそうに千歌達のスクールアイドル部が承認されていることを彼女に報告した。

「やっぱり部室出来てた!! スクールアイドル部承認されたんだよ!!」

「良かったね」

それを聞いて花丸も笑みを浮かべ、ルビィはほっこりした様子で「またライブ見られるんだ」と楽しげな様子を見せる。

その時、図書室の扉が再び開き、部室に置いてあった本を返しに来た千歌達がやって来たのだ。

「こんにちわー!」

「ピギャ!?!」

それに驚いたルビィは咄嗟に花丸の隣に置いてあった扇風機の後ろに隠れる。

「あっ、花丸ちゃん！　っと……ルビィちゃん!!」

「ピキヤッ!？」

だが、すぐに千歌は扇風機の後ろに隠れているルビィを一差し指を指して発見し、それに曜は「よく分かったね」と感心の声を出す。

「ってカルビィちゃん、その体勢スカートの中見えそうだからやめた方が良いよ」  
図書館に入ったほぼその直後になぜか顔を天井に向けていた無爪だったが、今の言葉を聞いて梨子は「ああ、だから上を向いてるのか」と納得した。

「ピギッ!？」

すぐさま顔を真っ赤にしつつ自分のスカートを抑えながら立ち上がり、彼女は小動物のように戸惑いながらも「こ、こんにちわ」と千歌達に挨拶し、それを見て千歌は目を輝かせる。

「かわいい〜!」

「あっ、これ、部屋にあったんだけど図書室の本じゃないかな？」

そこで梨子はここに来た目的を花丸に話し、花丸が本を確認すると「多分そうです」と言っつてわざわざ返しに来てくれたことにお礼を言おうとした瞬間。



『ガシッ!』と花丸とルビィの2人は力強く千歌に手を掴まれる。

「スクールアイドル部へようこそ!!」

「千歌ちゃん……」

「バカ千歌ねえ……おいコラ」

その光景に梨子は呆れ、曜は啞然とし、無爪は頭を抱える。

「結成したし、部にもなったし、絶対悪いようにはしませんよ!」

「それ悪い人がいう台詞でしょーが!! 離れるバカ千歌ねえ!!」

無爪はそんな千歌に怒りながら彼女を花丸とルビィから引き離す。

「だって2人が歌ったら絶対キラキラするもん!! 間違いない!!」

「で、でも……」

「……オラ……」

「オラ?」

つい滑ってしまった言葉に、花丸は慌てて「いえ!!」と言ってなんとか誤魔化する。

「マル、そういうのは苦手っていうか……」

「る、ルビィも……」

花丸と同じように困ったような表情で「自分もちょっと」という感じのルビィ、そんなルビィを見て花丸は何か言いたそうな顔を浮かべる。

また同じようにそんなルビィの表情を察してか、無爪もまた「んっ？」とそんな彼女に対し何かを感じていた。

「千歌ちゃん、強引に迫ったら可哀想だよ！」

「そうよ！　まだ入学したばかりの1年生なんだし！」

曜と梨子に注意され、反省する千歌。

「そうだよね、あははは。可愛いから、つい……」

「千歌ちゃん、そろそろ練習」

「あっ、そっか。じゃあね！」

曜にそう言われ、千歌達は練習に行くこととなり彼女等は図書室を出て行ったのだった。

千歌達が部屋を出るのを見届けると、花丸はルビィに「やりたいんじゃないの？」

「と尋ねられ、彼女はそれに「へっ!？」と驚いたような声を出す。

「で、でも……」

\*

学校の帰り。

海岸沿いにてルビィは自分がスクールアイドルをやろうとしない理由を花丸にそこで説明していた。

「ダイヤさんが？」

「うん、お姉ちゃん、昔はスクールアイドル好きだったんだけど、一緒にM.Sのマネして歌ったりしてた」

だが、高校に入ってからしばらく経った頃……。

『片付けて』

『へっ？』

『それ、見たくない！』

ダイヤはなぜか不機嫌な様子でスクールアイドルの雑誌を部屋で読んでいたルビィにそう言い放ち、それが理由でルビィは自分がスクールアイドルをやることに抵抗を感じていることを悲しげな瞳を浮かべながら、花丸に語るのだった。

「そうなんだ……」

「本当はね、ルビィも嫌いにならなくちゃならいけないんだけど……」  
そんなルビィに対し、花丸は「どうして？」と疑問を投げかける。

「お姉ちゃんが見たくないって言うものを、好きでいられないよ!!」  
そんな時のことである。

そう言い放つルビィの元に、学校帰りの無爪がやって来たのだ。

「あっ、ルビィちゃんに花丸ちゃん？」

「ピッ!？」

無爪の姿を見てルビィは突然現れた彼に驚きの声をあげながら花丸の背後に隠れ、それに対し、無爪は思わず苦笑してしまう。

しかし、人見知りの彼女に対し以前千歌がやっていた方法を思い出し、鞆の中にあつた飴を取り出す。

「えっと、飴……食べる？」

「あ、ありがとう……。ございます……。」

と言っても千歌のように餌付けする訳では無く、無爪は普通にルビィに手渡しで飴をあげ、ルビィはペコリと頭を下げる。

「そんなかしこまらなくても……。僕ら同級生なんだから。敬語も無しでさ」

「は、はい……。あつ、いや、うん」

無爪の言葉にルビィは戸惑いつつも頷き、そんな2人を見て花丸は「なんか煮え切らない態度の2人すら」と思うのだった。

「ところでさ、さつきチラつと聞こえたんだけど、ルビィちゃんは……。ダイヤさんが嫌いだって言うから、自分もスクールアイドルを嫌いにならないといけないの？」

無爪にそう質問され、ルビィはまだ無爪のことを少し警戒しているからか、ぎこちない様子で「うん」と頷く。

それを聞き、無爪は「それって、おかしくない？」と彼女に対して言葉を返し、

それにルビィは「えっ？」と首を傾げる。

「だつてさ、好きなものを……そう簡単に嫌いになんてなれないでしょ？」

「そ、それは……」

「ダイヤさんが強制した訳でもないのなら、尚更だよ。好きって気持ちからは……多分、逃げられないと僕は思う」

笑みを浮かべながら無爪はルビィにそう語り続け、それを受け、ルビィは顔を俯かせる。

それを見て無爪は「困らせちゃったかな」と不安になり、「ごめんね！」と両手を合わせてすぐさま謝罪する。

「余計なこと言っちゃったかもね。また変なこと言う前に僕はもう帰るよ、じゃあまた明日！」

「あつ、さ、さようなら……」

「ま、また明日……」

無爪は手を振りながら自分はもう帰ることを告げてその場から立ち去って行き、無爪を見送った後……ルビィはフツと思ったことを花丸に問いかけた。

「ところで……花丸ちゃん自身は興味ないの？ スクールアイドル？」

「マル!? ないない!! 運動苦手だし、ほら、オラとか言っちゃう時あるし……」

「じゃあルビイも平気！」

ルビイは花丸に笑顔を見せながらそう言うのだが、花丸は悲しげな表情でそんなルビイを見つめており……。

\*

その頃、果南の家のダイビングショップにて。

「ありがとうございます！ またよろしくお願いします！」

果南はダイビングショップに来ていた客を見送り、店の手伝いに戻ろうと後ろを振り返った瞬間……。

『ヌウ・・・!』と怖い顔引つ提げて何かの袋を持ったレイジが立っており、それを見た瞬間果南は「ビクウ!」と肩を震わせ、「ひやああ」と驚きの声をあげるのだった。

そんな果南の悲鳴に驚いてか、レイジも「うわあ!」と驚き、彼は思わず尻餅をついてしまう。

『いや、なんでお前も悲鳴もあげてんだよ』

「だ、だって急に大声出すから・・・」

『だからオメーのせいだよそれは!!』

そんな風に、ゼロにツツコミを入れられるレイジ。

すると果南はレイジの顔を見て見知った顔であったことに気づき、彼女はほっと胸を撫で下ろした。

「な、な、なんだレイジさんか。ご、ごめんねレイジさん? でもレイジさんも悪いよ? 振り返ったら急に怖い顔したレイジさんが立ってたんだから」

「ご、ごめんね? 別に驚かせるつもりは無かったんだけど・・・」

ちなみに、レイジが曜の従兄で千歌や無爪と知り合いなこともあり、果南もレイ



ジのことは昔から知っているので2人は互いに顔見知りである。

「聞いたよ、お父さん怪我して今果南ちゃん店の手伝いで学校を休んでるって」

「うん、実はそうなんだ」

「だからこれ。こっちに帰って来て忙しくて遅れちゃったけど、お見舞いの品」

レイジの持っていた袋は果南の父に対してのお見舞いであり、果南は「ありがとう」とお礼を言いながらそれを受け取るのだった。

「折角だし、レイジさんもダイビングして行く？」

「うーん、そうだなあ……」

そんな時のことである。

突然、いつの間にか現れていた誰かが果南の腰に抱きつき、彼女が視線を下に向けるとそこには……。

果南の胸に頬ずりをする鞠莉の姿があった。

「えっ、理事長!？」

『おい、あれ完全にセクハラだろ』

「やっぱりここは果南の方が安心できるな〜♪」

「って鞠莉!!」

果南は自分の胸に頬ずりしてくる鞠莉を引き離すのだが、彼女は身体をターンさせた後に今度は普通に「果南、シャイニー！」と言いながら嬉しそうに果南に抱きついてくる。

「……どうしたのいきなり？」

険しい表情を浮かべながら、果南が鞠莉にそう尋ねると鞠莉は一度果南から離れ、レイジの方へと振り返る。

「ソーリー、レイジ先生。少し、果南と2人だけで話したいことがあるの」

「あっ、は、はい!! 僕は席を外しますね!!」

鞠莉の言葉を受けてレイジはそそくさとその場から離れ、鞠莉は再び果南と向き直る。

「スカウトに来たの!」

「スカウト?」

「休学が終わったら、スクールアイドル始めるのよ!! 浦の星で!」

それを聞き、果南は険しい表情を崩さないまま「本気?」と鞠莉に尋ねると鞠

莉は先ほどまでのおちゃらけた様子から一変し、真剣な顔つきとなる。

「・・・・・・・・でなければ、戻って来ないよ」

「・・・・・・・・」

それを受け、果南は目を滲ませながら何かを鞠莉に強く言い放った後、彼女は店の中へと戻って行くのだった。

「・・・・・・・・相変わらず頑固親父だね」

\*

同じ頃、黒澤家にて・・・・・・・・。

そこでは部屋の隅っこでルビィは μS の雑誌を読んでいた。

「・・・・・・・・」

すると彼女はふっと視線を別の場所に移し、彼女はその場所でよくダイヤと一緒

によくM.Sの話を2人で楽しくしている時のことを思い出していた。

『ルビィは花陽ちゃんかなあ?』

『わたくしは断然エリーチカ! 生徒会長でスクールアイドル、クールですわ』

!』

エリーチカがクール……??

ではなくルビィがそんな自分達の押しのことを話し合うという当時のことを思い出し、その時のことを思い出して寂しくなったのか、一瞬彼女は暗い表情となるが……。

再びM.Sの雑誌に視線を映すとすぐに彼女は自然と笑みを浮かべた。

「……」

そんな様子を丁度学校から帰ってきたダイヤがこっそりと覗いていたのだが、彼女はルビィがM.Sの雑誌を読んでいることに何も言わず、そのままその場を立ち去るのだった。

「あっ、そうだ」

するとルビィは冷蔵庫にアイスがあったことを不意に思い出し、彼女は丁度喉も

渴いたのでアイスを食べようと台所に立ち上がって向かう。

「あった♪」

ルビィはそのアイスを手に取り、食べようと蓋を開けるのだが……。

「えっ!? あれなんで!?!」

なぜかそのアイスは既に溶けており、一瞬冷蔵庫が壊れたのかと思ったのだが……見たところ冷蔵庫に異常はなく、ルビィは訳が分からず首を傾げ困惑する。

尚、その時ルビィは気づいていなかったのだが……彼女の胸から米粒ほど小さな光が一瞬だけ宿っていたのだった。

\*

同じ頃、とある廃工場のある部屋にて……。

そこでは壁にサーベルを始めとしたハンマーや銃など様々な武器が飾られており、その部屋の中央に置かれたソファには右目に傷があり、レスラーパンツのような模様の入った黒い身体の宇宙人……。「武装暴君　マグマ星人　マクリル」が武器の手入れをしながら座っていた。

『ふう〜、なんかおもしろえことねえかなあ』

そんなことマクリルが呟いていると突然、彼が机の上に置いていた端末機が鳴り響き、それを受けてマクリルは慌てて端末機を手取る。

『おっ！　こいつは……どうやら、例の噂の光を発症した人間が、この辺りにいるらしいな』

そう言いながらマクリルやニヤリと笑みを浮かべ、ソファから立ち上がり、壁に飾ってある武器を手取っていくのだった。

\*

同時刻、とある本屋で花丸がルビィと同じM.S.の雑誌を立ち読みしているところだった。

「M.S. . . . . . かぁ。 オラには無理すら」

花丸はそう呟きながら次のページを開くとそこにはM.S.のメンバーの1人である「星空 凜」の姿があり、彼女は凜のページを少し興味深そうに眺めていた。

「. . . . . んっ？ あれって. . . . . 花丸ちゃん？」

尚、その時少し離れたところで漫画を買いに来た無爪がたまたま通りかかり、彼は雑誌を読んでいる花丸の姿を見て何か思うところがあるのか、「ふむ」と小さく呟く。

「ズラ丸降臨！ しかも同じクラスの男子も！ なんでここに!？」

その時、サングラスとマスクをした不審者がこっそりと移動していたのだが、花丸と無爪はその気配に気づき「んっ？」と首を傾げるのだった。

「ってあれ？ 無爪くん？」

「また会ったね、花丸ちゃん」

するとそこで花丸は無爪の存在に気づき、彼女はそれに驚いた表情を浮かべる。

「やっぱり花丸ちゃんも興味あるの？ スクールアイドル？」

「い、いやあ……マルは……。ルビィちゃんがよく話してくれ

るから、少し気になっただけで……」

「そう？ その雑誌、凄く興味深そうに読んでたみたいだけど……」

無爪にそう指摘され、花丸は「えっ!? そうずら!？」と声をあげる。

どうやら興味深そうに読んでいたのは無自覚だったらしい。

「ずら？」

「あっ、いや……そうかな？」

また思わず「ずら」と言ってしまったことに慌てて言葉を訂正する花丸。

「うん。興味深そうに見てた。スクールアイドルが気になるのなら、千歌ねえ

達の部活も良かったら見に来てね」

無爪はそれだけを言い残すと手を振ってその場を立ち去って行き、そんな無爪に



影からこっそりとペガが誰にも気づかれないように顔を出す。

『なんやかんや言ってるけど、無爪って千歌ちゃん達の為に色々やってくれてるよね？』

「別に、千歌ねえの為じゃないし！ 花丸ちゃんが興味ありそうだったから言っ  
てあげただけだし!!」

『素直じゃないんだから』

何時ものようにそっぽを向いてツンデレ全開の無爪にペガは呆れたように苦笑す  
るのだった。

\*

翌朝、朝練として千歌、梨子、曜の3人は体力作りをするために淡島神社の長い階段を駆け上がったのだが……。

流石に長すぎる為、彼女等は息を切らして途中で座り込んでしまっていた。

ちなみにこれには無爪も少し心配になって付いてきて一緒に階段を駆け上がったのだが……そこはやはりウルトラマンだけあって彼は全く息切れをしていなかった。

「はあ、はあ、無理よ、流石に……。」

「でもお、*μ's*も階段登って鍛えたって〜」

千歌の言葉を聞いて無爪は自分の影の中にいるペガに梨子にバレないようにこっそり「そうなの？」と尋ねる。

『いや、*μ's*はここまで長い階段登ってないよ』

「だと思った。千歌ねえ、もう少しペース配分考えようよ」

無爪は苦笑しながら千歌にそう言い、それに曜も「だね」と頷く。

「だってこんなに長いとは思わなかったし」

そんな時、「千歌？」と上から彼女の名前を呼ぶ声が聞こえ、声のした方に視線を

映すとそこには走りながら果南が階段から降りて来た姿があり、千歌も「果南ちゃん！」と彼女の名を呼ぶ。

「もしかして上まで走って行ったの!？」

「一応ね、日課だから」

それを聞いて千歌達4人は「日課!？」と驚きの声をあげる。

「いやなんで無爪も驚くの？ 無爪の方がとんでも体力じゃん」

果南にそうツッコまれ、無爪は「そーいやそーうか」と思わず納得。

「っていうか千歌達こそどうしたの？ 急に?」

「鍛えなくつきやって！ ほら、スクールアイドルで!!」

果南の質問に千歌がそう答え、それに対して果南は「ああ………そっか」と納得し、「じゃあ店開けないといけないから」と言い残して彼女はその場を走り去って行くのだった。

「息1つ切れてないなんて………」

「上には上がいるってことだね」

そんな果南を見てそれぞれ感心する梨子と曜。

また千歌も一度息を吐いてもう1度走り出そうと「私達も！ 行くよ〜」と言っ  
てもう1度走り出そうとするのだが……その時の千歌はかなり弱々しく  
見え、それに無爪達3人は苦笑するのだった。

\*

その後、学校にて……。

「ええ!? スクールアイドルに!?!」

「うん」

教室で花丸が突然、ルビィに「スクールアイドル部に入部したい」と言ってきたのだ。

尚、その言葉は同じ教室にいる無爪の耳にも入り、彼は慌てて「えっ、ホント!?」と嬉しそうに花丸達の元へと駆け寄る。

それに急に来たものだから花丸とルビィは「わっ!?!」と声をあげて少し驚いてしまい、ルビィは思わず花丸の後ろに隠れてしまった。

「あっ、ご、ごめん急に………驚かせちゃって。でも、花丸ちゃんがアイドル部に入部してくれるって聞こえて………つい」

無爪は申し訳なさそうに花丸とルビィに謝り、ルビィも花丸も「気持ち分かるから、気にしなくて良いよ」と声をかけてくれたのだった。

「それで花丸ちゃん、急にどうして?」

「どうして、やってみたいからだけど? ダメ?」

ルビィからの疑問に花丸はそう答え、花丸の言葉に対し、ルビィは「全然!!」と返す。

「ただ、花丸ちゃん興味とかあんまり無さそうだったから………」

「いやあ、ルビィちゃんと一緒に見ている内に『良いな』って! だから、ルビィちゃんも一緒にやらない?」

「ルビィも!？」

花丸はさらにルビィも一緒にスクールアイドル部に入らないかと誘い、それに驚きの声をあげるルビィ。

「やってみたいんでしょ？」

「それは、そうだけど……人前とか、苦手だし、お姉ちゃんが嫌がると思うし……」

「それは関係無いよ」

そんなルビィの言葉に、無爪が言ってきたのだ。

「人前はきつと、頑張ればどうにかなるし。 やりたいかやりたくないのかは、ダイヤさんじゃなくてルビィちゃん自身が決めることだよ？」

「うう……」

しかし、それでもルビィはアイドル部に入部するのを躊躇い、それを見て花丸は「じゃあこうしない？」と1つの意見を彼女の耳元でささやいて提案したのだ。

「体験……入部？」

\*

それから、放課後のスクールアイドル部の部室にて。

「ホントお!?!」

花丸とルビィが体験入部をする為にこの部室を訪れ、そのことに対して千歌は嬉しさのあまり、目尻に涙を溜めた後、「やったあ〜!!」と喜びのあまり部室を飛び出してハイテンションなジャンプを披露。

「これでラブライブ優勝だよ!! レジェンドだよ〜!!」

そう言いながら千歌は梨子と曜の間に入って2人の肩に腕をかけるのだが……  
無爪はそんな千歌に呆れた視線を向ける。

「千歌ねえ、話聞いてた? 花丸ちゃんとルビィちゃんは体験入部する為に今日

は来たんだよ？」

「ほえ？」

つまり、お試しで一時入るだけでそれで行けそうならば入部するし、合わなければ入らずにやめるということを梨子は千歌に説明し、説明を受けた千歌は「そうなの？」と首を傾げて尋ねる。

「いやあ、まあ……色々あって……」

「もしかして生徒会長？」

どうにもぎこちなさそうな2人に対し、曜は「もしかしてダイヤのことを気にしているのでは？」と思い、問いかけると花丸は苦笑しながら「は、はい」と頷く。

「だから、ルビィちゃんここに来たことは内密に……」

「僕は、気にする必要はないと思うんだけどなあ……っていうか……！」

一方で千歌はA q o u r sの部員募集のポスターに「国木田 花丸&黒澤 ルビィ 参加」とマジックと書き込んでおり、そんな彼女に無爪は頭を抱えて後ろから軽めのチョップを千歌の頭に叩きこんだ。



「ほわっ!? なっちゃん何するの!?!」

「何するじゃないよ!! 千歌ねえ、話はちゃんと聞こうか?」

無爪に注意され、梨子と曜もそんな千歌に対し思わず苦笑してしまうのだった。

「じゃあ取りあえず、練習やって貰うのが1番ね?」

梨子がそう言うと、彼女は部室のホワイトボードに色々なスクールアイドルのブログを見て参考に作ったという練習メニューが書かれた紙を貼り付け、それを見た無爪、千歌、ルビィ、花丸は感心の声をあげた。

「曲作りは?」

そこで曜が梨子の考えて来たメニューに曲作りの箇所がないことに気づき、彼女がそのことを手を挙げながら梨子に尋ねる。

「それは別に時間を見つけてやるしかないわね」

曜の質問に対し、梨子はそう説明を行う。

また、その光景を見てルビィは「本物のスクールアイドルの練習……!」とスクールアイドルの練習場面を生で見れることに感動していた。

「でも、練習どこでやるの?」

次に曜がダンスの練習などはどこでやれば良いのかと疑問に思ったことを口にする、すっかりそのことを忘れていたのか千歌は「あっ……」と声を出し、一同は練習できそうな場所を探しに行くことにするのだった。

\*

しかし、グラウンドも中庭も殆どの場所が他の部活の生徒達が使用しており、部室もダンスの練習ができるほど広くはないので千歌達は練習ができる場所に悩んでいた。

「砂浜じゃダメなの？」

「移動の時間考えると、練習場所はできたら学校内で確保したいわ」

曜がならばファーストライブの時のように砂浜でやるのはどうかと提案したのだが、それでは移動だけでも時間がかかってしまうということで梨子は却下し、他の方法を考えていると……。

「それなら屋上はどうですか!？」

そこでルビィが練習場所で悩んでいる千歌達に意見を出し、千歌は「屋上？」と首を傾げ、それを無爪の影の中から聞いたペガは「成程」と納得する。

『屋上か。確かに良い案かも』

「んっ? 屋上がどうかしたのペガ?」

『μsもね、ダンスの練習とかは学校の屋上を使っていたんだって』

無爪の問いかけに対し、ペガはそう答え、またルビィも千歌達にそのことを教えると彼女達も「そうか!」と納得し、早速一同は屋上へと向かうのだった。

「そう言えばペガもスクールアイドル……μsが好きなんだよね? ルビィちゃんと仲良くなれるんじゃない?」

『確かになれそうだけど……驚かせたくないし、でも、何時か話せたら良いなとは思うよ』

その道中、無爪は梨子達にはバレないようにペガに話しかけ、もしかしてルビィとペガは話が合うのではないかと言うのだが……。

ペガ自身は「驚かせたくない」ということで、取りあえず今は黙っていることに

するペガであった。

\*

その後、屋上に辿り着くと思ったよりもその広く、その広さに千歌は「すっごい!!」と飛び跳ねて喜んでいた。

「富士山くつきり見えてる〜!」

「でも日差しが強いかも……」

曜と花丸もそれぞれ屋上の感想を言い、また花丸の言葉に千歌は「それが良いんだよ!!」と返す。

「太陽の光をいっぱい浴びて!! 海の空気を、胸いっぱい吸い込んで……」  
そう言いながら座り込んだ千歌は床に手を置き、笑みを浮かべながら「暖かい」

と小さく呟く。

すると、そんな彼女の元へと曜達が歩み寄り、千歌と同じように床に手を当てる。

「ほら、なっちゃんも!!」

ただ一方で無爪だけは離れた位置に立っており、そんな彼の手を掴んで千歌は引っぱり、それに無爪は顔を赤くする。

「い、いや、僕が一緒にやるのはなんか場違いじゃない!？」

「全然そんなことないよ!! ほら、一緒に!」

そんな千歌に流されるまま、彼女と一緒に床に手を置く無爪。

それに無爪は「ホントだ、暖かい………」と呟き、それに千歌は嬉しそうに笑顔を見せるのだった。

「ん〜! 気持ち良いぞら〜!」

また花丸はそのまま寝転がり、そんな彼女の方をルビィは「花丸ちゃん?」と軽くつつく。

そんな光景に、千歌達はほのぼのとしつつ、「さあ、始めようか!」とダンスの練習を行うこととなり、千歌、梨子、曜、花丸、ルビィは立ち上がってそれぞれが

手を重ね合う。

「なっちゃんも一緒にやらないの?」

「いや、だから僕はスクールアイドル部に所属してないから。それこそなんか場違い感あるし。まあ、手伝いくらいはするけど」

千歌が無爪が参加しないことに少し寂しそうにしているが、無爪は「それこそ場違い」ということで拒否し、千歌も無理強いはできないので渋々承諾。

気を取り直して千歌は練習開始の号令をかける。

「じゃあ行くよー!! A q o u r s . . . . .!!」

「[[[サンシャイン!!!]]]」

それから . . . . .

「ワン、ツー、スリー、フォー! ワン、ツー、スリー、フォー!!」

曜の声に合わせて千歌とルビィはダンスの練習を開始。

「ふう、できた! できました!! 千歌先輩!!」

一通り終わると、ルビィは自分が想像してたよりもちゃんと出来たことに驚きつつも嬉しそうに千歌に「自分にも出来ました!」と話しかけるのだが . . . . .

千歌はルビィとは全く違うポーズを取っており、完全にダンスの振り付けが間違っており、そのことに千歌は「あれ？」と首を傾げる。

「千歌ちゃんはやり直し」

「今日始めたばかりの後輩に出し抜かれるとか、先輩の威厳はないね、千歌ねえは………」

梨子と無爪にそう言われ、「あはは」と苦笑いする千歌。

\*

「今日までって約束だった筈よ!？」

「あはは、思いつかなかったんだもん」

その後、部屋に戻った無爪達だったが……。

「なにかあったんですか？」

「ああ、新しい曲、今作ってて」

何か言い争っている千歌と梨子に首を傾げながら何があつたのかと疑問に思ったことを花丸が曜に尋ねると、彼女が言うには現在、千歌は今日までに出すようにと梨子に頼まれていた歌の歌詞をやっていたので、現在彼女から怒られているところなのだという。

「あっ、花丸ちゃんも、何か思いついたら言ってみてね！」

「・・・・・・はあ・・・・・・」

不意に千歌にそう言われ、思わず返事をする花丸。

するとそこで、花丸がふっと隣にいるルビィを見ると彼女は小さくダンスの振り付けの練習をしていることに気づき、そんなルビィの姿に花丸は思わず笑みを零れた。

\*



「これ……一気に登るんですか!？」

その後、淡島神社の階段前に来た千歌達はルビィと花丸に練習の一環としてこの階段を駆け上がって走ることを説明。

それにルビィは驚きの声をあげ、千歌は「勿論!」と胸を張って答えるが、その後に曜から「いつも途中で休憩しちゃうんだけどねー」と説明が入る。

「でも、ライブで何曲も踊るには頂上まで駆け上がるスタミナが必要だし」

さらに梨子からもこの階段を駆け上がる意味を花丸とルビィに話し、そして一同は千歌の掛け声を合図に階段を走って行くのだった。

「それじゃ、μ's目指して……よい、ドーン!!」

尚、無爪も今日始めたばかりの花丸やルビィが無茶をしないようにフォローをする為、彼もまた一緒に階段を駆け上がることになったのだった。

しかし、花丸はかなり早い段階で既に体力が付きかけてしまっており、花丸が遅れていることに気付いたルビィは立ち止まり、花丸が来るのを待つ。

「どうしたのー?」

そんなルビィに気付いた曜がどうかしたのかと尋ねるとルビィは「ちょっと息が

切れちゃって」と苦笑しながら曜に話す。

「先行っててくださ〜い」

「無理しないでね〜？」

ルビィに先に行っててくれと言われ、曜達は頷き、無理しないようにだけ言って彼女等は先に階段を駆け上がったって行くのだった。

「花丸ちゃん、無理しないでね？」

「だ、大丈夫だよ………」

無爪からも花丸に無茶をしないように言うのだが、花丸は笑みを浮かべてそう言うのだが………。

その時、花丸は上の方でルビィが待っていることに気づき、彼女は「ルビィちゃん？」と首を傾げる。

「一緒に行こう！」

「……ダメだよ」

「えっ？」

一緒に階段を走ろうと誘うルビィだが、花丸から返って来た言葉に彼女は戸惑

い、「花丸ちゃん？」と不思議そうに彼女の名を呼ぶ。

「ルビィちゃんは、もっと自分の気持ち大切にしなきゃ！」

息を切らしながらも花丸はそうルビィに語りかけ、顔をあげると花丸はさらにルビィに対して言葉をかける。

「自分に嘘ついて、無理に人に合わせても辛いだけだよ！」

「……合せてる訳じゃ……」

「ルビィちゃんはスクールアイドルになりたいんでしょ？ だったら、前に進まなきゃ！」

そう言いながら花丸は笑みをルビィに向け、彼女を後押しする。

「さあ、行って？」

「で、でも……」

「……さあ！」

最初こそ、花丸の言葉に戸惑うルビィだったが、花丸の強い言葉にルビィも笑みを浮かべて「うん！」と頷くと、彼女は再び階段を駆け上がり始める。

「自分に嘘ついてるのって、花丸ちゃんもなんじゃないの？」

そんな2人の様子を見ていた無爪が、不意にそんなことを花丸に尋ねて来る。

しかし、花丸は苦笑いしながら「そんなことないよ」と言葉返す。

「マルはただ、とても優しく、とても思いやりがあって、でも………気にしすぎで、素晴らしい夢もキラキラした憧れも、全部胸に閉じ込めてしまつて………」  
マルはただ、それを切り拓いてあげただけだよ。中に詰まっている、いっぱい光を」

花丸はそれだけを言い残すと、先に階段を降りていることだけを千歌達に伝えてくれと無爪に頼み、彼女は階段を降り始める。

そんな彼女を見て、ひょっこりと無爪の影から顔を出すペガ。

『花丸ちゃん、追いかけて良いのかな?』

「多分だけど、それは僕達の役目じゃないと思う。でも、花丸ちゃんの言ってることって、殆どブーメランだよね」

そんな花丸の背中を見つめながら、思わず苦笑する無爪。

そして、ルビィはと言うと………。

彼女は自分を頂上で待つ千歌達に追いつき、息を切らしながらもなんとか彼女は

辿り着いた。

「やった、やったあ！」

「すっごいよルビィちゃん!!」

「見て！」

すると千歌が祠の方を指差すとそこでは輝く綺麗な夕焼けがあり、それに「うわあ〜！」と歓喜の声をあげるルビィ。

「やったよ！ 登り切ったよお!!」

そして、登り切ったことを飛んで喜ぶ千歌であった。

\*

世界の隅々まで照らせるようなそのルビィの輝きを、花丸は大空に放ってあげた

かった。

それが花丸自身の夢だった。

花丸はその夢を叶えられたことに満足し、階段を降りると彼女は一瞬だけ笑みを浮かべる。

「なんですか？　こんなところに呼び出して」

その時、聞き覚えのある声の花丸の耳に入り、声のした方を向くとベンチに座っているダイヤの姿があり、ダイヤの姿を見ると花丸は気を引き締めた表情をすると彼女はダイヤの元まで歩く。

「・・・・・・・・あの、ルビィちゃんの話・・・・・・・・。ルビィちゃんの気持ちを、聞いてあげてください」

「・・・・・・・・ルビィの？」

花丸はそれだけを言うとダイヤに頭を下げた後、その場を走り去って行くのだった。

「あ・・・・・・・・。そんなの、分かってる・・・・・・・・。」

沈みゆく夕日を見つめながら、ダイヤがそう呟くと・・・・・・・・「お姉ちゃん!？」

という声が聞こえ、ダイヤモンドが声をした方へと顔を向けるとそこにはルビィ、千歌、曜、梨子、無爪の5人が立っていた。

「ルビィ!? これは、どういうことですか?」

鋭い目つきでこれは一体どういうことなのかとルビィに問いかけるダイヤモンド。

「あの……それは、その……」

「違うんです!! ルビィちゃんは……」

そんなダイヤモンドからルビィを庇おうとする千歌だが、そんな彼女の肩に手を置き、引き止め、首を横に振る無爪。

「なっちゃん……」

それによって千歌は口を閉じ、ただ彼女は心配そうにルビィを見つめる。

「大丈夫です、千歌さん」

ルビィはそれだけを言うと、彼女はダイヤモンドの元まで歩き……

「お姉ちゃん……。ルビィ……!」

だが、そんな時……

『見つけたぞ、胸の光を持つ人間を……!!』

『っ!?!』

後ろから聞こえて来た突然の声に千歌達は驚いて後ろを振り返るとそこにはマグマ星人 マクリルが右腕に装着した「マグマサーベル」を構えながら、そこに立っており、マクリル出現に一同は慌て、動揺する。

「えっ!?! なになにに宇宙人!?!」

「えっ、またあ!?!」

「な、なんですのあなたは!?! いつの間に……」

初めて見る宇宙人に特に動揺する曜、梨子はまた宇宙人と遭遇したことに危機感を抱き、ダイヤはルビィを後ろに下がらせて庇うように立つ。

『俺が用があるのはその赤い髪の奴だけだ!! 関係ない奴等は引っ込んでいろ!!』

マクリルはそう言うのと左腕に銃のような武器を出現させて装着し、銃口をルビィに向けるのだが……そうはさせまいと無爪がジャンプして大きく飛び上がり、膝蹴りを喰らわせる。

「おりゃああ!!」



『ぐはっ!?!』

それに倒れ込んだマクリルに無爪は覆い被さり、早く逃げるように千歌達に言い放つ。

「こいつは僕が押さえ込むから、ダイヤさんや千歌ねえ達はルビィちゃんを連れて一緒に逃げて!!」

「えっ、ですがあなたは……!!」

「こいつはルビィちゃんを狙ってる!! 早く!!」

一般の生徒を残し、自分達だけで逃げるなど……と思うダイヤだったが、無爪はさらに力強く「早く逃げろ!!」と言い放ち、それにダイヤは確かに無爪の言う通り、あの宇宙人がルビィを狙っているのは確実。

ならばと考え、ダイヤは「わ、分かりました」と渋々頷き、ルビィの手を引っ張ってその場から走り去って行く。

「お姉ちゃん!」

「千歌さん達も早く行きますわよ!!」

「で、でも……なっちゃんが……」

『いい加減退きやがれ!!』

そうこうしている間にマクリルは力尽くで無爪を押し退かし、左腕の銃「マグマショット」から弾丸を無爪に向かって発射。

「うわっ!?!」

なんとか躲す無爪だが、即座にマクリルから放たれたドロップキックを喰らい、無爪は吹き飛ばされてしまう。

「「なっちゃん!!」」

「無爪くん!!」

即座に千歌達は吹き飛ばされた無爪の元に駆け寄り、マクリルはその隙にルビィ達を追いかけて一気に彼女達の元へと追いついてくる。

『待てやコラァ!!』

「ひっ!?!」

「こ、来ないで〜!!」

すると、ルビィの胸が突如として眩い光を放ち………咄嗟に突き出した両手から炎が放たれ、炎はマクリルを包み込む。

『おわっ!? あっつ、あっつい三 熱いんすけど!』

「・・・・・・・・えっ?」

「る、ルビィ・・・・・・・・? 今のは、なんですか?」

それにはルビィやダイヤ、近くでその光景を見ていた千歌達も驚きの表情を浮かべ・・・・・・・・また、特に梨子は・・・・・・・・目を見開いて唾然としていた。

「あれって・・・・・・・・梨子ちゃんの時と同じ・・・・・・・・」

「じゃあ、ルビィちゃんが・・・・・・・・リトルスターを・・・・・・・・。あの宇宙人はそれを狙ってるんだ」

小声で千歌と無爪は2人ではそんな会話を繰り広げ、またダイヤはルビィが両手から炎を出したことに驚いたもののすぐに彼女はハッと我に返り、ルビィの腕を引っ張ってその場から逃げようとする。

「あっつ!!」

「あっ、お姉ちゃん!? 大丈夫!」

リトルスターを発症したせいかわ、ダイヤが腕を握るとその熱さで彼女は一瞬腕を引っ込めてしまいが、ダイヤは笑みを浮かべて「大丈夫ですわ」とだけ言うと、す

ぐに「兎に角逃げて!!」とルビィをその場から逃がそうとする。

『そうはさせねえぞ!!』

しかし、マクリルはルビィに燃やされた怒りもあり、彼女を逃がすまいと巨大化し、一度武器を消すとその巨大な両手でダイヤ諸共、ルビィを掴み取ろうとする。

「ルビィちゃん!! ダイヤさん!!」

だが、その直後……。

「ジーツとしてても、ドーにもならねえ!!」

いつの間にか曜や梨子に気付かれないように場所を移動した無爪がそう言い放つと腰のカプセルホルダーから「初代ウルトラマン」のカプセルを取り出し、スイッチを押して起動させるとそこからそのウルトラマンが出現。

「融合!!」

ウルトラマンのカプセルを装填ナツクルに装填させた後、さらにそれとは別に「ウルトラマンベリアル」のカプセルを取り出し起動させると今度はそこからベリアルが出現。

「アイ、ゴー!!」

同じくベリアルのカプセルをナックルに装填し、ジードライザーで装填したカプセルをスキャンする。

「ヒア、ウィー、ゴー!!」

『フュージョンライズ!』

「決めるぜ、覚悟!!」

そしてジードライザーを掲げて胸の前でスイッチを押すとウルトラマンとベリアルの姿が重なり合い、無爪は2人のウルトラマンの力を合わせた「ウルトラマンジード プリミティブ」へと変身を完了させたのだ。

『ウルトラマン! ウルトラマンベリアル! ウルトラマンジード!! プリミティブ!!』

変身を完了させたジードは跳び蹴りをマクリルの顔面に喰らわせ、蹴り飛ばしてダイヤとルビィから一気に引き離すことに成功。

「ウルトラマン……!」

「ジード……!」

ダイヤとルビィがジードの姿を見て、彼の名を呟くとジードは2人に「もう大

丈夫」とでも言うように頷き、ファイティングポーズを取りながらマクリルへと駆け出す。

『シエア!!』

ジードは勢いをつけた膝蹴りをマクリルに繰り出すが、マクリルはそれを受け流し、左腕のマグマショットをジードに突きつけて近距離から弾丸を発射。

『グアアッ!?!』

さらにマクリルは両腕に爆発的なパワーを発揮させる効果のあるガントレット型の武器、「マグマガントレット」を装着し、その強烈なパワーによる拳をジードに繰り出す。ジードは後ろの方へと後退しながら回避。

『レッキングリッパー!!』

それと同時に前腕の鱗状の部位から放つ切断光線「レッキングリッパー」をジードはマクリルに繰り出すのだが、マクリルは拳を前に突き出してレッキングリッパーを打ち砕く。

『フン!! オリャアア!!!』

そのままマクリルはジャンプしてマクリルの拳がジードの胸部に直撃し、ジード

は大きく吹き飛ばされる。

『ウワアア三?』

それにより、倒れ込むジード。

『そこでジッとしている!!』

マクリルはそれだけを言っていると、ジードに背中を向けて再びルビィに視線を向ける。

「ひっ!?!」

『無爪、ここは防御力の高いソリッドバーニングの方が有効です』

そこでレムから通信が入り、彼女のアドバイスを受けてジードは「分かった!」と頷いて立ち上がる。

そして無爪はジードライザーを構え、セブンカプセルを起動させる。

『融合!』

するとカプセルの中から赤い戦士の「ウルトラセブン」が出現する。

『アイ、ゴー!』

さらに無爪は赤き獅子の戦士「ウルトラマンレオ」のカプセルを起動させるとカプセルからレオが現れる。

『ヒア、ウィー、ゴー!!』

『フュージョンライズ!』

『燃やすぜ、勇氣!!』

そしてジードライザーを掲げて胸の前でスイッチを押すとセブンとレオの姿が重なり合い、赤い鎧を纏ったような姿……「ウルトラマンジード ソリッドバーニング」へと変身を完了させる。

『はああ!! はあ!! ジイイーロード!!!』

『ウルトラセブン! ウルトラマンレオ! ウルトラマンジード!! ソリッドバーニング!!』

戦闘BGM「ウルトラマンジードソリッドバーニング」

姿を変えたジードは背中ของブースターで一気にマクリルに接近すると、マクリルの肩を掴んでこちらに無理矢理振り向かせると同時に腕のブースターで加速させた強烈なパンチをマクリルに叩きこむ。

『ぐああ!!!』

ジードの攻撃を喰らい、膝を突くマクリルだが……マクリルはすぐさま



左腕をマグマショットに変えて銃弾を撃ち込むが……ソリッドバーニングの装甲には一切効かず、ジードはマクリルを無理矢理立ち上がらせるとそのまま巴投げを繰り出す。

『うおわあ!!』

ジードに投げられ、背中を地面に打ち付けるマクリル。

『なんでお前はあの娘を狙う!!』

倒れ込んだマクリルに向かってジードはなゼルビィを狙うのかと尋ねると、マクリルは「フン」と鼻で笑った後立ち上がる。

『あの胸の光を狙う奴は、他にも大勢いる。だから俺はその光を持つ者を、欲しがる奴等に高値売りつけて一儲けしたい！ その為に俺はその小娘を狙ってるだけだ!!』

『ふざけるな!! そんなのただの人身売買じゃないか!!』

『うるさいんだよ!! 仕事の邪魔すんな!!』

そう言うマクリルは左手にフック、右手にマグマサーベルを装着してジードに向かって駆け出し、フックとサーベルでジードを斬りつけるが……ソリッ

ドバーニングの装甲はやはり硬く、一切のダメージを与えられなかった。

『デヤアア!!』

さらにジードは両手でマクリルの両肩にチョップを叩き込み、続けて回し蹴りをマクリルに喰らわせる。

『ぐはああ!!』 ならば、これならどうだ!! 俺の最強武器!! 『マグマキャノン

!!』

だが、それでもマクリルは臆さず新たに両腕に装着した巨大なキャノン砲……  
「マグマキャノン」を装備。

それを見て大技が来ると判断したジードは即座に装甲を展開した右手にエネルギーを集中させ、炎をまとった72万度の爆熱光線を正拳突き姿勢で放つ「ストライクブースト」を発射。

『ストライク……ブーストオ!!』

同時にマクリルもエネルギーをチャージし、一気の放出する巨大なエネルギー光線を放ち、2人の技がぶつかり合うのだが……ストライクブーストはあっさりと打ち砕かれ、エネルギー光線はジードを飲み込み、ジードは身体中から火花

を散らす。

『うあああああ……』

火花を散らしながら、ジードは大きく吹き飛ばされてしまい、地面に激突。それと同時にカラータイマーも点滅を始める。

『ぐっ……うっ……』

『よっしゃ、効いたぜ!!』

「ジード!!」

大ダメージを受け、倒れるジードを見て悲痛な声をあげる千歌。

また曜や梨子、ダイヤやルビィもその様子を見てどうすれば良いのか分からず、困惑してしまふ。

『もう1発喰らいな!』

そう言うときマクリルはもう1発マグマキャノンから光線を発射しようとエネルギーをチャージする。

『ぐっ、うっ……!』

また、ジードは傷つきながらもなんとか立ち上がるのだが……既に身体

はフラフラであり、立つのがやっとであった。

「ど、どうしよう……私達じゃ、なんの助けにも……」

最初こそ、「少し怖い」とジードのことを評していた曜だったが、今までのジードの活躍から少し警戒が解けた為か、ジードのことを彼女は心配する。

「……いや、ルビィちゃんなら……！ ルビィちゃん!!」

「ひゃ、ひゃい!!」

梨子に突然名前を呼ばれ、驚きの声をあげるルビィ。

「実はね、私も前にルビィちゃんと似たような現象が起きたことがあるの。その時、私も手から炎が出た」

「そ、そうなんですか……!?」

それを聞き、ダイヤは「それであなただうなりましたんのですの？」と尋ねると、梨子は症状が治った時のことをダイヤとルビィに説明する。

「ジードに、助けて欲しいって願ったんです。そしたら、私の胸の光が分離してジードの方へ飛んで行って……それでジードが新しい姿になったんです。きつと、あの光はジードに力を与えてくれるんだと思う」

「だから私と同じように、ジードに願って！」と強く言い放つ梨子。

「ですが、ジードはベリアルと何か関係のある……」

しかし、どうやらダイヤはジードはベリアルと何か関係があるのかもしれないという疑念を抱く側の人間だったらしく、そのことに少なからず彼女は抵抗感があったのだが……。

「ベリアルとか、そんなこと関係ありません!! ジードは私の時も、今も……ルビィちゃんを守ろうと必死に戦ってくれています!!」

「そうだよ、ジードはみんなの為に戦ってくれて……ヒーローだよ!!」

「……お姉ちゃん、ルビィもね……ジードさんはあんなにポロポロになるくらい戦ってくれてる。だからルビィもジードさんを信じたい」

梨子と千歌、そしてルビィの3人に力強くそう言われ、ダイヤは困惑するが、ルビィはダイヤの返事を待たず、ジードの名を叫ぶ。

「ジードさああああん!! 負けないで……頑張れええええ三三」

ルビィがジードに向かって叫ぶと……彼女の胸から光が溢れ出し、光の球体となって彼女と分離。

光はジードのカラータイマーの中へと吸い込まれて、カプセルとなって無爪の手が届く。

そこにはレオによく似た赤い戦士の姿が描かれていた。

『レオの弟、『アストラカプセル』の起動を確認しました。レオとのフュージョンライズが可能です』

『ぐっ、分かった………!! 気合い………入れないと!! 融合!!』

無爪はジードライザーを構え、再びレオカプセルを起動させる。

するとカプセルの中から赤い戦士の「ウルトラマンレオ」が出現する。

『アイ、ゴー!』

さらに無爪はそのレオの弟「アストラ」のカプセルを起動させるとカプセルからアストラが現れる。

『ヒア、ウィー、ゴー!!』

『フュージョンライズ!』

『たぎるぜ!! 闘魂ン!!』

何時もよりも気合いの入った決め台詞を言うと、ジードライザーで装填ナックル

をスキャンし、トリガーを引いてライザーを掲げる。

『はああああ、はあ!! ジィーロード!!!』

『ウルトラマンレオ! アストラ! ウルトラマンジード!! リーオーバーフィスト!!』

頭部は逆立った髪や炎を思わせる形状に変化し、腕には手甲や包帯を装備している赤い姿、「ウルトラマンジード リーオーバーフィスト」へとジードは姿を変える。

『マグマキャノン!! 発射あ!!』

しかし、その直後にマクリルがマグマキャノンからエネルギー光線を発射しようとするのだが……光線が発射されるその前にジードが一瞬でマクリルに詰め寄ると右手に炎を纏った手刀を振るい、マグマキャノンを真っ二つに切り裂いたのだ。

『ぬあっ!?!』

切り裂かれたマグマキャノンは爆発し、その爆風に巻き込まれてマクリルは吹き飛ばされ地面を転がる。

『ぐっ!? なんだ!? さっきまであんなに弱っていたのに……!!』

『そんなもの……気合いだぁ!!』

『はぁ!!』

ジードから返って来た言葉に、訳が分からないといった様子のマクリル。

戦闘BGM「真紅の若獅子」

マクリルは慌てて両腕にマグマショットを装着し、2丁の銃から弾丸をジードに向かって放つが、ジードは両手に炎を宿した手刀で弾丸を全て弾き、一気に詰め寄るとマクリルの胸部に連続で何発もの拳を叩き込み、最後に顔面に強烈なパンチを喰らわせる。

『シエアアア!!』

『ぐあぁっ!!』

パンチを喰らい、大きく吹き飛んで倒れ込むマクリル。

『この姿になってから妙に身体が熱い……。凄く気合いが入る!! 魂が燃えるようだ!!』

『防御力、パワーはソリッドバーニングに劣りますが……。その分リオーバー



フィストはどうやら攻撃特化、手数で攻める形態のようです』

レムからの説明を受け、「成程」と納得して頷くジード。

そのままジードは倒れ込んでいるマクリルに近づくのだが……マクリルは不意に立ち上がって右腕をハンマーに変えた「マグマハンマー」をジードに振りかざすのだが、ジードはそれを両手で受け止めると押し返し、マクリルの腹部に蹴りを叩き込む。

『ぐあっ!?』

『ハアア、ダァ!!』

さらにジードは回し蹴りをマクリルの腹部に喰らわせ、後退するマクリル。

『クソがあ!!』

すると今度はマクリルは左腕をフックに変えてチェーンを伸ばしてジードの腕を拘束しようとするのだが、逆にジードはチェーンを掴んでフルスイングし、マクリルは空中へと放り投げる。

『シエアアア!!!』

『おわああ!!!』

そしてジードは足にエネルギーを纏って跳び上がり、空中のマクリルに連続キックを叩きこんだ後、さらに最後の一発の蹴りを繰り出す「バーニングオーバーキック」を炸裂させる。

『バーニングオーバー……キックウ……』

『ぐあああああ……』

それらを喰らい、耐えきれなくなったマクリルは空中で爆発し、ジードは地上へと着地するのだった。

「やった!! ジードが勝ったよ!!」

ジードが勝利し、そのことに喜びの声をあげる千歌。

また、そのことにルビィやダイヤ、曜に梨子もホッと一安心するのだった。

それからジードは空に向かって飛行して飛び去り、危険が去った今、ルビィは改めてダイヤと向き合い、自分の気持ちを伝えることにするのだった。

「お姉ちゃん、さっきルビィが言いたかったこと、聞いてくれる?」

「ルビィ……?」

「お姉ちゃん、ルビィ……ルビィね……!!」

\*

同じ頃、荒井は遠くからジードとマクリルの戦いを静観しており、彼はジードが新たな姿となり、マクリルを倒したことにニヤリと笑みを浮かべていた。

「あんな小物でも、少しは役に立つらしいな」

\*

その翌日、生徒会室にて。

「良かったね、希望が叶って？」

ダイヤが窓の外を眺めていると、不意に生徒会室に入って来た鞠莉にそう言われるのだが……。

「なんの話ですか？」

ダイヤはなんの話か分からないと惚け、誤魔化すのだった。

\*

一方、Aqoursの部室にて。

そこではルビィがアイドル部に正式に入部するための書類を書いており、それを千歌に提出して彼女は正式にAqoursのメンバーとなるのだった。

「よろしく願います！」

「よろしくね！」

「はい!! 頑張ります!」

しかし、そこで梨子がルビィが入部してくれたのは良いのだが、一緒に体験入部をした花丸はどうしたのだろうとルビィに尋ねると、彼女は「あっ……」と声を出し、どこか沈んだ表情を浮かべる。

「……いこっか、ルビィちゃん」

「えっ?」

不意に無爪からそんな言葉をかけられ、首を傾げるルビィ。

「昨日花丸ちゃんがルビィちゃんに言ってたこと、ルビィちゃんなりの言葉で言い返してやろう。『お前が言うな』って感じで」

無爪にそう言われ、少し考え込むルビィ。

だが、彼女はすぐに決意し、「うん!!」と頷いて彼女は花丸のいそうな場所に向かって駆け出して行ったのだった。

そして、花丸はというと……。

彼女はルビィの背中を押し、スクールアイドル部に入部させることに満足して図書室で図書委員の席に座っていた。

(これでマルの話はお仕舞い。もう夢は叶ったから、マルは本の世界に戻るの……)

すると、花丸の目に僅かに開けられた机の引き出しからμsの特集雑誌が見えており、彼女はそれを手に取るとμsのメンバーの1人、「星空 凜」の姿が映っているページを開く。

「大丈夫、1人でも……バイバイ」

そして、凜のページを閉じようとしたその時……。

「ルビィね!!」

「っ!? ルビィ……ちゃん？」

声のした方を振り返ると、いつの間にかルビィがそこに立っていたのだ。

「ルビィね、花丸ちゃんのこと見てた!! ルビィに気を使って、スクールアイドルやってるんじゃないかって!! ルビィの為に、無理してるんじゃないかって!! 心配だったから……。でも、練習の時も屋上にいた時も、みんなと話してる時も、花丸ちゃん……嬉しそうだった!!」

「っ……」

「それ見て思ったの。花丸ちゃん好きなんだって! ルビィと同じくらい好きなんだって!! スクールアイドルが!!」

ルビィに力強くそう言われ、花丸はハツとした顔を浮かべる。

「マルが……? まさか……」

「じゃあなんでその本、そんなに読んでたの？」

ルビィは机の上に置かれたMsの雑誌のことを指摘し、花丸は「それは……」  
と呟く。

「ルビィね! 花丸ちゃんと一緒にスクールアイドルできたらって、ずっと思っ

てた!!　一緒に頑張れたらって!!」

「うっ・・・・・・。それでも、オラには無理ずら。体力ないし、向いてないよ」

しかし、それでも花丸はルビイの言葉に「自分は向いていない」と首を横に振り、彼女の誘いを断ろうとする。

「そこに映ってる凜ちゃんもね、自分はスクールアイドルに向いてないってずっと思ってたんだよ？」

ルビイは雑誌の開かれた星空　凜のページを見ながら、花丸にそう呟き、それに彼女は「えっ？」とでも言うように驚いた表情を浮かべる。

「でも好きだった。やってみたいと思った。最初はそれで良いと思うけど？」

そこへ、いつの間にか千歌、梨子、曜、無爪の4人が図書室に訪れており、梨子の花丸にそう語りかけると千歌が手を花丸に差し伸ばした。

「・・・・・・」

それでも、未だに迷いを捨てきれない花丸。

そんな時・・・・・・。



「ルビィ！ スクールアイドルがやりたい!! 花丸ちゃんと!!」

目尻に涙を浮かべながらも、自分の本心を花丸に打ち明けるルビィ。

「あっ……。マルに、できるかな……?」

「私だってそうだよ？ 1番大切なことはできるかどうかじゃない、やりたいかどうかだよ!!」

手を差し伸ばしたまま、千歌は花丸に笑みを向けながらそう語りかける。

そんな彼女の言葉に、花丸も笑みを浮かべ、千歌のその手を……掴んだのだった。

「千歌ねえにしては、良いこと言ったんじゃない?」

「えっ? なにその言い方? なっちゃんひどい!」

頬を膨らませながらジトーとした視線を無爪に向ける千歌。

しかし、すぐになんだかおかしくなり、思わず笑ってしまう千歌と無爪。

それに釣られるように他のメンバーも笑い出し、手を握った千歌と花丸の手に他のメンバーも手を重ねていくのだった。

＊

「じゃあ行くよ！　せーの!!」

部員も5人になったことで、ネットで正式にスクールアイドルとして千歌は登録。

するとネットに「RANK4999」と書かれた文字が浮かび上がる。

「4999位・・・」

「上に5000組もスクールアイドルがいるってこと!?　凄い数・・・」

「スクールアイドルってホントに人気なんだね。　僕、多くて500組くらいだと思ってた」

今現在、活動しているスクールアイドルの数に梨子やルビィ、無爪は驚きつつも、

それでも尻込みすることなく、花丸は笑顔を浮かべて右手を挙げる。

「さっ、ランニング行くぞー!!」

『おー!!』

そして一同はランニングする為に外へ出て行くのだが……その時、ルビィは机の上に置かれたあの *Ms* の雑誌に一瞬だけ視線が向くと……彼女は嬉しそうに笑い、自分もランニングする為に外へと向かうのだった。

「フフ♪」

武装暴君 マグマ星人 マクリル

右目に傷があるのが特徴のマグマ星人。

サーベルやフック以外にもマグマキャノン、マグマショット、マグマハンマーなど様々な武器を扱う為「サーベル暴君」ではなく別名が「武装暴君」となっている。特にマグマキャノンはソリッドバーニングですら耐えきれない程の強力な威力を持つ。

リトルスター保持者を狙う宇宙人に高値で売るためにリトルスターを発症したルビィを捕えようとした。

# ラブライブ! ジードサンシャイン!!

---

著者 ベンジャー

発行日 2019年11月4日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/127992/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---